はじめに

阪神淡路大震災と神戸児童連続殺傷事件を受けて設置された「心の教育緊急会議」の提言は、「新しい時代を拓く心を育てるために」（中央教育審議会答申 1998 年 6 月）のベースになった。「家庭を、地域を、学校を見直そう」との各章立てで、具体的な教育施策が展開されている。「心の教育緊急会議」の提言を受けて、兵庫県立教育研修所心の教育総合センターが 1998 年４月にスタートし、兵庫県在住の中学２年生の社会体験「トライやる・ウィーク」もはじまった。「トライやる・ウィーク」は、地域の人的資源を子どもの心の成長に生かす画期的な教育施策として、10 年以上継続して展開されている。一方、心の教育総合センターは、以下の業務を行ってきた。

(1) スクールカウンセラー等への指導・助言及びそれらの活用と調査研究に関すること。
(2) 心の悩みの相談及び教育相談の企画・運営に関すること。
(3) 心の教育に関する特異な問題への緊急対応及び学校の対処方法の助言に関すること。
(4) 心の教育に関する教職員等に対応する研修及び啓発並びにそれらの助言に関すること。
(5) 心の教育に関する調査・研究に関すること。
(6) その他、心の教育に関すること。

すなわち、不登校・いじめなどの心の悩みの相談業務のみでなく、心の教育に関する予防的開発的な授業案を作成し、展開することが業務として掲げられたのである。そして、小・中・高等学校における具体的な「心の教育授業案」の開発・実践研究が「心の教育授業実践研究」（第１号：1999.3、第２号：2000.3、第３号：2002.3、第４号：2003.3、第５号：2003.3、第６号：2003.3、第７号：2005.3）として取りまとめられた。それらの授業案の柱は、子どものストレスと仲間づくりに集約され、参加体験型の授業案となっている。また、授業効果についても、アンケートなどを活用しながら検証してきた。

一方、「命の大切さ」を子どもたちが実感できる教育プログラムを体系化するために、「命の大切さ」を実感させる教育プログラムが策定（2005 年）され、５つの教育プログラムモデル① 誕生の喜びと感動、② 成長の支援への感謝、③ 限りある命の尊さ、④ 理解し合う心に支えられた命、⑤ 尊い命を守るために、が提案された。また、その教育プログラムを枠組みとし、実践事例集（Ⅰ：2007.3、Ⅱ：2008.3）が刊行された。

本実践事例集は、その第３弾である。２年間の教育実践を各委員が取りまとめ、また「命の大切さ」を実感させる教育実践研究講座の受講者の実践を一部紹介した。

これらの実践が、子どもの心の成長に資することを願ってやまない。

平成 22 年３月

平成 20、21 年度「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム実践推進委員会」
委員長　冨永　良喜
兵庫県立教育研修所　心の教育総合センター所長

「命の大切さ」を実感させる教育のこれまでとこれから

１　「命の大切さ」を実感させる教育について

実践事例集Ⅲの刊行にあたり、『「命の大切さ」を実感させる教育』について、再考してみたい。

心の教育総合センターの業務の一つは、「心の教育に関する、教職員等に対応する研修及び啓発並びにそれらの助言に関すること」である。それは「不登校・いじめ・非行などが起こってからの対応だけでなく、予防的な心の教育の取組こそ、わが国の教育にとって不可欠な課題である」と、当時の上地安昭心の教育総合センター所長はじめ所員の一致した考えであり、「心の教育緊急会議（1997 年）」の提言を受けての教育施策の一つであった。

上地（1999）は、「心の教育」の目標を「生命の尊さを実感し、愛情豊かに他者と共存し、個性的に社会を生き抜く力を育むこと」とし、「心の教育」を、①人間の命は、何事にも代え難い、この世で最も尊い存在であり、一度失ったら決して取り返しのきかない唯一のものであるとの実感を育てる、②周囲の人々への思いやりとやさしさ、そして愛情を持って接し、個人的な力の強弱を越えて共に友和的に生きる心を育てる、さらに、③各人の個性を尊重し、それぞれの個性に応じた社会的な生活力を育むことである、と定義した。そして、心の教育実践授業案の作成に、多くの教師との共同研究で取り組んできた（「心の教育授業実践研究」第１号:1999.3～第７号：2005.3)。冨永(1999)は、心の授業（心の教育実践授業）を「ストレスマネジメント教育、人間関係体験、自己発見・自己開発」の３つの内容から構成されるとした。これらの教育実践は、道徳、総合的な学習の時間、教科教育のすべての教育活動の中に位置づけられるが、とりわけ、道徳の時間に、心の授業が実施されることを期待した。

心の授業の３つの内容は、構成的グループエンカウンター、ピアサポート、ストレスマネジメント、ソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング、内観といった心理学・臨床心理学に依拠している。わが国の教員養成大学では、それらの教育内容は、必須ではない。それらの教育実践にあたっては、十分な教員研修が必要であり、兵庫県下全学校での実施は困難であった。そのため、この授業内容のみでは、命の大切さを実感する教育を展開することに限界があると思われた。

そこで、「命の大切さを子どもが実感するために」という観点を原点とし、これまでの教育実践を体系化してみようという試みが、「命の大切さを実感させる教育」の構想であった。わが国の有識者の声も収録し、兵庫県教育委員会及び兵庫県立教育研修所の総力をあげて、「命の大切さを実感させる教育」がまとめられた。そして、具体的には、命の大切さを実感させる教育プログラムモデルとして、① 誕生の喜びと感動、② 成長の支援への感謝、③ 限りある命の尊さ、④ 理解し合う心に支えられた命、⑤ 尊い命を守るために、の５つを例示した。

２　「道徳教育」と「心の健康教育」の両輪で

学習指導要領では、道徳教育の目標は、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこと」とされている。道徳性とは、「良い行いと悪い行いを区別し、道徳的規範に従う心、能力、判断のこと」とされている。また道徳教育を進めるにあたって、「教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない」とされている（文部科学省、2009)。

「人間関係を深める」と「自己の生き方についての考えを深める」は、まさに「心の授業」の内容と一致する。しかしながら、道徳の副読本として作成された「心のノート」には、「怒り」「悲しみ」といった負の感情や「いじめ」「喪失」といった心が傷つく出来事は取り上げられなかった。例えば、人間関係体験について、ストレスの観点から授業を組み立てると、道徳の時間でも行うことができる。しかし、ストレスは人間関係のみでなく、プレッシャーなどのストレスや命を脅かすトラウマティック・ストレスもある。道徳では、規範意識形成のために「～あるべき」というメッセージが強く、それらのストレスを取り扱うことはできない。また、「いじめは悪いことだとは知っているが、むかつきやイライラをどうすることもできない」と感じている子どもがおり、メッセージを送るだけでは限界がある。

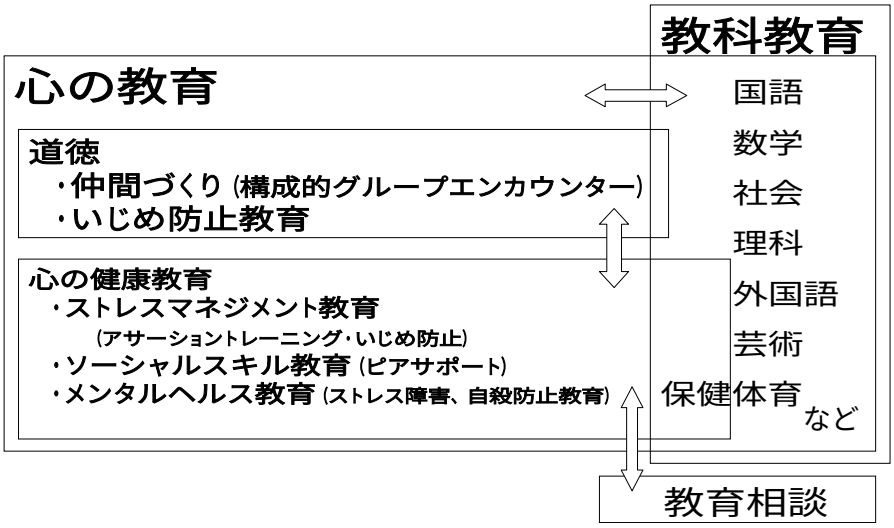


表１　心の教育と道徳・心の健康教育・教科教育との関連

筆者は、中国・四川大地震後の心のケア活動に従事したとき、中国では道徳とは別に「心理健康教育」という科目が、2003 年から設置されたことを知った（冨永ら、2010)。また、イギリスでは、SEAL（Social and Emotional Aspects of Learning；社会性と感情の学習）プログラムが、いじめや暴力防止に効果をあげており、2011 年までに全小学校に導入が予定されている。すなわち、それらの教育の学問的背景は、臨床心理学や医学・保健学であり、わが国では保健体育の授業で、少しふれられる程度である。

教育プログラム	代表的教育実践のテーマ	教育プログラム	代表的教育実践のテーマ
①誕生の喜びと感動	フィールドワーク「いのちの発見」 家族から「自分が生まれたとき」の話 動植物の調べ学習 妊娠出産育児の体験にふれる 産婦人科医師・助産師の講話	④理解し合う心に支えられた命	ふれあい体験（肩たたきなど） ノーテレビ・ノーゲーム・デー あいさつの気持ちよさ ネット社会のルールとマナー アサーション・トレーニング 構成的グループエンカウンター
②成長の支援への感謝	動物の飼育・植物の栽培 ぼくわたしのいいところ発見 絵本の読み聞かせ 私の年表づくり 20才の私への手紙 1／2成人式 高齢者とのふれあい体験	⑤尊い命を守るために	どんな気持ちかな？（悲しみ・怒り・喜びの感情） ヒヤリハットマップづくり こんなときどうしよう（防犯教育） いじめへの対処 ストレスへの対処（ストレスマネジメント） アサーショントレーニング 防災と災害後の心のケア 暴力の知識と防止 自殺防止教育 DV防止教育（デートDVについて） 災害被災者の声を聴く 犯罪被害者遺族の声を聴く
③限りある命の尊さ	ペットの死 インスタント・シニア体験 家族が一番悲しむことは 犯罪被害者遺族の手記 救急隊員の話 生命倫理（尊厳死・臓器移植） ホスピス医療従事者の講話		

表２　５つの教育プログラムと代表的教育実践テーマ

心の健康教育とは、人が怒りや悲しみを抱えたとき、人を傷つけず、自分を傷つけないで、自分の人生をよりよく生きるための方法を学ぶ教育である。だから、むかつきやイライラを和らげる方法を実際に体験したり、イライラを適切な表現へのエネルギーにする方法を提案する。すなわち、子どもたちがストレスについて学び、ストレスとのよりよいつきあい方を身に付ける教育でもある。心の健康教育は、子どもたちが生き生きとした生活が送れるように願い、今の学校教育のなかで、担任教師がスクールカウンセラーや養護教諭と連携して実践をすすめている。

すなわち、学問背景の異なる心の健康教育を道徳の時間に位置づけることは、無理があることがわかった。わが国もイギリスや中国のように、心の健康教育を一つの柱として展開する必要があるのかもしれない。

５つの教育プログラムの代表的な教育実践のテーマを、表２に記した。いずれも、体験学習を重視している。体験は、幼児や高齢者とのふれあいや、地域の専門家（助産師や産婦人科医など）や被災者・被害者などの体験を聴く活動である。

すなわち、命の大切さを実感させる教育は、道徳と心の健康教育の両輪で運用することが必要であり、かつ教科教育の中での実践も不可欠である。例えば、防災教育は、尊い命を守るための教育であり、建築学・自然科学の知恵が必要である。また、被害者や被災者の人権を守るためには法学の知識が必要である。命の大切を実感させる教育は、すべての学問の集積が求められるのである。

３　個別の配慮と教育相談

命の大切さを実感させる教育は、子どもの個々に生きてきた内面をゆさぶる。愛する肉親を失った子どもは、ペットの死を取り扱った絵本をとおしての授業すら、つらすぎるかもしれない。親からの過度の期待に沿って頑張り続けている子どもは、ストレスマネジメントでのリラックス体験で、不快な気分になるかもしれない。大切なことは、教師が、授業に参加した子どもがどのような内的体験をしたのか、絶えず関心を払い続けることである。

授業の最後に、振り返りのアンケートを必ず実施してほしい。ストレスに関する授業であれば、10 項目前後の気分調査表に、自らの気分をチェックし、授業の感想を求める。命の授業であれば、感想を求める。評定尺度法であれば、数量化をして、個々の子どもの前後のグラフを作成する。感想という質的データであれば、感想をＫＪ法などで、分類し、カテゴリーごとに人数を記載し、整理する。そのとき、授業に否定的な感想を書いたり、なにも書かなかった子どもは、それだけで、個別の配慮を必要とする子どもである。個別に、声をかけることを必ず心がけてほしい。「あの授業、つまらなかったんだね」「いやな気持ちになったんだね」と気持ちを認めるメッセージを送ってほしい。その教師の個別のかかわりが、悩みを抱え込んで苦しんでいた子どもが、よりよく生きるきっかけになり、本来の生きる力を発揮していくきっかけになるだろう。

実践事例集Ⅲは、それら教育活動が収録されている。実は、これら命の大切さを実感させる教育を展開するなかで、個別にケアした事例がたくさんあげられた。教育実践のなかで、それらの事例を紹介できれば、この取組の価値がより伝わるであろう。しかし、プライバシーの保護の観点から、紙面に載せることはできない。それらのことも含めて、本実践事例集を参考に、是非、命の大切を実感させる教育プログラムを展開してほしい。

平成 22 年３月

平成 20、21 年度「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム実践推進委員会」
委員長　冨永　良喜
兵庫県立教育研修所　心の教育総合センター所長

【参考・引用文献】

・文部科学省　『学習指導要領　第３章　道徳』　2009
・冨永良喜　心の教育と心の授業　『心の教育授業実践研究』第１巻　兵庫県教育研修所心の教育総合センター　1999
・冨永良喜・藤本正也ら　四川大地震ＪＩＣＡこころのケア支援プロジェクト事前調査　トラウマティック・ストレス　2010
・上地安昭　心の教育の実践に向けて　『心の教育授業実践研究』第１巻　兵庫県教育研修所心の教育総合センター　1999

目　　次

第１章　実践事例集の活用について

１　「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例内容一覧・・・・・・・・・・・・　1
２　「教育プログラム」の使い方のポイント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

第２章　実践事例

事例１　人は一人では生きられない　（三木市立緑が丘東小学校第６学年）・・・・　5

事例２　今生きていること －守られてきた自分たちの命－
（芦屋市立精道中学校第３学年）・・・・・　18

事例３　きずなとことば　（西宮市立大社中学校第２学年）・・・・・　30

事例４　生かされていることへの感謝 －「運命」から「使命」へ－
（県立農業高等学校第１学年畜産科）・・・・・44

事例５　「人とのつながり」から考える「命」　（県立姫路聴覚特別支援学校）・・・・・66

第３章　「命の大切さを実感させる教育プログラム」授業プラン

１　「命の大切さを実感させる教育プログラム」授業プラン内容一覧・・・・・・・・・・・・93
２　授業プランの活用について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・94

授業プラン１　今を大切に生きよう　（小野市立下東条小学校第４学年）・・・・・・・・・・ 96

授業プラン２　自分や友達を大切に、人間関係を広げよう
（明石市立鳥羽小学校第５学年）・・・・・・・・・・100

授業プラン３　災害時、ストレスを軽減させる避難所にしよう
（新温泉町立浜坂東小学校第６学年）・・・・・・・・・・104

授業プラン４　メッセージ（生きる力）を発信しよう
（西宮市立西宮養護学校高等部）・・・・・・・・・・109

授業プラン５　仲間っていいな！～力を合わせて、お出かけしよう～
（県立氷上特別支援学校高等部第３学年社会コース）　・・・・・・・・ 113

◇平成 20、21 年度「命の大切さ」を実感させる教育プログラム実践推進委員会設置要項
◇平成 20、21 年度「命の大切さ」を実感させる教育プログラム実践推進委員会委員名簿
◇平成 20、21 年度「小・中・高等学校『命の大切さ』を実感させる教育実践研究講座」の受講者名簿（一部）

第１章　実践事例集の活用について

１　「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例内容一覧

	番号	学年	テーマ	主な学習・体験	実践の参考となる 教育プログラムモデル
実践事例	1	小学校 第６学年	人は一人では生きられない	○生き物として、他の「生き物」と一緒に生きている私について考える。 ○人として「人」と一緒に生きている私について、学校行事をとおして考える。	②・③
	2	中学校 第３学年	今生きていること －守られてきた自分たちの命－	○阪神淡路大震災の当時の様子を、保護者や教師から聞き取る。（２学年時） ○修学旅行で訪れる沖縄の文化や歴史を学び、文化発表会で発表する。	①・③
	3	中学校 第２学年	きずなとことば	○インターネット上の書き込みを体験し、問題点に気づく。 ○相手の心情を理解しながら、自分の思いを伝えることの大切さを学ぶ。	④・⑤
	4	高等学校 第１学年	生かされていることへの感謝 －「運命」から「使命」へ－	○文学作品や農業実習等をとおして「生かされている」ことについて考える。 ○支えてくれた人のおかげで今があり、生きていることに感謝の気持ちをもつ。	①・②・③
	5	特別支援学校 小・中・高等部	「人とのつながり」から考える「命」	○ルールを守って仲良く遊ぶ。 ○友達のよいところを認め、他人を思いやる気持ちをもつ。 ○相手の立場から相手の気持ちを考える。	①・②・④

（参考）教育プログラムモデル：①誕生の喜びと感動 ②成長の支援への感謝 ③限りある命の尊さ ④理解し合う心に支えられた命 ⑤尊い命を守るために

２　「教育プログラム」の使い方のポイント

小学校事例６

「『命の大切さ』を実感させる教育への提言」第Ⅱ部　実践編　教育プログラムモデルの項目に沿って実践をまとめています。

１　テーマ
かけがえのない命・つながる命

２　実践のねらい
身近な人との関わりをとおして、老いや病にふれる体験や、死の悲しみにふれる体験などから、命の有限性や死の普遍性・絶対性に気づき、自他の命のかけがえのなさに思いをはせる。さらに、死の悲しみや苦しみに向き合う人々の思いに接し、人とのつながりを感じ、強く生きようとする心について考える。

３　テーマ設定の理由
(1)　本校の概要と児童生徒の
本校区は、淡路島の北部の自然豊か　大橋の開通により阪神間へのアクセスは便利になったが、過疎化には　は３５名までに減少している。子どもたちの暮らしぶりも変わり、豊　非常に少なくなり、都会の子どもたちとそれほど大きな差はない。子どもの遊びの形態も変化し、テレビ、ゲーム、パソコン等が中心となり、「命」を軽視した様々な情報刺激もあふれている。また、農村地帯であるため３世代同居家庭が多く、祖父母を含めた地域の老人と接する機会は比較的多くあるが、高齢者はかつてのように人生の終末を自宅では迎えることは少なく

各学校の実践に至った経緯や背景・児童生徒の実態について記載しています。

(2)　指導のポイント
【感動の体験】
・死というものを見つめ、死
自分の命は両親の願いの結晶で　せる。
【感性を育む】
・遺された者の悲しみを通して、自分　っていることを実感させる。
【想像力の育成】
・すべての生き物には寿命があり、自分

実践のねらいを達成するために、どのような感動の体験をするか、子どもたちの感性や想像力にどのように働きかけるかなどの「指導のポイント」を記載しています。

４　事前
(1)　先生の準備
・授業の中だけでなく　。
・教員自身の死に対する思い
・家庭や地域に学習ついての　する。
・現在悲嘆にある子どもが存　事前事後の個別指導を充実させる。

・テーマに関連した資料や情報の収集
・子どもたちの状況の把握　　等
実践に先立って必要な教師の準備について記載しています。

(2)　教育課程上の位置づけ
・国語
・理科（植物・生き物等の分野）
・体育（保健分野）
・家庭
・道徳
・総合的な学習の時間

道徳・特別活動・教科・総合的な学習の時間といった教育課程上の位置づけや単元構想について記載しています。

(3)　子どもたちの準備
・自尊感情を高める体験をする。
・デジタルカメラの使用技術を習得

実践を行う前に、学習や体験の内容について、子どもたちに興味や関心を抱かせ、主体的に取り組めるようするためにはどのような準備が必要かについて記載しています。

(4)　家庭・地域との連携
・地域の人々に対し、アンケート調査や聞き取り学習を実施することについての理解を求める。
・特別養護老人ホームで継続的に体験学習ができ　協力に依頼する。
・祖父母、その知人、家族に対し学習のねらい　する。

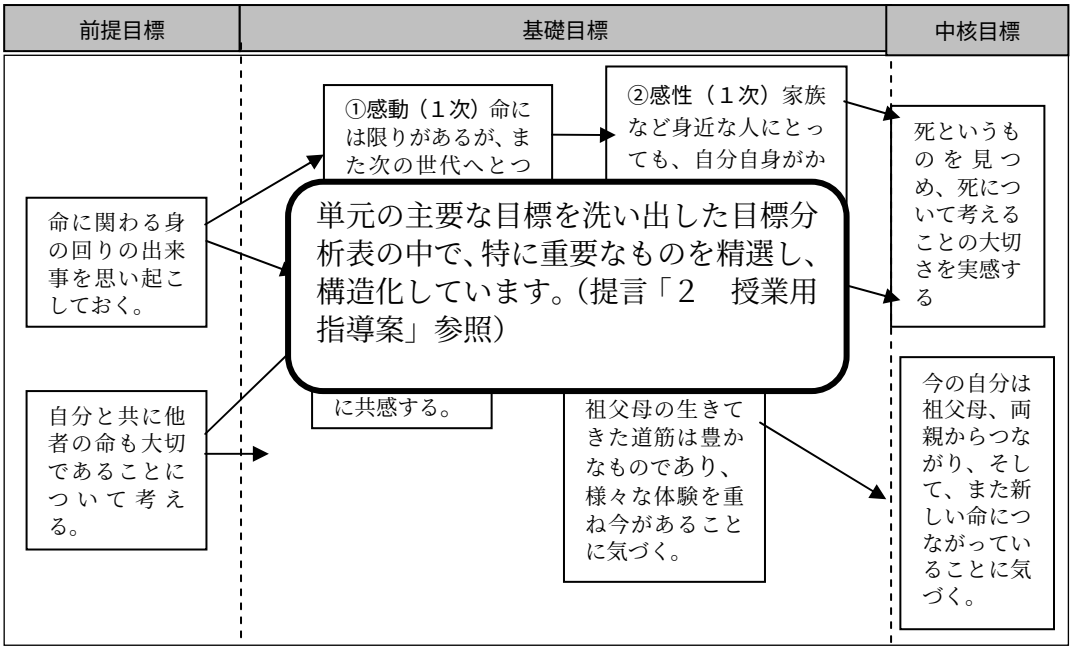
事前に家庭や地域へ依頼する事項や配慮すべき事項について記載しています。

6　目標分析表

学習活動		感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○自尊感情を高める体験をする。	○自他の命の存在に気づく。	○命に関わる身の回りの出来	○自分と共に他者の命も大切	
1次（5時間）	○「命」をテーマに写真を撮り、話し合う。 ○家族や大切な人、またはペットを亡くした体験を出し合う。	○	つながりを感じる。	を実感する。	○一つの命には限りがあるが、その命はつながっていることを理解させることができたか。

縦軸に学習の内容を、横軸に３つの指導のポイント「感動の体験」「感性を育む」「想像力の育成」を観点として配し、子どもたちにどのような力を身につけさせたいのかという目標を明確にしています。（提言「２　授業用指導案」参照）

7　目標構造図



単元の主要な目標を洗い出した目標分析表の中で、特に重要なものを精選し、構造化しています。（提言「２　授業用指導案」参照）

8　事前の教員研修と指導の概要

（1）事前の教員研修

研修内容	
a	○自尊感情を高める体験をする。 <提言 ・『わたしはわたしが好きです。なぜなら ・『ここがあなたのいいところ』
b	○自己再発見の体験をする。<提言 P68 「私の人生の振り返り」
c	○医療施設や老人福祉施設等で行われて ・老・病・死と向き合う人々の様々な考え　換をする。

子どもたちに指導する前に、教員自身が実践するテーマに関して、どのような手法や内容で研修を行ったかについて記載しています。
（２）指導の概要の中で研修の実施時期について明示しています。

（２）指導の概要

	研修内容
事前	○ 自尊感情を高める体験をする。（１時間） 教員研修　a
1次（5時間）	○「死」を見つめる 1　季節の変化による生き物の様子（１時間） 2　校庭に出て子どもたちにデジ せ、発表する。（１時間） 3　家族や大切な人、ペット等を（１時間） 4　「北朝鮮拉致被害者の会　有 然奪われた家族の痛みと悲しみに共感する。（２時間） 教員研修　b
2次（10時間）	○ 自分と祖父母の伝記を作る 1　家族から聞き取ったりして自分の 人生を振り返る。（２時間） 2　自分の祖父母の今までの人生の道筋を聞き取り、まとめる。（２時間） 3　ゲストティーチャーで来てくれた祖父の今まで生きてきた道筋を聞く。（１時間） 4　聞き取った自分の祖父母の伝記を作る。（３時間） 5　できあがった伝記を発表し合い、人生の豊かさと多様さを感じ、誰の人生もかけがえのない大切なものであることを実感する。（２時間）

学校の状況、子どもたちの実態や発達段階に応じて、計画・実施された内容を、指導の概要として示してあります。

指導実践の内容について詳細に記載している頁数を示しています。

９　指導実践

【展開】

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	1　今の自分にとって大切な人やペット等を想いうかべ、みんなに紹介する。 ・「わたしはお母さんが大好きで、一番大切な人です。」 ・先生にもそんな悲しいことがあったんだ。 ・もし、今、先生のお父さんが生きていたら先生は何をしてあげますか。	「先生は交通事故により、突然にお父さんを亡くしました。お父さんは、大学卒業直前の弟に最後の仕送りをした後に事故にあいました。その後、しばらく電話のベルが怖かったのです・・・。」
展開	親が、我が子を亡くした悲しみとはどんなものかを感じとってください。 ・親が子どもを亡くすと、こんなに悲しいんだ。ぼくのお母さんやお父さんも同じなんだろうと思う。 ・このお父さんは、奥さんを亡くして、また子どもを亡くしたんだ。心はぐちゃぐちゃになってしまうだろう。	

・教師の説明例
・板書例
など実施した授業の内容や指導上留意すべき点について記載しています。

子どもたちの反応（発言・感想など）についても記載しています。

子どもたちの気づきを促したり思考を深めたりするための教師の主要な発問を記載しています。

第１章　実践事例集の活用について

実践事例１

人は一人では生きられない

三木市立緑が丘東小学校第６学年

１　テーマ

人は一人では生きられない

２　実践のねらい

周囲の自然、人や自分自身と向き合い、それらとの接点で自己を認識するということをとおして、人間が一人ではなく、支え、支えられて生きている存在であることを実感する。

３　テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は、住宅街の中にあり、各学年３学級で、市内では最大規模の学校である。しかし、子どもたちの様子を見ると、人数は多いが子どもどうしや地域の人との結びつきは濃厚とは言えない。行事や教科等の授業で目立つと集団から阻害されるのではないか、と恐れている子どももいる。

そうした子どもたちだからこそ、皆で同じ目標を持ち、それに迫る努力を一緒にして、得られた成果をともに喜ぶという体験が不可欠であると考えた。変動の激しい世の中で自分を見失わずに生きぬく子に育てるためには、一人で勝手には生きられないということを教えなければならないし、一緒に生きる仲間・先輩・後輩が確かにいるという安心感も与えたい。

６年生ならではの学校生活を送る過程で、自然や人とのつながりの中で成長する自分を認識し、周囲に感謝できるようになって、卒業させたいと考え、「人は一人では生きられない」というテーマを設定し、本プログラムを実践した。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】

・自分にとっての身近な生き物の命を大切に感じさせる。
・友達や先生とより高次の目標を持って懸命に生き、達成感を得させる。

【感性を育む】

・生き物にも自分にも命が等しく一つ授けられていて、皆がその命を全うしようとする本能を持つことに気づかせる。
・学校行事等で達成感を得る過程で、友人や保護者、先生、地域の方々への感謝の気持ちを抱かせる。

【想像力の育成】

・自分が「良い」と思うことであっても他者にとっては不都合なことがあり、また自分（他者）の喜びが、他者（自分）の喜びになることもある、ということに気づかせ、自分の感情や状態を客観視しようとする姿勢、他者の感情や状態を想像しようとする姿勢を持たせる。

４　事前

(1) 先生の準備

・旭山動物園にかかわる資料を読み、現地を視察する。
・歴代の６年生の、運動会・連合体育祭・修学旅行・音楽会等での様子が分かるＤＶＤを作成する。

(2) 教育課程上の位置づけ

・道徳
・特別活動
・総合的な学習の時間

(3) 子どもたちの準備
・これまで生き物と接してきた体験を振り返る。
・５年生までの自分が諸行事等にどう臨んできたか、また、６年生の姿がどう見えていたかを振り返る。

(4) 家庭・地域との連携
・家庭や地域の人々に対し、命の大切さを実感させる教育を進めていくねらいや趣旨を伝え理解と協力を求める。
・学習の様子を通信等で紹介し、６年生ならではの学校生活を過ごす日々を伝える。
・卒業生たちとの接点を大切にし、６年生にとっても卒業生にとっても、お互いが学び合う場となるようにする。

５　本校の実践の特色
(1) 人もまた自然の一部であるという捉え方と生き物からの学び
(2) ６年生ならではの学校生活の中で得られる、人と一緒に生きる感動・実感
(3) 先輩・後輩たちとの絆

６　実践にあたっての教師の思い
この仕事に就いてから、何年生の担任であっても「今ここにみんなと一緒に生きている実感」を味わわせたいと思ってきた。人間どうしのつながり方がますます希薄化する昨今にあっては、その思いはいっそう強い。

元奈良女子大学附属小学校の池田小菊先生は、ともに成長の途上にある教師と子どもが、燃えるような思いを持ち必死に生きる中にだけ教育があるということを述べている。

教師として、伸び盛りの子どもに及ばずとも、自身もまた、まだ成長しようとする存在でありたいと思う。

子どもにプレッシャーをかける場面はあるとしても、自分が安泰な状態にいるのではなく、ともに切実に生きる存在でありたいと思う。

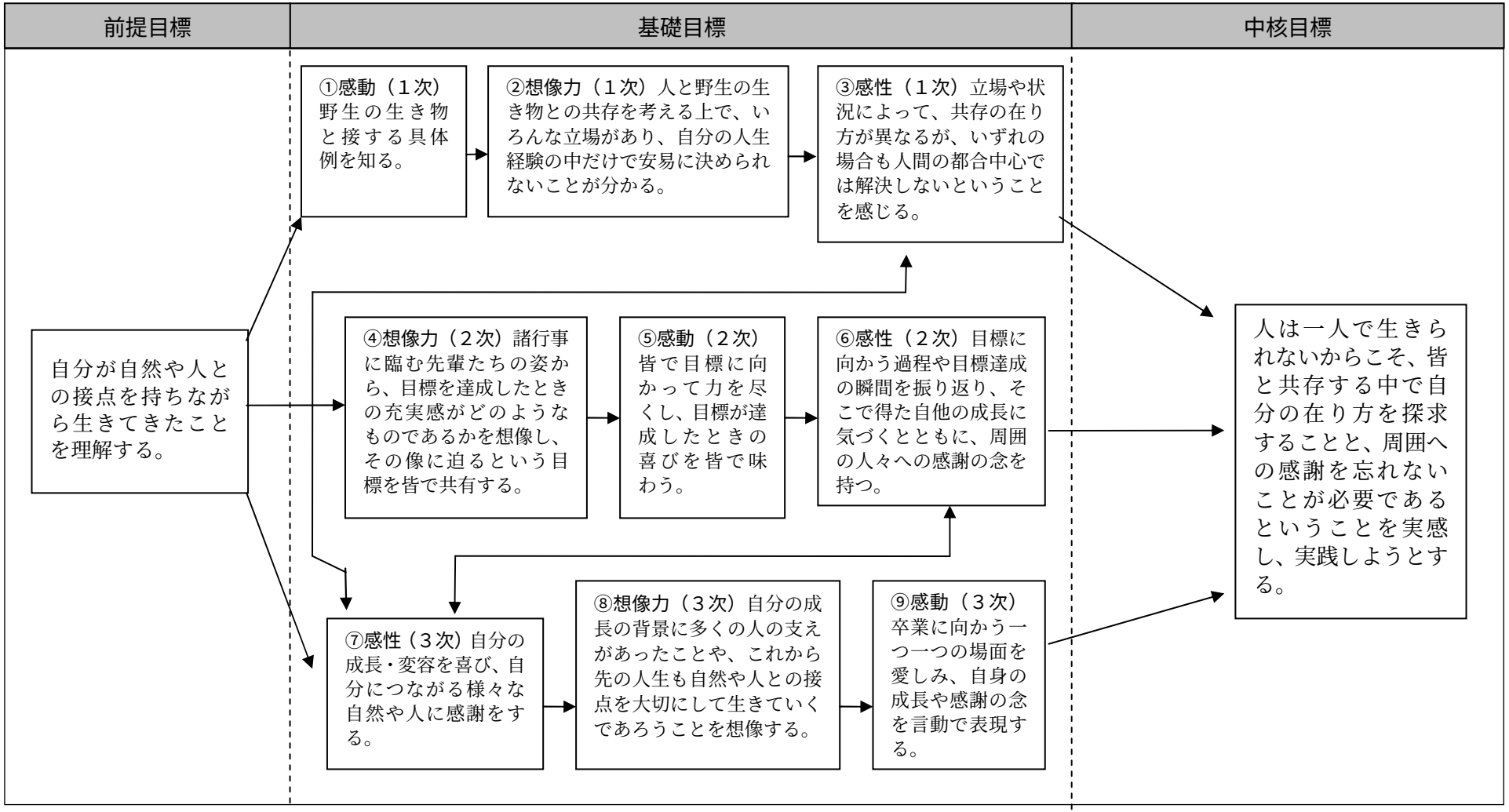
人間どうしのつながりが希薄化しているのは、大人社会がそうさせているからでもある。だからこそ、せめて学校という場において、「今ここにみんなと一緒に生きている実感」を味わわせたいのである。

それは、自他の命を大切にすることに直結すると信じている。

7　目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○今までで、生き物や人との接点で感じてきたこと、考えてきたことを話し合う。	○自分の記憶をたどり、楽しかったこと、よかったことを振り返る。	○自分が生き物や友達といろんな接点を持つことで生きてきたことを考える。	○もし、生き物や人との接点がなかったら、どうなっていたかということを考える。	○テーマ「人は一人で生きられない」に関心を持つことができたか。
1次（6時間）	○自分の好きなペット・好きな生き物について語り合う。 ○旭山動物園の動物について考える。 ○獣害について考える。 ○「ヒトもサルも愛した写真家」を題材に、人と自然の生き物との共存について考える。 ○「サルと一緒に生きる早紀ちゃん」を題材に、人と自然の生き物との共存について考える。	○自分のことを語り、友達の話を聞く。 ○旭山動物園の動物たちが生き生きとしていることを知る。 ○獣害で甚大な被害が出ていることを知る。 ○下北半島で、ヒトとサルとの狭間で迷い、苦悩する写真家の松岡さんの心情を知る。 ○淡路モンキーセンターでサルと一緒に生きる早紀ちゃんの、生き物への関わり方を知る。	○同様の体験に共感し、異なった体験に驚く。 ○旭山動物園で過ごす動物の側に立って、どういうところが心地良いかを考える。 ○人と自然の生き物との共存が可能か否かについて考える。 ○サルを駆逐したい地域の人の心情も、サルを大切にしたい松岡さんの心情も、ともに理解した上で、自分ならどうするかを考える。 ○サルの視線でサルに接し、個々のサルのことをとてもよく理解している早紀ちゃんに共感する。	○同様の体験への共感、異なった体験への驚きのいずれであっても、生き物への接点が誰にもあることを考える。 ○動物の側に立って、ペットとして飼われる立場と野生で生きる立場、そしてその中間とも言える動物園で生きる立場のそれぞれについて考える。 ○農作物を荒らされる人、生活を脅かされる人にとって、自分たちに被害を及ぼす動物がどう映るかを想像する。 ○松岡さんが苦渋の決断をして地域の人に協力することにした、その心情を想像し、人が便利・効率を優先させればさせるほど人と自然の生き物との共存が容易でなくなることを考える。 ○なぜ、早紀ちゃんがサルと気持ちを通わせ、一緒に生きることができるのかを考える。	○自分の生き物観を語り、友達の生き物観に関心を持つことができたか。 ○人に飼われる動物の側に立って想像できたか。 ○獣害の影響を受ける人の立場で考えられたか。 ○松岡さんの苦悩を想像し、自然の生き物との共存について考えられたか。 ○早紀ちゃんのサルとの関わり方から、自然の生き物との共存について考えられたか。
2次（10時間）	○運動会をとおして、「人と一緒に生きている私」について考える。 ○連合体育祭をとおして考える。 ○修学旅行をとおして考える。 ○音楽会をとおして考える。 ○１・２学期をとおして考える。	○運動会・連合体育祭・修学旅行・音楽会等で友達や先生と同じ目標を持ち、その達成に向けて一緒に力を尽くし、一緒に成果を喜ぶ。 ○事後に一緒に振り返る。	○先輩たちの映像を見ることで友達や先生と同じ目標を持ち、平坦ではない道のりを一緒に越えていこうと感じる。 ○学びを共有したり、周囲への感謝の念を持ったりする。	○目標にした先輩たちの表情や涙の意味を想像し、自分がその舞台に立ったときに同じ心情になることで、時空を越えた一体感を持つ。	○目標や感動を共有できたか。 ○振り返る場面で、自分の成長・変容に気づき、周囲への感謝ができたか。
3次（3時間）	○小学校生活を終えようとしている自分を見つめ「『いろんな生き物』『いろんな人』『いろんな私』と一緒に生きる私」を考える。	○卒業式のセリフ作りや練習をしながら、小学校生活を振り返る。	○成長・変容した自分を見つめ、周囲への感謝の念を持つ。	○自分の成長の背景に、多くの人の支えがあったことを想像する。	○自分の小学校生活を振り返って、自分の成長・変容に気づき、周囲への感謝ができたか。
事後	○「人は一人で生きられない」をテーマに学習してきたことを振り返る。	○学習を終えてのまとめを書く。	○「人は一人で生きられない」ということについて考える。	○自分の中学校生活にどうつなげるか、自分たちと共通の体験を持つ先輩・後輩とどういうつながりを持つかを考える。	○自分の考え方、次へのつなげ方を明確にできたか。

８　目標構造図



（凡例）①感性（１次）:「①」は指導の順路、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「（１次）」は学習活動が「１次」であることを示す。

９　事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修（実施の時期については、「(2) 指導の概要」の中に明記）

	研修内容
a	○旭山動物園にかかわる資料を読み、可能であれば現地を視察する。 ・生き物本来の姿が見える飼育・展示の工夫を知り、映像にとって子どもに伝える。
b	○歴代の６年生の、運動会・連合体育祭・修学旅行・音楽会等での様子が分かるＤＶＤを作成する。 ・その場面に注ぐ先輩たちの思い、６年生としての誇りを見せ、自分たちが迫るべき目標にさせる。

(2) 指導の概要（全 19 時間）

	内　　容
事前	○今までで、生き物や人との接点で感じてきたこと、考えてきたことを話し合う。
1次（6時間）	○生き物として他の「生き物」と一緒に生きている私 1　私のペット・好きな生き物 ・自分のペット・好きな生き物について語り合う。(１時間)　教員研修ａ 2　旭山動物園の生き物たち ・旭山動物園の生き物たちの様子を見て、動物にとっての居心地の良さとは何かを考える。（１時間） 3　イノシシ・サル・シカに困る人々 ・獣害によって農作物を荒らされたり、生活を脅かされたりしている人々がいる実態から、野生の生き物が必ずしもかわいがったり、ながめたりする存在ではないことを知り、野生との共存が可能か否かを考える。（１時間）　指導実践　p10～p12 4　ヒトもサルも愛した写真家 ・野生のサルと地域の人との狭間で苦悩する写真家松岡さんの立場になって、自分ならどうするかを考え、野生との共存の在り方について話し合う。（２時間） 5　サルと一緒に生きる早紀ちゃん ・淡路モンキーセンターの早紀ちゃんが、野生のサルと適度な距離をとりながらサルの視線でかかわっていることを知り、野生動物との共存の可能性を考える。（１時間）
2次（10時間）	○人として「人」と一緒に生きている私　指導実践　p13～ｐ16　教員研修ｂ 1　運動会で見つけた「『人』と一緒に生きている私」 ・練習が始まる前に、歴代の６年生の姿をＤＶＤで見て、６年生として運動会に臨む意味を考えたり、目標を持ったりする。（１時間） ・運動会に至る過程や本番で気づいた自他の成長・変容について話し合う。（１時間） 2　連合体育祭で見つけた「『人』と一緒に生きている私」 ・練習が始まる前に、歴代の６年生の姿をＤＶＤで見て、学校の名を背負って連合体育祭に臨む意味を考えたり、目標を持ったりする。（１時間） ・自他の成長・変容について話し合う。（１時間） 3　修学旅行で見つけた「『人』と一緒に生きている私」 ・準備や学習が始まる前に、歴代の６年生の姿をＤＶＤで見て、６年生として修学旅行に臨む意味を考えたり、目標を持ったりする。（１時間） ・自他の成長・変容について話し合う。（１時間） 4　音楽会で見つけた「『人』と一緒に生きている私」 ・練習が始まる前に、歴代の６年生の姿をＤＶＤで見て、６年生として音楽会に臨む意味を考えたり、目標を持ったりする。（１時間） ・自他の成長・変容について話し合う。（１時間） 5　１・２学期に見つけた「『人』と一緒に生きている私」 ・１・２学期を振り返り、これまでの生活の中で気づいた自他の成長・変容について話し合う。（２時間）

３次（３時間）	○私として「私」と一緒に生きている私 １　私の中にいる「いろんな私」 ・自分を客観的、かつ多角的に見て、自分が一面的でなく、場面や状況によっていろんな感じ方・考え方・行動のしかたをしていることに気づく。（１時間） ２　「いろんな私」を見る私 ・上記の１で気づいた自分を更に客観的に見て、そうした「いろんな自分」が入学時や１年前と比べて大きく成長・変容していることに気づく。（１時間） ３　「いろんな生き物」「いろんな人」「いろんな私」と一緒に生きる私 ・成長・変容した自分が自然環境・社会環境の中で生かされていることに気づき、感謝の念をもつ。（１時間）
事後	○「人は一人では生きられない」というのはどういうことか話し合う。

10　指導実践

１次	ヒトもサルも愛した写真家

(1) 第４時

ア　本時のねらい

サルと地域の人との狭間で苦悩する写真家の松岡さんの立場に立って、自分ならどうするかを考えるとともに、野生の生き物と人との共存が難しい課題であることを知る。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

下北半島で、ヒトとサルとの狭間で迷い、苦悩する写真家の松岡さんの心情を理解させる。

(ｲ) 感性を育む

サルを駆逐したい地域の人の心情も、サルを大切にしたい松岡さんの心情も、ともに理解した上で、自分ならどうするかを考えさせる。

(ｳ) 想像力の育成

松岡さんが苦渋の決断をして地域の人に協力することにした、その心情を想像させ、人が便利・効率を優先させればさせるほど、人と自然の生き物との共存が容易でなくなることを考えさせる。

ウ　準備物　ＮＨＫ道徳ドキュメント「サルもヒトも愛した写真家」ＤＶＤ

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) 下北半島のニホンザルについての情報収集

下北半島のニホンザルについて、インターネットや書籍で調べる。

(ｲ) ＤＶＤの視聴

ＤＶＤを見て、どの場面で止めて、どういう発問をするかを考える。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	１　下北半島のニホンザルの写真を見て、野性としては世界最北端に棲むことや天然記念物として大切にされていることを知る。	

展開	**２　ＤＶＤを見て、登場する三者に三様の立場や心情があることを想像する。** ・野性のサル 山野に生息するが、人里に下りてきて農作物を荒らす。サルが生きる環境を人間が奪ったんだから、サルは悪くない。 ・地域の人々 サルに生活を脅かされている。生活することができないようなら、サルを駆除しようとするのも仕方がない。 ・松岡さん 写真家として下北半島のサルを撮り続けていて個々に名前をつけるほど親しいが、サルに困っている地域の人々からサル駆除の協力依頼を受け、両者の狭間で苦悩している。	・サルは人間の山林への進出によって棲み場やエサを奪われていること、地域の人々は生活自体ができなくて本当に困っていることを、客観的な事実として伝えるが、その際、教師はどちらにも加担しない立場であることが分かるよう留意する。
	３　松岡さんの立場で考える。 自分が松岡さんの立場なら、地域の人々に協力しますか。 〇協力する ・駆除するのは悪いサルだけだから、いい。 ・人間が生活することが第一だ。 ・協力しないということは、松岡さんも地域に住めないということだ。 〇協力しない ・サルは人間の都合で里まで下りてくることになったのに、人間の都合で殺したりしてはいけない。	・松岡さんが結論を出す手前でＤＶＤを止めて、考えさせる。 ・ここでの判断は、理由も含めて記述させ、本授業内で発表させるとともに、次時にまとめて一覧にし、「共存」について考える際の資料にする。 ・いずれの立場でも「命を大切にしよう」とする意見として認める。
	４　苦渋の決断として協力することにした松岡さんは、どんなことを考えたか想像する。 ・心の中でサルに謝りながら協力したと思う。 ・人間として、人間に協力しなければならないと考えたと思う。 ・生きていれば、したくないことでもせざるを得ないことがある、と思ったのではないか。	・３でどちらの立場をとったとしても、ここでは、松岡さんの苦渋を想像できればよい。
まとめ	**５　松岡さんの判断を知って、再度、自分ならどうするか考える。**	・次時には、本時での記述をまとめたものを資料に使って、人と野生との共存の在り方を考えることを伝える。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 前年度の実践でサルの立場に立った意見が多かったので、今年度は、獣害の情報を前時に入れた。その結果、意見が分かれ、より現実的な考えが出たのは良かった。

(ｲ) 道徳の学習として扱い、価値項目を「生命尊重」「役割・責任」としたが、二つの価値が相反することになり、価値の良さに浸らせる授業にはならなかった。道徳として扱うなら、松岡さんの判断に皆で価値を見いだす流れにする方がよかったと思われる。

「ヒトもサルも愛した写真家」～自分がその立場なら～　児童の反応一覧（一部抜粋）

考えの変化	児 童 の 感 想	賛成	反対
協力しない→協力しない	駆除するサルを自分で判断するのは、サルがかわいそうでできない。多くのお金と労をかけて野菜を作っているのにサルに食べられてしまう人は本当に困っていると思うけど、どこかで施設を作って保護できないか。	30	1
	人のせいでこうなったのだから、協力したくない。松岡さんはサルを見分けることができてすごい。私だったら、サルがかわいそうで、やはり協力できない。	20	6
	サルの写真を撮らせてもらってきたのだから、サルを裏切れない。松岡さんが自分でサルを引き取ってしつけをして野生にもどす。	16	14
協力しない→分からない	松岡さんはもともとサルを殺す気で写真を撮っていたんじゃないから、協力しない。自分になついていたサルをつかまえることに協力した松岡さんはすごくかわいそうだった。辛かっただろうなあ。	26	2
	私だったら、子どものように大切にしてきたサルを裏切るのはいやだという気持ちの方が強い。松岡さんは役場から電話をもらって数秒後に「協力します。」と返事をした。その数秒の間にどんなことを考えたのだろう。	25	5
	山にいるサルを全滅させることになるかもしれないから、協力しない。松岡さんは迷っただろうなあ。	16	11
協力しない→協力する	サルが畑を荒らすようにしたのは人だ。人なら自分の子が悪いことをしたからと言って殺すと言われたら嫌なはずだ。でも、松岡さんの判断は正しかったと思う。人や他の動物が生きていくには悲しいことも喜びもたくさんあると思った。	26	3
	人がサルを殺すのは、サルが人のものを奪うより悪い。でも、今駆除しないと被害が広がるから、協力しないと仕方ない。	16	11
	サルは山のえさがなくて仕方なく畑の作物をとっている。でも、松岡さんの協力した方法なら、サルは絶滅しないから、それでもいいと思った。	16	11
協力する→協力する	松岡さんは本当は協力したくない。でも、松岡さんは人だし、地域の人の被害を見ていると状況がきびしいので協力したと思う。また、協力しないと写真家として生きていく道がなくなる。人にはしたくなくてもしなければならないことがあると思う。	29	2
	名前までつけて愛してきたサルを駆除する手伝いをするのはいやだ。でも、自分が協力しなくてもサルは駆除される。悪くないサルまで殺されるのはかわいそうだ。松岡さんはハナピがわなに近づいてきたとき、「入るな。」と願ったと思う。	28	0
	地域の人は自分たちが一生懸命作っている食べ物をとられて、悲しくめいわくしていて、サルをとてもにくんでいる。私が松岡さんの立場だったら、地域の人の許せない気持ちが分かるから、協力する。	16	10
	サルも大事だけど、人の方が被害が多いので、協力する。	9	14
協力する→分からない	なぜなら、自分もヒトだから。サルからヒトへの被害はあるけど、ヒトからサルへの被害はない。でも、松岡さんの立場になったら、ハナピを殺すことはできない。つらかっただろうな。	22	5
	いくら愛したサルでも人や畑に手を出したら許さない。ちょっとぐらいサルに痛みを知らせたっていい。でも、松岡さんのサルを思う気持ちに感激した。ぼくも動物を大切にしたい。	18	8
どちらでもない	「協力する」と言っておいて、サルが捕まったら「これは悪くない」と言う。サルを殺すんじゃなくてせめてその場所を動物園にして世話してやったらいい。	19	6
	サルを殺したら、写真が撮れない。サルは食べないと生きていかれない。地域の人は畑の食べ物をとられたら生きていけない。	15	9

※　「考えの変化」は、「ヒトもサルも愛した写真家」の前半部（出来事の概略の把握）と後半部（松岡さんの行動を知った後）とで、「村人に協力するか否か」の観点での考えの変化を表したものである。

※　「賛成」「反対」の数は「村人に協力する（しない）理由」についての賛否の数を表す。賛否どちらでもないとする反応もあるので、賛否の合計は必ずしも児童数（35 人）にならない。

２次	人として「人」と一緒に生きている私

(2) 第１時

ア　本時のねらい

運動会での目標達成に向けて皆で努力を重ね、得られた成果を一緒に喜ぶことをとおして、自他の成長に気づき、皆と生きていることを実感する。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

より高次の目標を持って諸行事をやり遂げた感動を共有させる。

(ｲ) 感性を育む

先輩たちの姿を追いかけ、仲間と一緒に努力を重ねて、ともに成長させる。

(ｳ) 想像力の育成

自他共に成長した背景に、いろんな人のおかげがあることを理解させる。

ウ　準備物　感想をまとめたプリント

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) 運動会後に書いた感想をまとめる。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	１　本時は、行事を終えた感想を読み、心に残ったことを述べ合う時間であることを知る。	
展開	２　感想をまとめたプリントを黙読する。 心に残ったのはどの文章ですか。それはなぜですか。 ３　感想を述べ合う。 ・僕もピラミッドのタワーの土台だったから、この気持ちがよく分かる。 ・ピラミッドの一番上のＡさんがこんな思いで頑張ってくれたと思うとうれしい。 ・連合体育祭に気持ちを向けなければならない。	・自他の成長を認める発言は全て認めるが、とりわけ、感謝の意の表れた内容、次に向けていっそう高次の目標を持とうとする内容を高く評価する。
まとめ	４　次の行事に意識を向けることを伝える。	

上記の実践は、運動会の例であるが、連合体育祭、修学旅行、音楽会でも同様の進め方をする。そのパターンは、以下の二つのことを中心に行う。

① 先輩たちの姿を見せて、目標を共有する。

② 行事に至る過程や本番でのことを振り返って、自他の成長・変容に気づく。

①の先輩たちの姿に学ぶことの価値は、高い目標を具体的に見せて、みんなでそれに迫る（それを越える）という目標を共有することにあるが、これは結果として、後輩たちへの意識を形成することにもなる。つまり、自分たちが先輩たちを追いかけようとしている、その過程そのものを、後輩たちは見ているのであり、次の世代が自分たちを目標にする、ということが同時に意識されるからである。

②の過程や本番を振り返る、という作業は、どこでもやっていることであるが、自分だけでな

く友達の記述を読むことで、他者理解ができるとともに、「こういう視点でこういう捉え方をするものなのか。」と、振り返り方そのものを充実させることにつながる。また、これを繰り返すことで、自他を見つめる目は確実に精度を増す。

この実践での教師の仕事は、先輩たちの映像を見せることと記述をまとめることだけであるが、それだけでも、６年生は、自分がいろんな人とのつながりの中で生かされている、という強い意識を持つことができる。ただし、行事自体が充実していることが大前提である。行事の内容やそこに至る過程が充実しているからこそ、児童はそこから価値を見いだすことができる。

以下に、各行事での獲得させたい価値や到達させたい域を記するとともに、児童の記述（部分抜粋）を紹介する。

なお、ここで示す「獲得させたい価値・到達させたい域」とは、「人は一人では生きられない」というテーマに即した意味で挙げるものである。各行事に学習内容に関わる価値も当然あるが、ここでは割愛する。

カ　各行事で「獲得させたい価値・到達させたい域」及び児童の振り返り

【運動会】

運動会で獲得させたい価値・到達させたい域
・学校全体のために自分にできることをやろうとする。
・青組の１～６年生のために、競争競技で全力を尽くし、応援する。
・表現演技で、「今まで生きてきた自分」「今生きている自分」を精一杯表現する。

●児童の感想（部分抜粋）

・プログラム一番の体操「みんなでワーッハッハ」では、体育委員会代表として朝礼台の上で体操させてもらいました。１年のころからあこがれていた場所に立たせてもらってうれしかったです。「ぼくはあこがれていた場所に今立っている。６年以下の人たちに『６年になったら朝礼台の上で体操したい。』と思わせる体操をしよう」と思いました。

・騎馬戦の前に入場門の所で、３組全員で円陣を組んで「青組優勝するぞ！」と団長が言って、みんなで「おーっ！」と言いました。本当にここにいる私たちが「奇跡」じゃないかと思いました。最後の運動会でクラスのみんなで円陣を組んで本当に楽しかったです。これだけで涙が出そうになりました。そして、ぜったい騎馬戦に勝とうという気持ちが強くなりました。
結果は青組の勝利でした。組別優勝も青組でした。赤組と一点差でした。一つ一つのことが優勝につながっていたんだと思います。その一つでも欠けていたら優勝できませんでした。たくさんの仲間がいて、先生がいて、家族がいて、本当に最高の運動会でした。

・教室にもどると「がんばれ　ｂｙ中２」と書かれていました。中学１年生の先輩だけでなく、２年生も見に来てくれるのが、とてもうれしかったです。私も今日のことをいい思い出にして、中学１年になっても２年になっても後輩たちの組体操を見に来たいです。

・最後の運動会で、何かがかわったようでした。全員が一つのことに必死になって、全員で感動の物語をつくれるように、力を発揮できたときに、初めて自分たちの人生の原点から一歩ふみ出せたような気がしました。自分の気持ちの持ち方をかえて、全員で新しい世界を切り開けたことが、ぼくが思った「なにかがかわった」ということです。

【連合体育祭】

連合体育祭で獲得させたい価値・到達させたい域
・緑が丘東小の名を背負っていることに自負と誇りを持ち、それを言動・演技で体現する。
・三木市内の６年生の仲間と真剣勝負で競い合う中で、半年間、仲間とともに培ってきた力を発揮する。

●児童の感想（部分抜粋）

・（前日の記述から→）**運動会が終わって最後にみんなで青ぼうを投げて受け止めた、あの瞬間から、連合体育祭は始まっていました。**明日、**緑が丘東小学校の看板を背負って**他校の人たちと競い合います。明日参加できない人たちのためにも、いい結果を報告できるよう全力をつくしたいです。

・いよいよリレー決勝です。すごく緊張しました。でも、先生の「熱く冷静に」という言葉を思い出しました。一つ一つバトンが確実にわたっていき、Ｃ君からバトンをもらいました。本当に全力を出しつくしました。ゴールはどちらか分からなくて、私たちが勝っていてほしいといのりました。でも、結果はＤ小の優勝でした。すごく責任を感じました。私がもっと速かったら、とすごく悔やみました。でも、みんなは「Ｅちゃん、めっちゃ速かったやん。」「Ｅちゃんはがんばった。」と言ってくれました。**私はこんな友達をもって、すごく幸せだと思いました。**

・**６年生みんなでバンザイをしたところから、修学旅行が始まりました。**今日また男子と女子の距離が一歩ちぢまったような気がします。楽しい修学旅行にしたいです。

【修学旅行】

修学旅行で獲得させたい価値・到達させたい域
・仲間とともに学ぶことの価値、一緒に時間を忘れて遊ぶことの楽しさを味わう。

●児童の感想（部分抜粋）

・この２日間は、**仲間と一緒にすごせて、幸せな時間でした。**自分の意見も言うけど、友だちの意見も聞いて、「じゃあ、こうしよう。」とみんなで相談しました。それが「仲間」ということなんだと思いました。私が室長会議から帰って、みんなに「ちょっと聞いて。」と言うと、私の周りにあつまって、よく話を聞いてくれました。

・お土産は少しずつ出し合って、（インフルエンザで修学旅行に来られなかった）Ａ君のお土産を買いました。「絆」というストラップと、もみじまんじゅうになりました。34 人と先生で買ったお土産をよろこんでくれたらいいなと思います。

・修学旅行は「友達」が重なって成功したものと言えます。学習でも友達と一緒に学ぶから楽しい。バスも友達がとなりにいるから、移動時間が楽しい。そして、友達と遊ぶから楽しい。ぼくはそのようなことを学びました。

【音楽会】

音楽会で獲得させたい価値・到達させたい域
・学校全体、学年全体のために自分にできることをやろうとする。
・合奏や合唱で、「今まで生きてきた自分」「今生きている自分」を精一杯表現し、しかも、それが運動会の時点と比べて、１ヵ月半の間に更にグレードアップしていることを伝える。

●児童の感想（部分抜粋）

・（前日の記述から→）教室で去年の６年生の音楽会を見ました、やっぱりすごいなーと改めて思いました。去年の私は「どれだけ歌ってもやっぱり６年生にはかなわないなー。」と思っていました。今年、６年生である私は、そんなふうに下の学年の子の心に残ってほしいと思うし、歌を覚えてくれるぐらい、いい歌にしたいなあと思いました。

・５時間目に、魂をこめて、通しで力いっぱい歌いました。明日、みんなの前で歌っているのを想像して歌いました。その時、ものすごい世界が見えたような気がしました。A先生、B 先生、そして、C先生のおかげで「６年ならではの世界」を見ることができました。私は、去年の１年間も忘れないようにするけど、この１年間も絶対に忘れない１年間に、もうなっています。

・アンコールをうけたとき、ずっとここにいたい、卒業したくないと思いました。E 君のスピーチどおり、運動会のことや修学旅行で原爆について学んだこと、男子女子関係なくあそんで、楽しかったことを思い出しました。その後、６年３組だけ音楽室に集まって「遠い日の歌」を歌いました。男子が全員音楽室に集まってくれて、とてもうれしかったです。
そして、ちょっと悲しかったです。先生が「卒業に近づいた。」と言ったからです。はじめは６年の世界なんて行けないと思っていたけど、５年生のときのことをのりこえて、すごくいい気持ちになっています。今、６年３組でよかったと心から思います。

・私たちも勇気を出してがんばってきたけど、その勇気を出すきっかけになったのは全部先生たちです。それも、すべて先生たちがするのではなく、ここまでするから、あとは自分たちでここまで来なさい、というやり方でやってくれたから、あんなに保護者を泣かせるまでの歌や合奏ができたのだと思います。

・歌になりました。このメンバーで歌うときは卒業式だと思うと泣きそうになったけど、泣く分歌いたいと思いました。歌っていてすごく気持ちよくて、そのときに６年生の世界ってこういうことかなと思いました。全部歌いきったと思ったら、アンコールの手拍子がきました。先輩たちに並んだと思うと涙が出ました。先生が台に立って「ここから（先輩たちを）こえていくぞ。」と言ったとき、夢がかなうんだなと思いました。歌っていて、本当にみんなで生きているんだなと思いました。すごく満足でした。音楽会で燃えたのは初めてです。私は音楽会が好きです。すごく大切な音楽会でした。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 子どもたちは昨年度、自然学校も含めた学校生活で、充実感や達成感を十分に得られていないところがあったが、６年生の生活を経る中で、変容していく自分（達）に気づいていった。例年の６年生も自分（達）の味わった感動を言葉に表してきたが、今年度は、その変容ぶりが顕著な分だけ、いっそう印象深かったものと思われる。

(ｲ) ただし、次年度の６年生には、その６年生にしかないドラマが生まれるはずであり、似たことをやったとしても、別の言葉が生まれるのではないかと思う。

11　実践を終えて

(1) 先生の振り返り

水谷修氏は言う。

「自分について考え、悩み、語ることは、じつは意味のないことです。なぜなら、自分とは、自然や世界、他人など、他者との関わりの中でしか見ることができないものだからです」

人は一人では生きられない。しかし、自然や人と一緒に生きるなら、確たる自分を形成していくことはできる。その過程は、自他の命の大切さを実感することそのものに相違ない。

今年の６年生たちも、自然や人・自分と一緒に生きる中で、自他の命の大切さを実感してきたと考えている。

(2) 今後の課題

ア　授業実践上の課題

１次の「生き物として他の『生き物』と一緒に生きている私」については、他の学級でも学級の状況に合わせる形で実施できた。一般化することも可能である。

２次以降は、行事の創りあげ方や教師の働きかけ方等についての説明が必要であるが、すぐに一般化できるとは考えにくい。

毎回、６年生がほぼ同様の姿を見せ、中学生・高校生になっても後輩たちの応援に行こうと思うのはなぜか。そこには、何かしら説明可能な原理原則があるはずだと考えるが、それを分析し理論化するには至っていない。

イ　家庭・地域との連携についての課題

行事は家庭・地域との連携なしには成立しない。本実践は諸行事を充実させることが大前提になっている。

運動会や音楽会などに限らず、卒業式の日まで、家庭・地域の満足・納得を得られる行事にしていかなければ、児童がその過程や本番で自他の成長・変容に気づくという成果も得られない。

ウ　学校の組織運営上の課題

野生の生き物との共存について扱ったり、諸行事を充実させたりすることについては、かなり一般化できると思われるが、中学生とのつながりについては、多分に教師のパーソナリティに依拠している。

①６年生の担任をする機会の多い教師がいて、②その教師が先輩・後輩の間柄を意識的に形成しようとすることが条件になってくるからである。更に、運動会等で後輩たちを応援したくなるような魅力が小学校側になければ、縦のつながりは望みにくい。

小中連携の重要性が叫ばれる昨今にあって、本校と中学校の間には、情でつながる良好な「連携」があるが、一般化するには、①②の条件を組織として満たしていくことが求められる。

12　参考・引用文献

・梅野圭史　『教育のあゆみ』(「自然学校における体験活動のあり方を考える」)　兵庫教育大学附属小学校教育研究会　1993
・ＮＨＫ道徳ドキュメント『サルもヒトも愛した写真家』ＤＶＤ　2005
・鎌田實・水谷修　『だいじょうぶ』　日本評論社　2009

実践事例２

今生きていること －守られてきた自分たちの命－

芦屋市立精道中学校第３学年

１　テーマ

今生きていること －守られてきた自分たちの命－

２　実践のねらい

自分たちが生まれた当時、震災の影響で生活もままならない状況の中、「とにかく赤ちゃんを助けよう」という周りの人々の助け合いの中で生かされた自分たちの「命」の重さを知り、誕生の感動や、今後自分たちが周りの人々を大切にしていく気持ちを養う。

３　テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は、学級数 19(特別支援学級３クラス含む)、生徒数 583 人の学校で、阪神淡路大震災により当時の生徒５名を亡くしている。家族や親族を合わせると、実に多くの被害を受けている。今なお、経済的な理由や家庭環境で苦しい立場にたつ生徒も少なくない。

現３年生の生徒は、震災時、母親のおなかの中から、生まれて間もない乳飲み子であった。当時の様子を、保護者や地域の方々からの聞き取り調査という形で、２年時に総合的な学習の時間で行い、冊子にまとめた。３年生ではその内容を踏まえ、修学旅行の取組と重ねて、自分たちの命がたくさんの方たちに守られてきたことを改めて知る機会としたい。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】
- 自分たちが生まれた当時、多くの人々によって助けられた命の重さを実感させる。
- 命の誕生や成長のすばらしさを実感させる。
- 沖縄の文化に触れ、楽しさを感じさせる。

【感性を育む】
- 学校生活を送る中で、お互いを大切にする気持ちをもたせる。
- 助産師から生命誕生などの話を聞き、「命の大切さ」を感じさせる。
- 戦争中の人々の気持ちを想像させる。

【想像力の育成】
- 自分たちの態度・行動によって相手がどのように感じるのかを想像させる。
- 目の前で命が失われていく状況の中、どのような気持ちだったのかを考えさせる。

４　事前

(1) 先生の準備
- 授業の中だけでなく、すべての教育活動の中で、命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。
- 生徒の家庭環境をよく把握し、個別指導や家庭との連携など、十分な配慮をしておく。
- 修学旅行（沖縄）の学習とも関連付け、戦争から学ぶことができる命の大切さについて、伝える内容を準備する。
- 助産院より講師を招くための打ち合わせを行う。
- 阪神淡路大震災に関する聞き取り調査など、２年時の取組と合わせて、生徒が感じてほしいことを教師間で確認しておく。

(2) 教育課程上の位置づけ
- 道徳
- 特別活動
- 総合的な学習の時間

(3) 生徒たちの準備
・昨年度の取組を振り返る。
・修学旅行へ向けて、沖縄の歴史・文化を学ぶ。
・助産院の方への質問内容を考える。
・文化発表会へ向けて、伝えたいことをまとめる。

(4) 家庭・地域との連携
・学年通信や学級通信をとおして、生徒たちが学んでいる内容を随時知らせる。
・助産院の方への協力を依頼する。

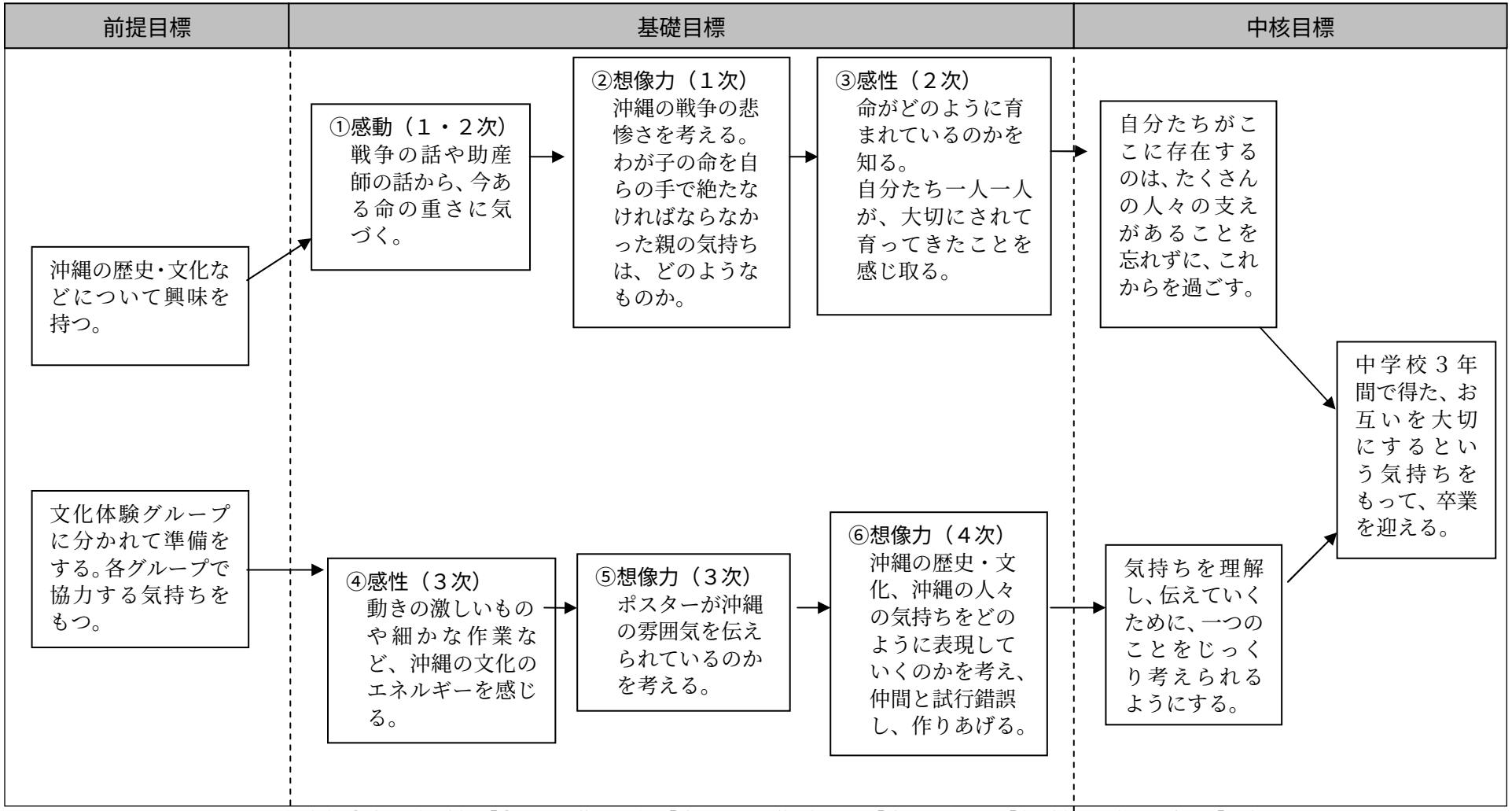
５　本校の実践の特色

(1) 該当学年教師全員で取り組む。文化を学ぶ学習では、教師が分かれて担当する。
(2) 昨年度の取組（震災体験聞き取り）から学んだ「命の大切さ」と修学旅行の取組から学ぶ「沖縄の心－『命（ぬち）どう宝』（命こそ宝）－」とを重ね合わせる。
(3) 助産院より講師を招き、性教育をふまえて「生命誕生」についてなどの講話を行う。「自分のいのち・からだ」を大切にすることを改めて考える機会とする。
(4) ３年生として中学校生活で取り組んできたことをまとめ、文化発表会で全員参加のステージを創り上げ、３年間のまとめとする。

６　目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○沖縄についてのイメージを持つ。 ○修学旅行で何について学びたいかアンケートに答える。	○沖縄の人々との出会いに思いをはせる。	○戦争や文化ということについて考える。	○現在の沖縄はどのような状況なのか想像する。	
1次（10時間）	○沖縄戦についての映画鑑賞・講話を聞く。 ○文化や歴史についてクラスごとに調べ、資料集を作成する。 ○文化体験別のグループに分かれ、さらにくわしく調べ、準備する。	○今ある命の重さに気づく。 ○これまでの歴史を振り返り、沖縄の文化を知る。	○集団自決をした人々の気持ちを考える。 ○戦争とは何なのか、二度と起こしてはならないことを感じる。	○我が子の命を自らの手で絶たなければならなかった親の気持ちを考える。 ○沖縄では現在どのような活動が行われているのか考える。	○歴史をきちんと伝え、今の日本の平和を伝えられたか。 ○どのような文化があるのか幅広く興味を持たせることができたか。
2次（3時間）	○「潮騒」（三島由紀夫 著）の一部を読む。 ○助産師を招いて、人の誕生について学習する。	○一時の感情に流されなかった主人公を知る。 ○助産師から直接、人の誕生や、出産の大変さについて話を聞く。	○命がどのように育まれるのかを知る。 ○自分たちの命が一人一人大切にされたことを知る。	○お互いの気持ちを大切にすることを考える。 ○自分が生まれてきたときも、このように大切にされて育ったことを感じ取る。	○学級活動とつなげられたか。 ○命の誕生に携わる助産師の話を聞いて、その重要性を理解させることができたか。
3次（4時間＋課外）	（修学旅行） ○修学旅行で沖縄の文化や歴史に触れる。 ○まとめの新聞を作成する。	○人々の温かさを知る。悲惨な出来事があったことを知る。 ○新聞作成をするにあたり、改めて沖縄の人々の心に触れる。	○文化のエネルギーを感じる。 ○他者に伝えたいことを考える。	○集団自決をせざるを得なかった人々の気持ちを推し量る。	○沖縄の人々が過去にどのような経験をしているのかを、きちんと伝えられたか。 ○悲しいことを乗り越え、明るく振る舞う沖縄の人々の様子を伝えられたか。
4次（7時間＋課外）	○修学旅行の文化体験グループでポスター作りを行う。また、礼状を作る。 ○文化発表会でのステージに向け、各グループで練習する。 （文化発表会）	○沖縄の人々のパワーを思い出す。礼状に感動のエピソードを記す。 ○心の動きを伝えられるように全員が気持ちを合わせる。	○ポスターを見て沖縄の雰囲気が感じられるか、メンバーで話し合い、仕上げる。 ○ステージを見て沖縄の人々の気持ちを伝えられるように考えていく。	○見ている人たちがどのように感じるか、想像して作りあげる。 ○「命どう宝」「ゆいまーる」の精神を自分たちで考えて発表する。	○見栄えよく、気持ちの込めた作品に仕上がるよう声をかけたか。 ○全体として流れ良く３年間の集大成としてまとめられたか。 ○お互いを大切にする気持ちを育むことができたか。
事後	○命の学習をしてきてどうだったかを話し合い、振り返りを行う。	○昨年度からの取組で一番感動したことをまとめる。	○中学校生活の中で学んだことを作文にまとめる。	○これからの人生をどのように送っていきたいか発表する。	

７　目標構造図



（凡例）①感性（１次）:「①」は指導の順路、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「（１次）」は学習活動が「１次」であることを示す。

８　事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修（実施の時期については、「(2) 指導の概要」の中に明記）

	研修内容
a	○震災の聞き取り調査を受けて、気になる家庭環境などを共通理解する。 ・課題別生徒一覧を共通認識し、クラスでの様子などを交流する。生徒にかける言葉を慎重に選ぶことを確認する。
b	○沖縄戦の歴史についてビデオ等で理解を深める。 ・２年時より修学旅行の取組として、沖縄について事前に教師が研修しておく。
c	○生徒たちに学ばせたい項目をあげる。各担当を確認する。 ・各自担当分野について資料やインターネットを利用して内容検討を行う。
d	○「助産院の方のお話」の内容を検討する。 ・生徒たちに学ばせたい内容を学年教師で検討し、講師の方に依頼する。 ・事前学習使用時の絵本や文書を使って研修する。

(2) 指導の概要（全 24 時間）

	内　　容
事前	○沖縄についてのアンケートをする。（文化・歴史など）
1次（10時間）	○沖縄について学ぶ。 1　修学旅行で訪れる沖縄の文化や歴史について学ぶため、各クラスで分野ごとに分担して調べる。 　映画鑑賞を行う。（８時間） 2　ゲストティーチャーを招き、沖縄について知る。 　沖縄戦の体験者の話を聞き、戦争のおそろしさを知ると同時に、二度と起こしてはならないものだということを認識する。（２時間） 指導実践　p23～p24 教員研修ｄ
2次（3時間）	○「助産院の方の話」を聞く。 1　小説を使い、事前学習を行う。（１時間） 　「潮騒」(三島由紀夫) 2　講師の方より生命誕生についての話を聞く。（２時間） 指導実践　p24～p25
3次（4時間＋課外）	○沖縄の現地で学ぶ。 1　修学旅行で沖縄の文化や歴史に触れる。（課外） 2　まとめの新聞を作る。（４時間） 指導実践　p26～p27 教員研修ｂ、ｃ
4次（7時間＋課外）	○発表「命どう宝・ゆいまーる　～沖縄・震災・フィリピン～」 1　文化体験別のグループで、お礼の手紙、ポスター作りを行う。（２時間） 2　文化発表会でのステージに向け、各グループで内容検討・準備・練習を行う。（５時間＋課外） 指導実践　p27～p28
事後	○振り返りを行う。 ○３年間をとおして、命について考え、取り組んできたことをまとめる。

【参考：昨年度(２年時)の取組　教育プログラムの概要】

指導の概要（全 19 時間）

１次	○震災の様子を知る。（全 12 時間） ・自分たちの生まれた年に起こった震災について当時の様子を保護者や教師から聞く。 （自分たちと同じ年の子どもを持つ教師、自分の周囲の人々） ・「人と防災未来センター」を訪問する。 ・家族を亡くした方からの講演を聞く。（震災で父を亡くした卒業生） ・当時の様子を知る地域の方々へのインタビュー、聞き取り調査を行う。 （芦屋病院、芦屋消防署、防災安全課、小中学校教師、福祉関係）
２次	○自分たちが学んだこと、伝えたいことをまとめる。（全５時間） ・インタビューから知ったこと、忘れてはならないことなどを班新聞にまとめる。一人が一つの記事を担当する。 ・各クラスで発表し、交流する。
３次	○『１・１７の集い』に参加、発表をする。（全２時間） ・阪神大震災を風化させず、命の大切さや身近な人の大切さを知り、自らの生き方について考える節目とする。 ・２年生全体で取り組んできたことを、代表で何人かが発表する。

９　指導実践

１次	ゲストティーチャーを招き、沖縄について知る。

(1) 第９・10 時

ア　本時のねらい

沖縄戦を実際に体験した方の話を聞き、戦争のおそろしさについて知る。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

沖縄の心「命どう宝」を実感させる。

(ｲ) 感性を育む

性別を隠してまで講師の命を守ろうとしてくれた、ご両親の気持ちを感じ取らせる。

(ｳ) 想像力の育成

戦争がいかにおそろしいものであるかを考える。そして、今何を大切にしたらよいのか、を考えさせる。

ウ　準備物　なし

エ　先生の準備（事前の打ち合わせ）

(ｱ) ゲストの語り部の方との打ち合わせ

・沖縄戦の様子、そのときの自分はどのような様子で、どのような気持ちだったのか、などを話してもらうように依頼する。また、生徒に伝えたいことは何か、という点についても聞いておく。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	１　語り部の方が掲載された新聞記事を読む。 ・当時の写真資料を講演の前に見る。	・語り部の方の気持ちを思い真剣に聞くように話す。
展開	２　語り部の方の紹介をする。 沖縄戦の様子について学びましょう ３　語り部の方の講話を聞く。 ・父が自分の身を心配し、当時は少女の格好をさせられていたこと ・実母が命を奪われたこと ・戦争に関わった彼らに、ひどいことを行わせた戦争の残酷さを伝えたい ・沖縄は「海が青い」「空は広い」などの良いイメージばかりではない ・一番大事なものは「命」、そして次は「親」、いつも感謝の気持ちをもってほしい	・非常につらい思いをされたということ、そして二度と戦争を起こさないために語り部をされているということを話す。 ・真剣に話を聞けているかどうか様子を見る。
まとめ	４　講演の感想を書く。 ・語り部の方の伝えたいことは何だったのか、しっかり思い出す。	・授業後に集めて、生徒がどう感じているのかを把握しておく。

カ　生徒の振り返り

〇性別を隠してでも命があってよかった、と言われていた。戦争のない世の中は平和だと思う。今の時代にいてありがたいと思った。(講話後の感想より)

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 沖縄戦の資料などを、少し読ませておいてもよかったのではないかと思う。

(ｲ) 作文について後で紹介する時間をとると、お互いの意見の交流ができ、講演で学んだ内容をさらに深めることができたのではないかと思われる。

２次	講師の方より生命誕生についてのお話を聞く。

(2) 第２・３時

ア　本時のねらい

人の誕生について学習し、自分たち、仲間たち一人一人が、かけがえのない存在であることを知る。

イ　指導のポイント

(ｱ)　感動の体験

出産シーンで赤ちゃんを見たときの母親の表情から、命の誕生の感動を理解させる。

(ｲ)　感性を育む

様々な出産があるが、どの赤ちゃんも大事にされ、誕生を喜ばれていることを感じさせる。

(ｳ)　想像力の育成
　赤ちゃんのその後の様子を見て、自分たちも大切に今日まで育てられてきたことを想像させる。

ウ　準備物　なし

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）
(ｱ)　助産院の方との打ち合わせ
　昨年度より命の大切さを考える取組をしていることを説明しておき、講演内容もその内容に重点をおいたものにしてもらう。
(ｲ)　ビデオ映像を事前にチェックし、中学生が真剣に見られるものかどうかを確認する。
(ｳ)　出産に関する研修
　昨年度の資料などを参考に、どのような内容の講演であるかを再度教師側で確認しておく。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	1　前回に学習した小説から、お互いを大切にすることを学んだことを確認する。 講師の方の紹介を聞く。	・学校生活にもつなげるように話をする。 ・どのような話をしていただくのか、簡単に触れる。
展開	2　講演を聞く。 赤ちゃんが誕生するまでを知ろう ・最初は小さな小さな卵であった。 ・お産はとても大変なものでお母さんたちは声をあげたりしながら出産する。 ・生まれてからも様々な困難にぶつかる。 ・まわりの人たちのサポートでだんだん大きくなっていく。 ・親にとってはたった一人のかけがえのない子である。 ・望まない妊娠などで赤ちゃんの命を亡くしてしまうことがないようにしてほしい。 3　感想とお礼を伝える。	・真剣に聞けるように様子を見る。 ・講話の内容については後で話ができるようにまとめておく。 ・ていねいに話すように指導する
まとめ	4　本時の学習の感想を書く。	

カ　生徒の振り返り
○一つの『命』が誕生するということはすごいことなんだと思った。私が生まれたときも大変だったと母が言っていた。
○出産のときはすごい声を出していたりしていたけど、赤ちゃんが誕生したら、みんな笑顔だった。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
(ｱ) 生徒は真剣に話を聞けており、性教育とも関連させて心に響いたと思う。
(ｲ) 将来、助産師になりたい生徒がおり、以前からこの講演を楽しみにしていた。個人的に質問を準備してきており、講演後、講師の方と話をさせていただくことができた。生徒の「生き方」の学びにもつながったと思う。

３次	沖縄の文化や歴史に触れ、まとめの新聞を作る。

(3) 第１・２時

ア　本時のねらい

修学旅行を終え、自分たちが学んだものは何か、確認する。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

沖縄の方たちの気持ちの温かさを感じさせる。

(ｲ) 感性を育む

沖縄の方たちの心を感じとらせる。

(ｳ) 想像力の育成

お互いを大切にする気持ちをもつ。これからの学校生活にどのように生かすか、について考えさせる。

ウ　準備物　模造紙　マジック類　修学旅行の感想　沖縄の資料

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) 打ち合わせ

修学旅行の感想を交流するポイントや、新聞で伝える内容等について確認しておく。

(ｲ) 沖縄についての知識の再確認

生徒がまとめたいと思う内容について、深められるように研修しておく。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	１　自分にとっての修学旅行を振り返る。 ・自分の書いてきた感想を読み返す。 ・班員またはクラスの仲間の感想を聞く。	・まずは発言しやすい雰囲気を作り、様々なポイントで修学旅行を振り返るようにする。 ・班行動につなげる。
展開	まとめの新聞を作ろう！ ２　修学旅行のまとめの新聞を作る。 ・自分たちの班の分担を確認する。 ・班内での分担を決める。 ・タイトルを考える。 ・レイアウトを考える。 ・記事の文章を考える。 ３　分担して作業をすすめる。 ・お互いに協力してすすめる。	・何を伝えたいのか、レイアウトなどを工夫するように声をかける。 ・協力してすすめるように机間巡視を行い、声をかける。
まとめ	４　今日の活動のまとめをする。 ・新聞作りは協力してできているか、どこまで進んでいるかを確認する。 ・次回の仕上げに向けてどのように進めるか分担しておく。	・きちんとまとめを行わせる。

カ　生徒の振り返り
○授業後の反省を見ると、「一部の人にまかせてしまった」「レイアウトは班で意見を出し合えた」などがあった。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
(ｱ) 班活動がきちんとできたか、という点に特に時間をかけて行った。今後の学校生活にもつながると思う。
(ｲ) 班全員が作業を行っているのかをもう少し細かく確認する方がよかった。

４次	文化発表会でのステージに向け、各グループで内容検討・準備・練習を行う。

(4) 第３時
ア　本時のねらい
中学校３年間の取組のまとめとして
「命どう宝・ゆいまーる～沖縄・震災・フィリピン～」と題して、文化発表会のステージで発表する。

イ　指導のポイント
(ｱ) 感動の体験
沖縄の方々のエネルギーを表現できるように、振り返りの時間にできる限り全員の意見を発表させる。
(ｲ) 感性を育む
お互いの発表を見て、観客にどのように伝わるのかを自分たちで感じとらせる。
(ｳ) 想像力の育成
「命どう宝」「ゆいまーる」の精神を自分たちならどのように表現できるか、また観客はどのように感じるのかを考えさせる。

ウ　準備物　各グループ発表に向けての準備

エ　先生の準備（事前の打ち合わせ）
(ｱ) お世話になった沖縄の方々と連絡をとり、文化発表会での発表内容を知らせる。現地の方から伝えたいことなどがあれば聞いておき、発表内容に組み込めるようにする。
(ｲ) 学級・学年だよりを発行し、各家庭にどのような取組を学校で行っているのか、を知らせる。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	１　沖縄での思い出や学んだことなどを、それぞれ出し合う。 ・だれにでも家族のように接してくれた。 ・いつでも笑顔で元気であった。 ・戦争でつらい思いをされていても前を向いて生きている。	・できる限り全員に発表させ、全体の意見をまとめていく。

展開	２　発表に向けてのイメージをつくる。 文化発表会で発表しよう！	・全校生に何を伝えたいのか、ポイントを押さえる。
	３　内容を考え、準備に向けて計画する。 ・おじい・おばあの人間性（あたたかさ）を出したい。 ・文化の活き活きした様子を表現したい。 ・震災から今まで、自分たちを大切に育ててくれたことを改めて感謝したい。	・全体の流れを説明し、各グループの発表内容をつかませる。
まとめ	４　次回からの内容を確認し、今日のまとめをする。	・次回からも時間を無駄にせず、計画的にすすめられるよう説明する。

カ　生徒の振り返り

〇沖縄の人たちは、みんなあたたかかった。その様子を表現したい。

〇１、２年生が「沖縄に行ってみたいな」と思えるようなステージにしたい。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 単なる沖縄修学旅行の実践発表にならないように、もう少し全体のテーマを意識させた方がよかった。

(ｲ) 文化の発表グループは、ビデオを何度も見直して、出来る限り現地の方に学んだ踊りに近づけようと一生懸命練習していた。

10　実践を終えて

(1) 先生の振り返り

この学年は、震災を知る最後の中学生である。もちろん、産まれて間もない頃のことなので、記憶に残っている生徒はほとんどいないが、芦屋市で産まれ、大震災を経験したことは、忘れてはならないものにしてほしいという願いから、２年時の取組が生まれた。**自分たちの命がどれだけの人々によって今までつながってきたのか、大切にされてきたのか、心の底から感じた生徒は少なくない。**

【２年時の、震災に関する聞き取り体験を終えての生徒の感想】

〇私たちは、お話を聞いて多くの事を学び、考えることができました。ゲストの方は、私たちに人との出会いは大切に、というメッセージを伝えてくださいました。誰かを知っているだけでも命は救えるということは、今の私たちでもできる、減災への第一歩だと思います。多くの人と出会い、関わっていく中でお互いを大切にしあえる関係を作っていきたいと思っています。

〇このインタビューで、今の僕たちが忘れがちな人と人との支えあい、つながりや命や時間の尊さを改めて実感しました。今も当たり前のように過ぎていく時間は二度と戻ってはきません。それなら二度と戻ってこない『今』を悔いのないように精一杯生きなければならないのではないでしょうか。なぜなら僕たちは、数えきれないほど多くの人々の支えがあったからこそ生かされているのですから。

また、３年時には修学旅行での体験をとおして、再度命について考えさせられることとなった。国内で唯一地上戦が行われた沖縄の地を訪れ、悲惨さを目の当たりにすることにより、自分たちは戦争のない時代に産まれてきたことに感謝し、ありがたみを感じることができた。また、沖縄の方々の温かい人間性に触れ、人と人とのつながりを感じ、心のリフレッシュをさせていただいた。

【修学旅行の取組を終えての生徒感想】

〇私が一番心に残っているのは、ガマに入ったときです。ガマに入って、すごくこわい体験をしたけれど、ガマから出てみると、太陽の光がいっぱいさしこんでいて、外の空気がいっぱいあって、心が落ち着きました。きっと、ガマの中で生活していた人も外に出た時こういう気持ちになったんだろうなと思います。今の生活はおだやかだけれど、こういうこともあったんだというのをどんどん伝えていければいいなと思います。今回の修学旅行で、平和の大切さがすごくわかったし、沖縄の人々の優しさや温かさがすごく伝わってきました、どれだけ伝えられるかはわからないけど、自分ができるかぎりのことはして伝えていきたいです。

〇エイサーを教えてくれた人たちはみんな親切でした。動きがわからなかったら、個人的に教えてくれたし、何度も何度も見本を見せてくれました。文化発表会では、親切に教えてもらった分、一生懸命おどって、沖縄の文化を伝えられたらいいなと思います。

〇今回、沖縄の人々の心の温かさをとても感じました。それはおじい、おばあのちょっとでも楽しませてくれようとしているところや、優しさなど、接しているととても多く見つけることができます。やっぱり、沖縄独特の良さはとてもいいものだなあと思いました。学校生活でも友達との付き合いなどにいかしていきたいです。

「命どう宝・ゆいまーる」（命こそ宝・ともに生きる）の精神は、学校生活にも浸透している。生徒たちが卒業後も、中学校で学んだことを、どこかで生かしてほしいと願っている。

(2) 今後の課題

ア　授業実践上の課題

学年全体の取組であり、学年担当教師全員の目的把握・内容確認が必要である。そのために打ち合わせの時間をかなりとる必要がある。

イ　家庭・地域との連携についての課題

各家庭へは学級だより・学年だよりを通じて、学校でどのような取組を行っているのかを随時知らせた。当日の発表には、たくさんの保護者が見に来られた。オープンスクール期間と重なったということもあり、練習風景なども見て頂けたのはよかったと思う。また、沖縄の方々へ、ビデオなどを送って報告をすればよかったのではないかと思う。

ウ　学校の組織運営上の課題

様々な取組を行う上で、体育館・多目的室など一時にたくさんの施設・設備を使用する場合、他学年との調整に時間を費やした。時間割上の問題もあるが、綿密な計画が必要である。

11　参考・引用文献

三島由紀夫　『潮騒』　新潮社　1955

実践事例３

きずなとことば

西宮市立大社中学校第２学年

１　テーマ

きずなとことば

２　実践のねらい

メールなどの文字や、会話における話し言葉などによるコミュニケーションの難しさ、大切さに体験をとおして気づく。そして、一人一人の人権をより一層尊重する意識を高めるとともに、思いやりのある人と人とのつながり・きずなについて考える。

３　テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は、学級数18（特別支援学級２クラス含む）、生徒数608人の学校である。大社中学校区は、５つの小学校区からなっており、それぞれの異なる地域の中から様々な家庭環境の生徒が集まっている。

２年生の生徒は、比較的落ち着いて生活し、行事では楽しく大いに盛り上がることのできる学年である。人に対してやさしい行動も多く見受けられるが、友達に対して冗談からではあるがきつい言葉をかけたり、人の気持ちを十分に考えない行動をとって友達間でのトラブルになったりといった事象も起きている。

特に携帯電話やパソコンは大変普及しており、生徒たちにとって生活の中でなくてはならないものになっている。しかし、使い方によっては、便利なものとなると同時に危険なものともなっている。２年生の生徒の中でも、友人間のメールや掲示板の活用においてのトラブルが起きている。

事前の携帯電話に関するアンケートでは、携帯電話を利用している生徒は全体の55%だった。利用の内容は１位が電話の通信（59%）、２位がメールの通信（55%）、３位が音楽の利用（27%）、その他インターネットによる情報の収集や、動画などとなっており、携帯電話の利用が多様化していることがわかる。

このように携帯電話の利用はさかんであり、メールや掲示板等におけるトラブルが頻繁に起こっていることから、生徒が携帯電話の便利な面と同時に携帯電話の危険な面も理解し、安全な携帯電話の使い方を学習することや言葉のやりとりの体験学習が必要であると考え、今回のテーマを設定した。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】

・携帯電話やインターネットがどのようなときに便利なのかを考えるとともに、人と人をつなぐ情報機器の素晴らしさを知らせる。
・相手の立場や心情を考えながらも自分の考えも伝えて生活することによって、お互いみんなが気持ちよく生活できることを、体験をとおして学習させる。

【感性を育む】

・携帯電話のメールや掲示板への書き込みなどによる問題点に気づかせる。
・何気ない一言、その一言の違いで「話が強調されてしまう」ことに気づかせる。そして、思いやりの心をもって対立を乗り越える学習をとおして、言葉の使い方について改めて考えさせる。
・インターネットの基本的な仕組みやそれを悪用した犯罪実態や人権を侵害しないための知識を身に付けさせ、いろいろな情報を扱う際に適切に判断し行動できるようにさせる。

【想像力の育成】
・携帯電話やインターネット上の文字情報がどのように伝わり、文字情報を受け取った人がどのように理解するかを考えさせる。
・インターネット上の行為は自他に大きな影響を及ぼすことを知り、責任ある言動とはどういうことかを考えさせる。
・相手の立場や心情を理解することや、自分の思いを伝えることの大切さを、実生活で起こりうる場面におけるロールプレイをとおして、理解させる。

４　事前

(1) 先生の準備
・携帯電話やインターネットを利用することで生じるトラブルについて、学校生活や、家庭との情報交換、新聞等によるニュースをとおして、社会の状況をとらえる。
・携帯電話、インターネットに関する生徒アンケートを実施し、生徒の携帯電話やインターネット利用の実態を把握する。
・生徒の家庭環境を理解し、個別指導や家庭との連携など、十分な配慮をしておく。
・生徒同士の話し合い等のグループ活動に向けて仲間づくりをする。
・ふだんの学校生活の中で、生徒が不満を感じやすいロールプレイの場面設定を考える。

(2) 教育課程上の位置づけ
・道徳
・総合的な学習の時間
・技術・家庭
・社会

(3) 生徒たちの準備
・携帯電話やインターネットの利用状況を、あらためて自分自身で把握する。
・携帯電話やインターネットを利用することで生じるトラブルの体験や、人を傷つけたり傷つけられたりすることがあれば、そのときどのように感じたかを思い出す。
・ふだんの生活で、どのようなときにいやな思いをするかを考える。

(4) 家庭・地域との連携
・携帯電話やインターネットによるトラブルの状況や、各家庭での子どもの利用状況を保護者と交流する機会を持ち、携帯電話やインターネットの望ましい利用方法について保護者とともに考えていく。
・学校での実践の内容を通信等で各家庭に伝える。また、ＰＴＡ役員の方との話し合いや、保護者会等で、継続的に保護者と意見の交流を図る。

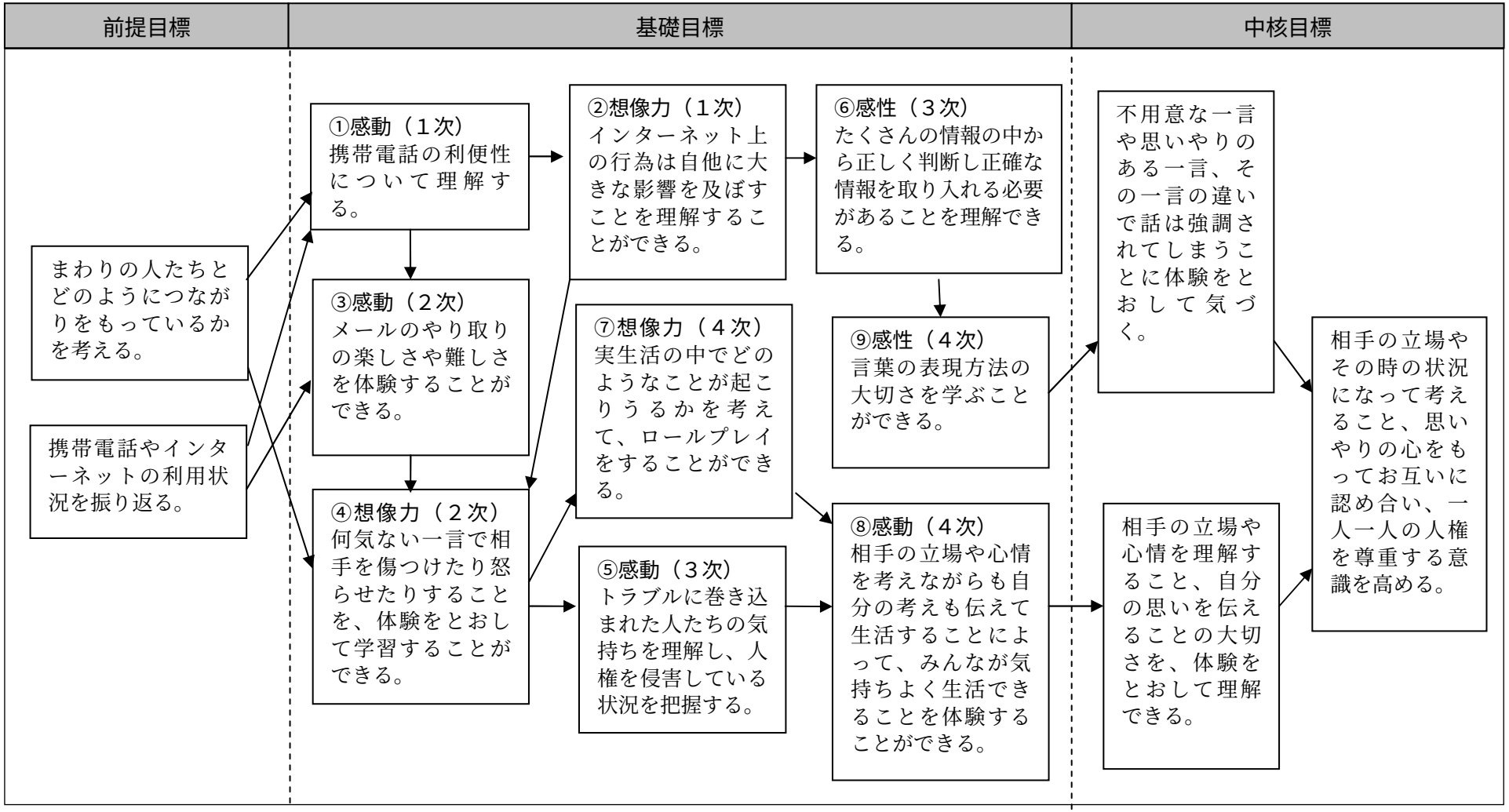
５　本校の実践の特色

(1) ３年間をとおした「命の大切さを実感させる教育」の実施計画の作成及び実践。
(2) 携帯電話の利便性と危険性に関する講演や、アンケート、ＤＶＤ等をとおしての学習。
(3) 教室における書き込みの疑似体験。
(4) 自分の気持ちや考えを相手に伝え、相手のことも配慮するアサーティブな方法の学習。

６　目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○携帯電話、インターネットに関するアンケートに答える。	○携帯電話やインターネットは非常に便利であることに気づくことができる。	○携帯電話やインターネットの利用状況を振り返ることができる。	○まわりの人たちとどのようにつながっているかを考えることができる。	
1次（2時間）	○読み物資料を用いて、学校生活で起こりうるメールによるトラブルについて学ぶ。 ○「ケータイ・インターネットの利便性と危険性」についてのビデオをみる。	○携帯電話やインターネットの利便性について理解することができる。	○携帯電話やインターネットを利用する際には、特に責任ある言動が必要であることを理解できる。 ○メールのやり取りでどのように人を傷つけたり、トラブルになったりするのかを理解することができる。	○インターネット上の行為は自他に大きな影響を及ぼすことを理解することができる。 ○どうすれば携帯電話の危険性から逃れられるのかを考えることができる。	○身近な生活における携帯電話やインターネットの使い方を振り返らせることができたか。
2次（1時間）	○メールや掲示板への書き込みの疑似体験をする。（フレーミング）	○メールのやり取りの楽しさを体験することができる。	○不用意な一言、思いやりのある一言、その一言の違いで「話が強調されてしまう」ことに体験をとおして気づく。	○インターネットでは相手の顔が見えず、簡単にフレーム合戦が起こることが理解できる。	○何気ない一言で相手を傷つけたり、怒らせたりすることを体験できるように支援することができたか。 ○知識として、書き込みに注意しないといけないと知っていてもついつい感情的になってしまうことに気づかせることができたか。
3次（1時間）	○「携帯電話の危険性について」の講演を聞く。	○トラブルに巻き込まれた人たちの気持ちを理解し、人権を侵害している状況を把握することができる。	○たくさんの情報の中から正しく判断し、正確な情報を取り入れる必要があることを理解することができる。	○実際に起こっている事件やトラブルの話から携帯電話の危険性を理解することができる。	○ふだんの生活の中でも、情報の取り扱いに注意を払わないといけないことに気づかせることができたか。
4次（1時間）	○自分を大切にしながら生きていくためのアサーショントレーニングをする。	○相手の立場や心情を考えながらも自分の考えも伝えて生活することによって、みんなが気持ちよく生活できることを、体験をとおして学習することができる。	○相手の立場や心情を理解すること、自分の思いを伝えることの大切さを理解することができる。 ○言葉の表現方法の大切さを学ぶことができる。	○実生活でどのようなことが起こりうるかを想像しながら、ロールプレイをすることができる。	○相手の立場やそのときの状況になって考えること、思いやりの心をもってお互いに認め合い、一人一人の人権を尊重することの大切さを考えさせることができたか。
事後	○「きずなとことば」の学習をして考えたことを話し合う。	○「きずなとことば」の学習の中で一番感動したことをまとめる。	○「きずなとことば」の学習をとおして、感じたことを作文にする。	○これからの生活をどのように送っていきたいかを考える。	

７　目標構造図



（凡例）①感性（１次）：「①」は指導の順路、「感性」は指導の観点が「感性を育む」、「（１次）」は学習活動が「１次」であることを示す。

８　事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修（実施の時期については、「(2) 指導の概要」の中に明記）

	研修内容
a	○日々の生徒の携帯電話やインターネットの利用状況を把握する。 ・生徒指導上でのトラブルについての情報交換。 ○中学生の携帯電話の利用に関する新聞等によるニュースに関心をもつ。
b	○教師自身が携帯電話のメールやインターネット上の書き込みの体験をとおして、その問題点を理解する。
c	○自分を大切にしながら生きていくためのアサーショントレーニングをする。
d	○保護者との懇談会等の話し合いで、情報交換を行う。

(2) 指導の概要（全５時間）

	内　　容
事前	○携帯電話、インターネットに関する生徒アンケートを実施する。 教員研修ａ
１次（２時間）	○携帯電話やインターネットの利便性と危険性 １　携帯電話やインターネットに関する生徒アンケートから見えるものを考える。 学校生活で起こりうるメールによるトラブルについて学ぶ。（１時間） ２　携帯電話のメールや掲示板に書き込みすることが、人の心を傷つける行為となることを知り、そのときの被害者と加害者の心理を理解するとともに、携帯電話の利用面での特異性を考え、正しい携帯電話の使い方を学習する。　（１時間） 教員研修ａ、ｂ
２次（１時間）	○メールやインターネットの人権　指導実践　p35～p37 フレーミングの疑似体験 インターネットにおける文章は、不用意な一言、思いやりのある一言、その一言の違いで「話が強調されてしまう」ことになることに気づかせる。（１時間） 教員研修ｂ
３次（１時間）	○「携帯電話の危険性について」講演 専門家からの「携帯電話の危険性について」講演を聞く。　（１時間） 指導実践　p37～p39 教員研修ｃ
４次（１時間）	○アサーショントレーニング 相手の立場や心情を理解すること、自分の思いを伝えることの大切さを学ぶ。（１時間） 教員研修ｄ
事後	○自分の心の動きを振り返る。 ○保護者との懇談会で話し合う。

９　指導実践

２次	メールやインターネットの人権

(1) 第１時

ア　本時のねらい

フレーミングの疑似体験をすることによってインターネットにおける文章について考えるとともに、不用意な一言、思いやりのある一言、その一言の違いで「話が強調されてしまう」ことになることに気づく。（フレーミングとは、ネットワーク上で相手が激高するよう挑発したり侮辱するようなメッセージを掲示板等に書き込んだりすること。またはそのような文章が原因で発生するネットワーク上の「けんか」のこと。）

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

メールのやり取りの楽しさを体験させる。

(ｲ) 感性を育む

不用意な一言、思いやりのある一言、その一言の違いで「話が強調されてしまう」ことに体験をとおして気づかせる。

(ｳ) 想像力の育成

インターネットでは相手の顔が見えず、簡単にフレーム合戦が起こることを理解させる。

ウ　準備物　ワークシート

エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）

(ｱ) ３～４人程度のグループ及び各グループのリーダーを作る。リーダーは教師の指示に従い、書き込みをしたり、グループの話し合いをまとめたりする。

(ｲ) 授業がスムーズに流れるように教員同士でフレーミングの研修を実施する。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	１　前時の携帯電話やインターネットの利便性と危険性について振り返る。 ・本時の目的を確認する。	・何気ない言葉の用い方によって自他に大きな影響を及ぼすことを思い出す。
展開	２　フレーミングの準備をする。 ・３～４人程度のグループを作る。 ＊各グループのＢさんは、教室の前や廊下に集まり、教師の指示を受ける。 ３　１枚目のワークシートに順番にＢ、Ｃ、Ｄ・・が書き込みをする。（書き込み１） ただし、Ｂさんは教師の指示に従って書き込みをする。（好意的） ４　２枚目のワークシートに順番にＢ、Ｃ、Ｄ・・が書き込みをする。（書き込み２） ただし、Ｂさんは教師の指示に従って書き込みをする。（悪意的） ＊書き込みをしているときは、できるだけ話をせず、お互いの顔を見ないことを確認する。	・適切なグループを作れるように支援する。 ・各グループのＢさんを集め、１枚目のワークシートには○○さんを「好意的に考える立場」に立って、２枚目のワークシートには、「好意的に考えない（悪意的）立場」に立って、それぞれ書き込みをするように指示する。 ・インターネットの世界では相手の顔が見えず、表情や口調が伝わらないため、簡単にフレーム合戦が起こることに気づかせる。

	５　書き込みの内容を確認する。 ・悪口を書いた人は、どのような気持ちで書いたかや、悪口が書かれているときにどのように感じたかを考える。 Ｂの好意的な場合と悪意的な場合とで、話がどう変わったか 好意的　→　あまり過激にならない 悪意的　→　どんどん過激になる　　など	・生徒が体験をとおして感じたことを話し合える雰囲気を作る。
まとめ	６　授業の感想を話し合う。 ・不用意な一言、思いやりのある一言、その一言の違いで「話が強調されてしまう」ことに気づく。 「メールでは感情が分かりにくい。」 「冗談も、文字で表すと冗談とは受け取れないときがある。」 「普通に会話する中で、言いにくいことがメールや掲示板で書ける。」　　など	・身近に不愉快な思いをしたり、困ったことやトラブルが起きたりと問題があることを押さえる。 ・いろいろな人たちの立場になって考えることの大切さを知らせる。 ・個人情報や誤った情報をのせてはいけないことを押さえる。

カ　生徒の振り返り

○気づき

・一番最初の人が言ったことがちがうだけで、みんなが書いている内容がちがった。
・話を前向きな方向にするのは、難しかったけど、マイナスな考え方にはみんなとても同調してくれた。
・言葉が少しでも違うと人って傷ついたり、逆に自分が傷ついていることが分かりました。
・悪意的に書くと周りの人ものって、悪い方へ話が進む。
・好意的な人が、悪意的な言葉で悪意的になった。
・好意的が多かったが、最終的に説得されて悪意的に変わった。
・好意的な書き込みがあるときは、自分もよい気持ちになれるけど、悪意的な書き込みがある時は、自分もいやな気持ちになる。
・人にあわせているということは、その人は本心を言えなくなってしまうことがあるんだなあと思いました。
・みんなのこの一言だけで長く話がつづいている。自分の意見を通すのは難しいと少し思った。
・好意的な書き込みがあっても、少しマイナスな方向に話がいって、悪意的な書き込みがあると、すごくマイナス方向に話がいった。

○その時の気持ち

・一枚目はみんなで頑張ろうという気持ちになった。２枚目はみんなが何のためにやっているのだろうか、まだやらなくていいやんという気持ちになった。
・書いた人はばれないから何を書いてもいいやという気持ちになった。
・「話を合わせなきゃ！」という気持ちや、同調してほしいという気持ちだった。
・自分は傷つき、嫌な気持ちになる。こんな書き込みをするなと思う。
・書かないと駄目かなと思う。友達との関係を悪くしたくない。
・やり返してやろうと思う。
・悪意的なことを書かれた人は、誰が書いたか分からないから不安だと思った。
・好意的な書き込みでは、自分と同じことを思っている人がいると心強い。悪意的な書き込みでは、あきらめている。

○これからの生活では
・自分はケータイやパソコンでメールとかはしていないけれど、これからメールをするときは、言葉などに気をつけていきたい。
・プラスに書いてもマイナスに書いてもマイナスになってしまったが、人は同調をすぐにしてしまいやすいから人とあわせることも大切だけど、自分の意見をいうことも大切だと思った。
・いじめにならないようにしたい。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
(ｱ) 指示を出す生徒は、しっかりと指示できる者をあげるとよい。また、４人グループはバランスを見て分けることが大切である。
(ｲ) 静かな中で、書き込み体験ができるようにする。
(ｳ) 書き込みをしやすい雰囲気をつくる。ただし、ふざけすぎないように気をつける。

各ｸﾞﾙｰﾌﾟのＢさんへ指示

書き込みをしている様子

書き込み体験後の話し合い

４次	「アサーショントレーニング」

(2) 第１時
ア　本時のねらい
思いやりの心をもって対立を乗り越える学習をとおして、お互いに認め合い一人一人の人権をより一層尊重する集団を作る。
イ　指導のポイント
(ｱ) 感動の体験
相手の立場や心情を考えながら自分の考えも伝えて生活することによって、みんなが気持ちよく生活できることを、体験をとおして学習することができる。
(ｲ) 感性を育む
相手の立場や心情を理解すること、自分の思いを伝えることの大切さを理解することができる。また、言葉の表現方法の大切さを学ぶことができる。
(ｳ) 想像力の育成
実生活でどのようなことが起こりうるかを想像しながらロールプレイをすることができる。
ウ　準備物　なし
エ　先生の準備（事前の打ち合わせと教員研修）
(ｱ) ロールプレイを行う班などのグループを決める。
(ｲ) ふだんの学校生活の中で生徒が不満を感じやすいロールプレイの場面設定を行う。
(ｳ) 授業がスムーズに流れるように、教員同士でアサーショントレーニングの研修を実施する。
(ｴ) アサーション度チェックシートの内容の確認をする。

オ　展開

	学　習　活　動	指導上の留意点
導入	1　情報モラルの学習をとおして人権について考えてきたことや、ふだんの生活や行事等でクラス・学年で仲間づくりをしてきたことを振り返る。 協力、友情、けんか、誹謗、中傷・・・ ・アサーション度チェックシートをする。 「はい」10 以上が「普通」。 「いいえ」が多いと、自己主張が苦手。	・相手の立場やその時の状況になって考えること、思いやりの心をもってお互いに認め合い、一人一人の人権を尊重することの大切さを考えさせる。 ・アサーションについて関心をもたせる。
展開	2　アサーショントレーニングについて理解する。（プリント１） A 受け身的、B 攻撃的 →　何の解決にもならない C 主体的　→　相手の立場や心情を考えながらも自分を伝えて相手を説得してさわやかに問題を解決する。 (人間関係を崩さずに自分の思いを伝える) 二人組になってアサーショントレーニングをしよう！ 3　二人組になってアサーショントレーニングを体験する。（プリント２） プリントに従い、予想されるセリフを考え、ロールプレイをする。 4　ロールプレイの振り返りをする。 プリントに記入する。 5　いろいろな場面でトレーニングをする。（班別）（プリント３） ３つの状況を考えさせ、アサーティブな対応を考える。	・対立を解決するための伝え方を学ぶということを押さえる。 ・知的判断、状況判断が必要であることにふれる。 ・実生活で考えられるような状況を考える。 ・話の中でのやりとりだけでなく、メールや掲示板で用いる言葉でも相手の立場や心情を考えながら人権を尊重して相手に伝わるようにすることが大切であることを押さえる。 ・生徒の活動の様子を見て、活動がスムーズに進むように支援する。
まとめ	6　授業の感想を話し合う。 ・みんなの意見を発表させ、まとめる。	・人生の中では、攻撃的、受け身的な伝え方も必要な時があることを押さえる。（大きな人生の問題に直面した時など）

カ　生徒の振り返り

○気づき

・メールだけでなく、ふだんの生活でも言葉を間違えるとトラブルになるということが分かった。
・ふだんは、ほぼ受身的で、自分の気持ちがあまり話せなかったけど、体験授業を受けてどうやったら主体的になるのかが分かってよかったです。
・アサーション度チェックでは、受身的だったので、当たってるなあと思いました。
・実際やってみると、思いもよらず受身的になっていたことが分かった。

○その時の気持ち
・自分の気持ちを我慢しすぎると、辛くなってパンクしちゃうし、押し付けると人を傷つけてしまうから、上手に自分の心を伝えるのは難しいと思った。でも「つながり」について、とっても大事なことだと思った。
・もし自分が何か言ったときに、攻撃的な対応をとられたら、すごくいやだなあと思いました。攻撃的な発言をしないで、アサーションのように出来たらいいなあと思いました。
・楽しかった。前向きな自分は嫌だった。自分にあってなかった。
・言いたいことは言うけど、相手を傷つけないようにするということは、簡単そうで意外と難しいものだと痛感しました。
・アサーティブな対応が出来ると良いが、実際には難しいこともあると思う。

○これからの生活では
・やってみて、僕は誰に対してもアサーティブな対応が出来ているわけではないなと思いました。受身的になったり攻撃的になってしまったりすることがあるなと思いました。だから、これから、はどの人とでもアサーティブに近い対応になるように頑張っていきたい。
・自分は、いつも思ったことがあったらその時に相手に言うし、友達には、何かあったらいつでもすぐ言ってねって頼んでいるから、ためこんだりして関係がおかしくなることはないです。でも、あんまり仲良くない子は、私の言葉とかに傷ついたり、すぐためこんだりしているのかなあと思うと、自分の言う事に気をつけないといけないと思いました。
・私は、完璧に受身的な方です。でも、軽くでも言わなきゃだめなときはちゃんと言わなきゃ、私はずっといやな気になるんだなと思っていました。この授業でどういう言い方をしたらいいかも学んだので、これからは自分の意見も言わなきゃな、と思いました。
・私は３つの立場の中で、想像した人がどれにもいたけれど、人によって態度を変えるのはよくないなあと思いました。だから、これからは主体的になれるようにしたいです。
・僕は、受け身的なタイプだったけど、アサーションの体験授業を受けて、主体的なタイプになりたいと思いました。なぜなら僕は、いやなことを友達にされても、それを「まあ別に気にしていないけど」と言っているから、少し優しく注意していきたいと思いました。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
(ｱ) ２人組のロールプレイは意外と時間がかかるので、ロールプレイの問題数を押さえて、班での活動時間を確保するとよい。
(ｲ) とても活気ある授業になった。生徒は、本来、アサーティブな対応をあまりしていないこともあるので、事前の準備を十分に行う必要がある。
(ｳ) ロールプレイの問題については、色々な考え方ができるものを扱っても良かったのではないかと思われる。

10　実践を終えて
(1) 先生の振り返り
事前のアンケート結果から、携帯電話やインターネットの利用が多く、多様化していることがわかった。さらに、１日に４時間以上携帯電話を利用したり、１日に 30 回以上メールする生徒がいたりと予想以上に生活の中に携帯電話が入り込んでいる。メールや掲示板でのトラブルに巻き込まれた生徒もいるため、本授業への生徒の関心も高かった。
普通に会話する中で、言いにくいことがメールや掲示板で書けることや、メールや掲示板ぐらいだったら、友達の悪口を書いてもいいかなという軽い気持ちがあるということ、メールでは感情が分かりにくいこと、冗談も文字で表すと冗談とは受け取れないときがあることなど、メールや掲示板における文字の恐ろしさを疑似体験をとおして理解できたと考える。

また、生徒はふだんアサーティブな対応を考えることがあまりない。本実践により、相手の立場や心情を理解すること、自分の思いを伝えることの大切さを、アサーショントレーニングをとおして学習できたと考える。

フレーミングやアサーショントレーニングでは、子どもの活動が主となっており、子どもたちも生き生きと授業に参加できる内容だった。生徒たちに目標を理解させやすい展開だった。

(2) 今後の課題

ア　授業実践上の課題

教室でのパソコンを使わない、ワークシートによる書き込みの疑似体験や、身近なテーマについてのアサーショントレーニングを行った。実践後の生徒の感想より、メールなどの文字や、会話における話し言葉などにおいて、正しく情報を判断し、相手の立場や心情を考えながら相手に伝わるようにすることの大切さに気づかせることができたと考える。

今後、実際の生活の中で、文字や言葉を大切にしてコミュニケーションできるかどうかについては、日々の生活の中で繰り返し考えさせる必要がある。

イ　家庭・地域との連携についての課題

個人懇談会や、保護者会、地区懇談会等で携帯電話やインターネットの利用について話題になることが多く、保護者の問題意識も高い。また、家庭によって、携帯電話やインターネットの利用状況が大きく異なると考えられる。特にそれらの生徒の利用が自由な家庭においては、家庭間で利用の共通理解が必要である。そのためにも学校における家庭や地域との連携が必要である。

また、学校での学習内容を各家庭に伝え、家庭とともに、メールなどの文字や、会話における話し言葉などによるコミュニケーションの難しさ、大切さを子どもたちに伝えていくことが大切である。

ウ　学校の組織運営上の課題

本プログラムのための授業時間の確保が必要である。学年だけではなく、学校全体で授業時間を作ることが大切である。道徳、総合的な学習の時間等を活用したが、１年間を見通した計画を立てる必要がある。

11　参考・引用文献

・情報モラルに関するビデオ　ＮＴＴドコモ　『ケータイ安全教室』（ＤＶＤ）　2008
・情報モラル読み物資料　光村図書　中学道徳「きみがいちばんひかるとき」②「だれ？」2009
・兵庫県人権教育推進委員会　『地域における人権教育の推進をめざして　ライフステージに応じた参加体験型　人権学習実践事例集』「フレーミング」　2008
・兵庫県人権教育研究協議会　『じんけんスキルブック』　「アサーショントレーニング」2004
・アサーション度チェックシート　平木典子　『アサーショントレーニング』　日本精神技術研究所　1993

グループ用ワークシート（３人用）

フレーミングについて考えよう　その一言でこんなに違う！

（　）組　メンバー（　　）

A：　勉強ってしんどい！

B：

C：

D：

B：

C：

D：

ワークシート

フレーミングについて考えよう　その一言でこんなに違う！

（　）組　（　）番　氏名（　　）

1　前回の授業を思い出して書いてみましょう。

2　３～４人のグループを作り、フレーミングの役割分担をしましょう。
B（　　）、C（　　）、D（　　）
E（　　）

3　２枚のワークシートに順番に書き込みをしていきましょう。また、書き込みをするときは、周りの人と話をしないようにし、お互いの顔も見たりしないようにして行いましょう。（人数が多いときは、グループ用ワークシートの空欄を順に書き込む。）

4　１枚目と２枚目のワークシートを比較して、グループごとに話し合いをし、気づいたことをまとめましょう。

5　悪意的に書いた人は、どのような気持ちで書くのか、また、悪意的に書かれているときにどのように感じたかをそれぞれの立場になって考えてみましょう。

6　好意的な書き込みがある場合と悪意的な書き込みがある場合とで、話がどう変わったかをグループごとに話し合ってみましょう。

7　今回の授業を通して、感じたことを書きましょう。

きずなとことば（西宮市立大社中学校第２学年）

「情報化社会に生きる」

（　　）組（　　）番　氏名（　　）

現在、携帯電話やパソコンは大変普及しており、生活の中でなくてはならないものになっています。しかし、それらの使い方によっては、便利なものとなると同時に危険なものともなります。これからの道徳の授業では、インターネットの基本的な仕組みやそれを悪用した犯罪や人権を侵害しない知識を身につけ、いろいろな情報を扱う際に正しい判断を持って行動できるように考え、責任ある言動とはどういうことかをみんなで考えていきます。

１　資料「だれ？」の範読をききましょう。

①恵子は千佳とメールを終えたとき、どんな気持ちだったでしょうか。

②恵子はどんな気持ちから「見たと言っている人がだれなのか、分かっていないじゃない。」といったのでしょうか。

③あなたが恵子だったら、この後どのような行動をとるでしょうか。

２　ビデオ「加害者にならないためには？」をみましょう。

①２つのドラマで、それぞれ登場人物のどこに問題があったでしょうか。

前半	後半

②どうすれば防げたでしょうか。

前半	後半

③もし自分だったら、どのようにしますか。

前半	後半

３　授業を終えての感想を書きましょう。

実践事例４
生かされていることへの感謝 －「運命」から「使命」へ－
県立農業高等学校第１学年畜産科

１　テーマ

生かされていることへの感謝 －「運命」から「使命」へ－

２　実践のねらい

「農業」の中でも、特に「畜産」を学ぶ生徒たちの体験的な学習・実習や特別活動を、言葉に表すことで、自己肯定感を持たせていく。また、「生きる」ことが、「他の命とつながる」ことであるということを、「書く」という作業や「読む」という作業の中で確認させる。

人は皆、与えられた運命の中で生きるが、その中で、自分の命をどう使っていくか（使命）について考え、自らの生き方を模索する。

３　テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は 2007 年に創立 110 年を迎え、卒業生約２万名を輩出する、歴史と伝統のある農業科の専門高校である。学級数は 24 クラス、定員 960 名で、８つの専門学科を有していたが、2009 年度から、学科編成により７学科（農業科・園芸科・動物科学科・食品科学科・農業環境工学科・造園科・生物工学科）となった。校訓の「たゆまぬ研鑽、豊かな情操」の精神を基調に、豊かな創造性と深い人間愛の精神を身に付け、自らが主体的に判断し行動するこころ豊かでたくましく生きる力にあふれた人材の育成を目指している。

加古川市東部に位置し、生徒は地元の東播磨を始め、阪神、西播磨並びに北播磨地区など遠方からも通学しており、多様な環境や能力を持った生徒たちが入学してくる。生徒たちは、農業について学ぶ中で日々「命の大切さ」に向き合っているが、中学時代に受けたいじめや低学力などで、自己肯定感を持てない生徒もいる。

「農業」で学ぶ「命の大切さ」を、普通科（国語科）の授業や、特別活動の中で確認していくような、横断的な取組として今回のテーマを設定した。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】

・文学作品、講演、鶏の解体実習、「内観」を通じて、支えられて生きていること、命がつながっていることなどを実感させる。
・「私の大切なもの」の紹介、「内観」という自己開示の体験をとおして、自分を肯定すること、肯定してもらえることの大切さを実感させる。

【感性を育む】

・「内観」や「言葉の花束」を通じて、他者を思いやり、人間関係を取り結ぶことが、「生きがたさ」を取り除いてくれることを感じさせる。
・作中人物の心情を理解することで「生きること」「生かされていること」への考えを深めさせる。

【想像力の育成】

・様々なものから「生かされている」こと、生きて在ることに感謝の念を持たせる。
・文学作品や鶏の解体実習などをとおし「死」を鏡として「生」を認識することで、命のつながりを想像させる。

４　事前

(1) 先生の準備

・教員自身が、すべての教育活動の中で、命を大切にする心や態度を忘れないようにする。
・教材の選定にあたって、「命の大切さ」という視点を持ち、生徒への意識付けを心がける。
・生徒が、「命」について、どういう思いを持っているかを把握するために、生徒の作文や感想文に、丁寧に目を通し、生徒の思いを把握する。
・教員自身が「内観」時のファシリテーターを務めることができるような研修を実施する。
・「命の大切さ」や「人と人とのつながり」についての講演会を企画する。
・子どもの家庭環境をよく把握し、個別指導や家庭との連携など、十分な配慮をしておく。
・農業科の教員や養護教諭、キャンパスカウンセラーなどと、学習の目的やその後のケアなどの打ち合わせをする。
・畜産科の実習や行事など、できるだけ参加して、生徒の様子を観察し、気持ちの上で寄り添うことができるようにする。

(2) 教育課程上の位置づけ

・国語（現代文）
・畜産（農業）
・特別活動（ＬＨＲ・畜魂祭）

(3) 子どもたちの準備

・国語（現代文）の教材を「命の大切さ」という観点で考える。
・畜産科の実習で感じたことを「書く」ことで、「命」への思いを確認する。
・10 秒呼吸法の訓練をする。
・夏季休暇課題で「命」に関する本の読書感想文を書く。

(4) 家庭・地域との連携

「内観」の場面では、生徒自身も気づかなかった、保護者に対する思いが明らかになる場合もある。事前に家庭環境等を含んだ生徒の状況を十分把握しておき、個別の配慮に細心の注意を払うことが必要である。

５　本校の実践の特色

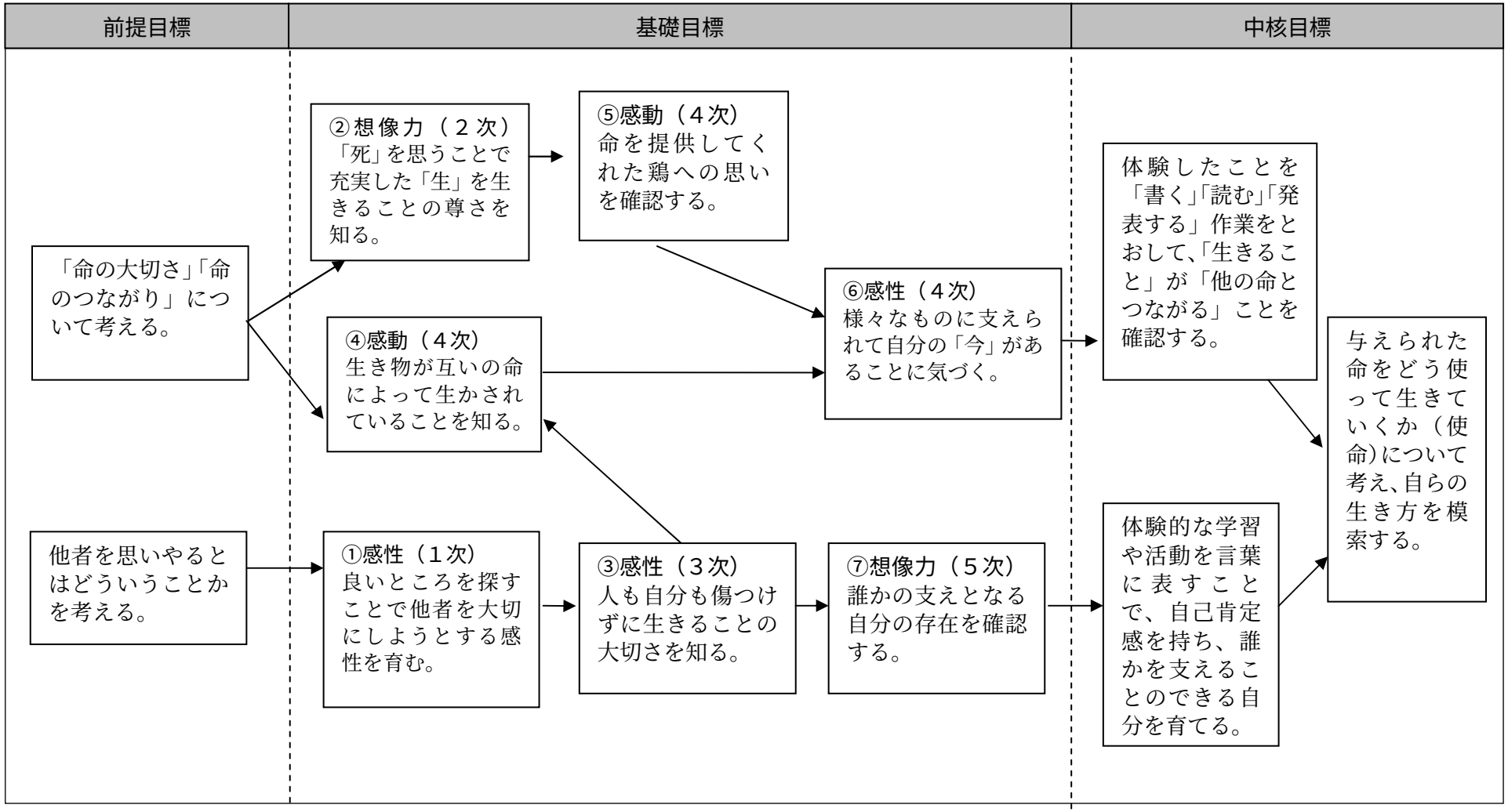
今回は、農業高校の生徒の中でも、特に１年生の畜産科を対象として実践した。畜産科の１年生では、鶏の飼育・解体実習を行う。自分が育てた鶏を解体することで、畜産に携わる生産者としての意識を持たせるわけであるが、そうした取組を、国語の教材やＬＨＲ、学校行事とリンクさせることで、生徒一人一人の中で「命の大切さ」がより強く、深く定着できるようにしていきたい。本単元では、農業高校の畜産科で学んだことの集大成として、「生かされている自分に気づく」ことを目標とした。

体験を言語化することも、国語科の役割であると認識している。言語化した体験がまた、これからの生徒の生きる標（しるべ）になる。思ったこと、考えたことを残す中で、必ず「生かされている」ことへの感謝が生まれてくると思いたい。そして、その感謝の気持ちをとおして、「他者を支えられる生き方」「生まれてきたことの使命を果たせる生き方」がどんなものかを、生徒一人一人が模索していけるようになれば、理想的である。

６　目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○国語の教材を「命の大切さ」という観点で考える。 ○10 秒呼吸法の練習をする。	○「命」について自分の思いを素直に表現する。 ○気持ちを落ち着かせる。	○他者を思いやることとはどういうことかを考える。	○「死」を鏡として「生」を認識することで、命がつながっていることを想像する。	
1次（5時間）	○「私の大切なもの」について作文を書く。 ○「私の大切なもの」について発表する。 ○発表内容を相互評価し、お互いの良いところを認め合う。	○自分が大切にしているものについての共感を得ることで、自己肯定感を持つ。 ○発表内容や態度を認めてもらうことで喜びを感じる。	○クラスメイトの発表を聞き、良いところを探すことで、他者を大切にしようとする感性をはぐくむ。	○今までの自分を支えてくれた人・ものが存在したことに思いをいたす。 ○自分とは違うものの考え方を受け入れる。	○入学後間もない時期に実施することで、自己紹介・自己開示させることができたか。 ○多様な価値観を持つ他の生徒の発表に触れ、自分と違う価値観も受け入れさせることができたか。
2次（8時間）	○随筆「希望」（大石芳野）を学習する。 ○小説「一瞬を生きる」（原田宗典）を学習する。 ○絵本「100 万回生きたねこ」（佐野洋子）を教材にホームルーム活動をする。	○生き延びるために「希望」を持ち続けたユダヤ人の実話に触れる。 ○「死」を前にした登場人物の行動をとおして「生」の尊さを知る。	○人が人の命を守ることの尊さを実感する。 ○愛する者・支えてくれる者があることのありがたさを感じ取る。	○「死」を思うことで、充実した「生」を生きることの尊さを知る。 ○人の命は、肉体的にも精神的にも受け継がれていることを考える。	○作者の問いかけに生徒がそれぞれの答えを模索することができたか。 ○命に限りがあること、死後も命がつながっていくことを理解させることができたか。
3次（6時間）	○性教育講演会 ○人権教育講演会「障害を乗り越えて」 ○生徒指導講演会「人の心の不思議さ」 ○「命」をテーマにした作品の感想文を書く。	○パラリンピックで入賞した方の話を聞くことで、夢を持ち目標に向けて努力することのすばらしさを感じ取る。 ○「命」をテーマとした作品の世界に触れる。	○心の持ち方で、対人関係が変わってくるという話を聞き、人も自分も傷つけずに生きていく感性を養う。	○性教育や対人関係など、専門家の話を聞くことで、命の大切さや人とのつながりのすばらしさに気づく。	○講演会や読書感想文を書くことを通じて、人と人とのつながりや生きることの大切さについて考えさせることができたか。
4次（26時間）	○小説「なめとこ山の熊」（宮沢賢治）を学習する。 ○畜魂祭に参加する。 ○鶏の飼育・解体実習を行う。 ○実習の感想を書く。	○作品をとおして、生き物が互いの命によって生かされていることに気づく。 ○畜魂祭で、畜産科の生徒としての自覚を深める。 ○飼育、観察、解体することで、生命の不思議さに触れる。 ○命を提供してくれた鶏への思いを確認する。	○作品中の生命観・人間観・自然観について理解を深める。 ○家畜の生命に感謝の念を持つ。 ○畜産に携わる者の使命を考える。 ○様々なものに支えられて生かされていることに感謝する。	○「死」が再生に結びつくという作品の主題を理解し、生きることの意味について考える。 ○先輩が愛情を持って家畜を飼育してきたことを思いやる。 ○命あるものを殺すことの意味について考える。 ○店頭の肉にも愛情を持って育てた人がいることを思う。	○文学作品や農業実習、学校行事をとおして、すべての生き物が「生かし生かされる連鎖」の中にいることを理解させることができたか。 ○家畜へ感謝の念をもち、責任を持って飼育する気持ちをもたせることができたか。
5次（3時間）	○「内観」をして、お世話になった人・かけがえのない人について考える。 ○「言葉の花束」を贈り合う。	○何気なく接している人や動物が自分の支えになっていることに気づく。 ○クラスで認められている自分に気づく。	○亡くなった人も、自分の中で生き続けることを感じる。 ○あたたかい言葉や優しい言葉が人を励ますことを感じる。	○誰かの支えとなる自分の存在を確認する。	○支えてくれる人のおかげで生きていることに感謝の気持ちをもたせることができたか。 ○言葉の持つ力を実感させることができたか。
事後	○高校生活を振り返り、どう生きていくかを考える。	○自分が支えられ、誰かを支えている存在であることを感じる。	○他者への思いやりが人間関係を作ることを理解する。	○生かされていること、「死」を超えた命のつながりを想像する。	

７　目標構造図


前提目標
基礎目標
中核目標
「命の大切さ」「命のつながり」について考える。
他者を思いやるとはどういうことかを考える。
②想像力（２次）「死」を思うことで充実した「生」を生きることの尊さを知る。
④感動（４次）生き物が互いの命によって生かされていることを知る。
①感性（１次）良いところを探すことで他者を大切にしようとする感性を育む。
⑤感動（４次）命を提供してくれた鶏への思いを確認する。
⑥感性（４次）様々なものに支えられて自分の「今」があることに気づく。
③感性（３次）人も自分も傷つけずに生きることの大切さを知る。
⑦想像力（５次）誰かの支えとなる自分の存在を確認する。
体験したことを「書く」「読む」「発表する」作業をとおして、「生きること」が「他の命とつながる」ことを確認する。
体験的な学習や活動を言葉に表すことで、自己肯定感を持ち、誰かを支えることのできる自分を育てる。
与えられた命をどう使って生きていくか（使命）について考え、自らの生き方を模索する。

８　事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修（実施の時期については、「(2) 指導の概要」の中に明記）

	研修内容
a	○生徒の思い、家庭環境を把握する。 ・生徒の「命についての思い」を把握するために、作文や感想文に丁寧に目を通す。 ・生徒の家庭環境を把握し、個別指導や家庭との連携など、十分な配慮をしておく。
b	○自己再発見の体験をする。 ・「私のかけがえのない人」　＜提言 p72：教員研修テーマ②＞
c	○講演会の企画と感想の集計 ・「命の大切さ」や「人と人とのつながり」についての講演会を企画する。 ・生徒の感想を読むことで、生徒理解を深める。
d	○各部署（部・学年・科・養護教諭・キャンパスカウンセラー）との連携 ・農業科の教員や養護教諭、キャンパスカウンセラーなどと、学習の目的やその後のケアなどの打合せをする。 ・学科の実習や行事などに参加して、生徒の様子を観察し、気持ちの上で寄り添うことができるようにする。

(2) 指導の概要（全 48 時間）

	内　　容
事前	○教員自身が「命の大切さ」についての思いを深める。 ○生徒への理解を深める。 ○行事や授業について関係者との連携を図る。
1次（5時間）	○自己開示して、お互いの思いとその違いを認め合う。 1　「私の大切なもの」について作文を書くことで、今までの自分を支えてくれた人、ものへの思いを振り返る。（１時間） 2　作文を原稿として、クラスメイトの前でスピーチすることで、コミュニケーション能力を養う。（３時間） 3　スピーチを相互評価し、お互いの良いところを認め合う。（１時間）
2次（7時間＋1時間）	○小説や随筆を学習し、絵本を読むことで、命に限りがあること、死後も命がつながっていくことを理解する。 1　「希望」（大石芳野）を学習し、「希望」を持つことで生き延びることができたユダヤ人の人生について考える。（２時間） 2　「一瞬を生きる」(原田宗典)を学習し、末期癌の老カメラマンが、若いスタジオマンに伝えたかったことを理解する。（５時間） 3　「100 万回生きたねこ」（佐野洋子）の絵本をとおして、限りある命だからこそ大切にしなければならないことを理解する。（ＬＨＲ１時間）
3次（6時間＋課外）	教員研修ｃ ○講演会や読書を通じて、人と人とのつながりや生きることの大切さについて考える。 1　「性教育講演会」（特別活動２時間） 2　「人権教育講演会－障害を乗り越えて－」（特別活動２時間） 3　「生徒指導講演会－人の心の不思議さについて－」（特別活動２時間） 4　夏季休業中に「命」をテーマとした作品を読み、感想文を書く。（課外）

４次（26時間＋課外）	○文学作品や農業実習、学校行事をとおして、「生かされている」ことについて考える。 指導実践　p50～p58 １　「なめとこ山の熊」（宮沢賢治）の学習をとおして、すべての生き物が生かし、生かされる連鎖の中にいることを理解する。（５時間） ２　「畜魂祭」で、家畜への感謝の気持ちを新たにする（特別活動１時間）　教員研修ｄ ３　鶏の飼育実習、解体実習を実施する。（畜産 20 時間） ４　冬季休業中に鶏の解体実習の感想を書くことで実習を振り返り、他によって生かされていることについて考える。（課外） 教員研修ａ、ｂ、ｄ
５次（３時間）	○支えてくれた人のおかげで今があることに思いをいたし、生きて在ることに感謝の気持ちをもつ。 指導実践 p59～p64 １　「内観」（自分の内面を観る）で、お世話になった人を思い出し、「迷惑をかけたこと」「してもらったこと」「してあげたこと」について考える。（２時間） ２　１年間一緒に過ごしたクラスメイトにメッセージを贈り、贈られることで友人との絆を確認する。（言葉の花束）（１時間）
事後	○１年間をとおして、「命の大切さ」について学んだことを振り返る。

９　指導実践

４次	文学作品や農業実習、学校行事をとおして、「生かされている」ことについて考える。

(1)　「なめとこ山の熊」（宮澤賢治作）『国語総合』 現代文分野（５時間）

熊と人間との殺し殺される関係を描いた、せつない物語。猟師の小十郎は、老母と孫たちとの生活のために熊を撃って、その毛皮や胆も金銭に換えなければならない。その「因果」を背負う小十郎を熊たちは「好き」だと、作者は描く。

ア　本時のねらい

学習をとおして、すべての生き物が生かし生かされる連鎖の中にいることを理解する。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

宮澤賢治の童話の世界をとおして、自然界では、生き物が互いの命によって生かし生かされていることに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

物語の中に込められた、生命観や人間観、自然観について理解を深めさせる。

(ｳ) 想像力の育成

「死」が再生に結びつくという、この作品の主題を理解し、生きることの意味について考えさせる。

ウ　初発の生徒の感想

・熊も小十郎もかわいそうと思った。
・この話は悲しい話だなぁと思った。何もしていない熊が次から次へと殺されていくところと、最後に小十郎が死んでしまうところが特に悲しかった。僕には、何もしていない熊を殺すことは絶対できないと思う。今度、鶏をヒヨコから育てて、自分の手で殺すときが来ます。その時僕は、泣きながら殺していると思う。

エ　学習後の生徒の感想

・小十郎と熊には信頼関係がある、小十郎は熊の言葉がわかってしまって熊を殺せなくなってしまったけど、私も、もし鶏の言葉がわかってしまったら、わからなくても殺すのは嫌なのに、余計に殺すのが嫌になると思う。
・主人公の小十郎は、畜産科の先生にそっくりだと思った。宮澤賢治も似たような人なのかと思う。
・小十郎は、自分に与えられた因果に苦しみながら、それを受け入れて死んでしまったが、死ぬことによって熊に対して許されて、死に顔が笑みを浮かべていたんだと思った。
・世の中の食物連鎖のことを書いていると思った。

オ　先生の振り返り

小十郎という熊の猟師と熊との関わりを、畜産科の生徒がどんなふうにとらえるかに興味があった。鶏の解体実習と重ねて書いている生徒もいた。猟師と畜産業には共通する部分もあると思える。

(2)　「畜魂祭」特別活動１時間（県農祭の前日 11／22　13 時～14 時）

ア　本時のねらい

家畜への感謝の念をもち、責任を持って家畜を飼育する気持ちを新たにする。

畜魂祭の様子

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

最大の学校行事である「県農祭」の前日に「畜魂祭」を行うことで、農業高校畜産科の生徒としての自覚を深めさせる。

(ｲ) 感性を育む

３年生が述べる畜魂の言葉を聞き、畜産科の生徒として家畜の命をとおして学習を進めていることの重みを考えさせる。

(ｳ) 想像力の育成

授業で教材として扱う家畜たちに対して、代々の先輩たちが愛情を持って接してきたことを思い、畜産科の一員としての思いを深めさせる。

ウ　準備物

・「畜魂のことば」（３年生が考える。）　　・献花、水など。

エ　先生（畜産科）の準備

・各類型（乳牛・肉牛・養豚・養鶏）の代表者を選び、「鎮魂のことば」を考えさせる。

・畜産科の教員、担任、管理職などの参加依頼

オ　展開

(ｱ) 司会の生徒によって進行する。

(ｲ) 畜産科の生徒たちは、学年毎に整列する。

(ｳ) ３年生各類型の代表者が「畜魂のことば」を述べる。

(ｴ) 生徒一人一人が菊の花を持ち、畜魂碑に手向け、お参りする。

カ　先生の振り返り

日頃活発な生徒も、神妙な面持ちで畜魂碑に向かう。３年生代表者の「畜魂のことば」を聞くうちに涙ぐむ生徒も多く、飼育して出荷した家畜や病気・怪我などで死んだ家畜を思い出したのか、泣き出す生徒もいた。

鎮魂の言葉

私達は学びの場である畜舎で、牛や豚の誕生の瞬間に息をのみ、子牛の黒い瞳の輝きに愛らしさを感じ、羽ばたく鶏、元気に動き回る子豚と戯れ、全ての動物を愛しいものとして、夏の暑い日も、寒い冬の日もともに育つ喜びを感じ、命とともに成長してきました。

しかし、なかには成育半ばで悲しくも尊い命を消してしまった動物の魂に対し、私達は感謝の気持ちを忘れてはなりません。

動物は、人が食べることのできない草や雑穀を食べ、乳や肉、卵などを生産し私達の生活に提供してくれます。

動物は、命を代償として、私達の生活を支え、豊かにしてくれます。これは紛れもない事実です。動物を飼い、生産物を利用する物質循環の中で、人と動物がいかに共存し、ともに栄える事ができるかということを考え続けていかなければなりません。

私達の学びの糧として命を終えた動物たちの魂よ、どうか安らかにお眠りください。

そしていつまでも県農生を見守り続けてください。

平成二十年十一月二十二日

(3)　鶏の飼育実習、解体実習を実施する。（畜産 20 時間）

ア　本時のねらい

鶏の飼育をとおして、家畜の飼育方法を学び、責任を持って命を育てる。そして、自分で飼育した鶏を解体することで、命のかけがえのなさ・尊さを感じる。

イ　指導のポイント

(ｱ)　感動の体験

雛を飼育することで成長の様子を観察し、解体することで臓器の確認をするなど、生命の不思議さを感じさせる。

(ｲ)　感性を育む

飼育の体験から解体の体験を経て、畜産業に従事する者としての使命を考え、生かされていることへの感謝の気持ちをもたせる。

(ｳ)　想像力の育成

鶏を飼育する体験をとおして、自分を育ててくれた人・ものに対しての思いをもち、解体の体験をとおして、命あるものを殺すことの意味について考えさせる。

ウ　準備物

（飼育）　・ブロイラー舎　・鶏の雛

（解体）　・実習服、帽子、長靴　・タッパー、ビニール袋（２kg 程の肉を入れる）

・タオル、ゴム手袋、軍手

エ　先生の準備

「畜産」担当の教員に授業見学の許可を得て、取組の趣旨を理解してもらう。

オ　展開

(ｱ)　平成 20 年 10 月 17 日（金）２時間

①授業の展開

先生（担当者）「君らに命を預けるから、自信と責任を持って育てるように。君らは、その命をもらうんやからな。」

・鶏の雛を生徒一人一人に配布する。

・体重・脚の長さを測定する。

・餌やり、水やりについての説明を受ける。

②生徒の様子

生まれたばかりの鶏の雛はふわふわで温かく、可愛らしい。生徒たちは、優しい表情で嬉しそうな声を出していた。

受け取ったばかりのヒヨコを
そっと手のひらに載せる

ヒヨコの体重測定

脚の長さを測定

(ｲ) 平成 20 年 10 月 27 日（月）２時間

①授業の展開

・鶏の雛を識別できるように、番号のついた脚帯を付ける。
・体重、脚の長さを測定する。
・ワクチンの投与　（点眼、羽根）

②生徒の様子

少し大きくなったヒヨコに識別番号を付けると、自分の雛としての認識が高まっていくように感じる。ワクチンを投与するときに、「病院に行こうね」と声を掛けている様子は、我が子に語りかけているようだった。

少し大きくなったヒヨコ

ヒヨコに
ワクチン接種

(ｳ) 平成 20 年 11 月 10 日（月）２時間

①授業の展開

・成長した鶏に合うように大きな脚帯に付け替える。
・体重、脚の長さを測定する。

②生徒の様子

「でか！」「脚太い！」「もう、ヒヨコじゃない！」と言った声が、あちらこちらから聞こえる。確かに、赤い鶏冠（とさか）のある鶏には、もうヒヨコの面影はない。

(ｴ) 平成 20 年 12 月 15 日（月）４時間…解体実習

①授業の展開

８：30　実習服に更衣、畜産実習室に集合、点呼
８：40　実習説明
　　鶏の移動
　　放血・脱羽（脱毛室）
　　解体実習（食品加工科棟）
12：35　終了

先生から説明を受けながら
解体を行う。

②生徒の様子

大きく成長した鶏を大事そうに、抱きかかえていた。「これは肉！これは肉！今日の晩ご飯！」という声が聞こえてくる。今まで育てた鶏を、鶏としてではなく食材として考えようと、自分に言い聞かせているように感じた。「先に死んでくれ～！」と叫ぶ生徒もいて、自分で殺すより、死んでくれればいいのにと思っている様子がうかがえた。泣いている女子もおり、クラスメイトが、「勉強やん、勉強！」「畜産科やろ？」と声を掛けていた。死んでしまった鶏に、「さっきまであんなに可愛がっとったのに…」「さっきまで、だっこしとったのに…」と涙ぐむ姿も見られた。

解体時には、畜産科の先生から、臓器の説明を受けたり、お互いに教え合ったりしていた。

カ　先生の振り返り

＜畜産科担当者より＞

生きた動物を育てることと、育てたものを消費することは相反する営みである。特に殺して食品にするということは、ふだんできないことであるが、畜産科の授業としては必要なことである。生徒にとっては今まで経験しなかったことでもあり、刺激が強すぎることもある。しかし、この実習を経験することにより、生徒たちの「食への見方」が大きく変わると思える。

＜筆者の振り返り＞

飼育・解体実習は、班ごとに実施されていた。畜産科の先生の指示を受けながらも、グループやクラスの仲間がお互い助け合いながら実習を進めている様子が印象的だった。国語の授業中には見られない生徒の一面を見ることもできた。生徒は、授業中だけでなく、決められた当番（時間外総合実習）の際にも、鶏の飼育をしている。当番でなくても、毎日自分の鶏の世話をしに来る生徒もいたようである。４時間の実習であったが、あっという間に、生きている鶏が鶏肉になっていった。

(4)　冬季休業中に鶏の解体実習の感想を書く。（課外）

ア　本時のねらい
体験を言語化する取組をとおして、実習を振り返る。

イ　指導のポイント
(ｱ)　感動の体験
解体実習を振り返り、文章にすることで、命を提供してくれた鶏への思いを確認させる。
(ｲ)　感性を育む
今回の実習だけでなく、様々なものに支えられて今があることへの感謝の気持ちをもたせる。
(ｳ)　想像力の育成
店頭に並ぶ肉にも愛情をもって育てた人がいることに気づかせる。

ウ　準備物　　原稿用紙

エ　先生の準備
本校の卒業生の作文（中学校道徳の副読本に採用）を紹介し、感想文を依頼する。

○感想文の依頼

一年畜産科の皆さんへ

鶏の飼育実習が終わり、解体から一週間あまり過ぎました。

ヒナ鶏を受け取ったときからの皆さんの様子を、見学して、私自身も思うことがたくさんありました。県農での私のスタートは、畜産科二年生の担任でした。意見発表の作文に「鶏の解体実習」のことを書いている生徒がたくさんいました。私は、その内容を読んだり聞いたりしながら、「すごいなあー」と思いました。でも私は、二年間担任した生徒たちが、その実習をしている場面を見たことがありませんでした。今回、この実習をほんの少し覗かせてもらって、卒業していった生徒たちに、もっと近づけたような気がします。どうもありがとう。実習の見学を快く認めてくださった畜産科の先生方にも感謝しています。

御礼を言った後で、畜産科の皆さんに課題を出すのは心苦しいですが、この冬休みに、鶏の飼育実習を振り返って、作文を書いて欲しいと思います。二年生になったら、意見発表の題材に取り上げることもあると思います。ただ、今回の実習だけでなく、二学期に学習した「なめとこ山の熊」を振り返ったり、「畜魂祭」のことを思い出したり、日頃の総合実習や当直などのことも織り込みながら書いてください。今の皆さんなら、熊の猟師として熊を殺して売ることを商売にしていた小十郎の気持ちに、近づくことができるでしょう。

皆さんは、普通科の、あるいは県農生であっても、他の科の生徒が体験できない貴重な体験をしています。この体験を言葉の力で自分の中につなぎ止めておくことは、大切な作業だと思います。「書く」ことで、「今、生きて、在ること」が証明されます。

何かと忙しい冬休みでしょうが、最初の現代文の授業（一月十四日）で提出してください。参考に卒業生の作品を配布します。来年度の中学校の道徳の教科書に掲載予定です。2000 年に卒業した生徒です。皆さんよりも十年程先輩の方ですが、思いは同じではないでしょうか。全国的に見ても、素晴らしい体験をしていることを今更のように感じます。

オ　生徒の作文（抜粋）

・自分の手で雛から可愛がってきたニワトリを、自分の手で殺さなくてはならないことを知って、いやだと思っていましたが、かわいそうだと思わずに、人間のために死んでいくニワトリの命の分まで生きていくことが、一番大切じゃないかなって思いました。

・今回の実習で、命の重さと大切さを学びました。雛はとても可愛くて、作業が終わるたびにケージから出し、じゃれ合っていました。そのひとときが楽しかったです。…体重もだんだん重くなって、いつの間にか羽も生え、ニワトリっぽくなっていきました。…屠殺の日になりました。ニワトリは殺されるのをわかっているかのように、突然暴れ出しました。かわいそうでした。屠殺する前から泣いている人もいました。…自分の番が来て先生が言った場所をナイフで切るときに、私は一回では切れなくて「もう一回」と言われ、私はもう一回首を切りました。そしたら、グサッと音がして感触が伝わってきました。私は涙が出そうでした。機械に入れられ羽を取られ、最後は残っている羽を自分で取る作業でした。でも私は、羽が無くなった自分のニワトリを見た瞬間、手が震え身体が動きませんでした。

・…そして私の番が回ってきました。最初は、「えーっ」って感じで勇気が出なかったけど、自分でヒヨコからここまで育ててきたから、最後までしてあげなな…と思い、勇気を振り絞って首を切りました。…この経験をとおして、命の大切さがわかりました。ふだん普通に食べている肉や魚の大切さもわかりました。いつも食べものを残したりするけど、それはいただいた命だから、最後まできちんと食べないといけないなと思いました。

・小さなヒヨコを受け取った。最初はよちよちして、黄色い毛は暖かく可愛らしい。体重は十数グラムに過ぎない。周りは珍しいやら可愛らしいやらでわいわいしていたが、もうこの時から、最終的には食肉にするという覚悟は決めていた。…いつの間にか体重が２キロを超えて、いよいよ食えそうなニワトリになった。…愛情をかけない方が楽だ。屠殺した後、感傷に浸らなくて済む。愛情をかける方が損だ、と思っていた。でも、最後には、愛情をかけ育てた方が良かったかもしれない。説明はできないけど、やっぱりそう思える。

・私は担当の雛に「ももちゃん」という名前を付けて、「私がももちゃんの親だよ。」と何回も言いました。…ももちゃんが成長していき、楽しかった時間や大変な時があったけど、あっという間に過ぎていきました。とうとう最後の日が来たとき、いろいろと不安でした。「苦しまないように殺せるかな。」「今まで、ももちゃんに何をしてあげたのだろうか。」ということなどが頭をよぎりました。屠殺はすぐに終わりました。最後も、ももちゃんに「今までありがとう。ももちゃんのおかげで命の大切さを学べた。」と感謝の気持ちを伝えました。…一生忘れられない体験になりました。

・鶏の首を片手で持ち、牛刀で首を切る、逆さにして血抜きをする。正直、切るまではつらいが、その後の作業を考えると楽な方だと思う。お湯につけ、手で羽を抜く。頭を切り落として、足は切れ目を入れて引き抜く。手羽、足、胸、ささみ、がらに切り分ける。もも肉をはずす。手羽、胸肉をはずす…内臓を取り出す。最後の方になると疲れてきた。一羽を解体するためには、すごい体力を使うし、集中力もいる。

カ　先生の振り返り

感想を読むと、愛情をかけずに育てようと努力していたり、とても可愛がって育てたりと、生徒たちは、雛に対して様々な接し方をしている。しかし、一様に、「今までしたことのない」体験、「普通はできない」体験に、その体験を大切にしたいと考えていることがわかる。そこには、「畜産科だから！」という思いも感じられる。生徒に達成感を感じさせ、畜産科の生徒としての自負を持たせるのに、貴重な体験のできる授業である。

(5)　学びの広がり －命の大切さを伝える－

畜産科の２年生（山田詩織さん）が母校（神戸市立福田小学校）で「命の尊さ」をテーマに話をした事例を紹介する。

ア　小学校の校長先生が出されている「学校だより」より

平成20年３月11日(水)に、兵庫県立農業高等学校畜産科での実習を通した「命の大切さ」について、皆さんの先輩から６年生へ話をしていただきました。

＜話の要旨＞

今日、私が福田小学校を訪問したのは、もうすぐ卒業する６年生の皆さんに、「命」の大切さを知ってもらいたいと思ったからです。私が通っているのは、兵庫県立農業高等学校です。そこにはいろいろな科があり、私は畜産科で勉強をしています。畜産科では、普通の学校と同じく英語や数学も勉強していますが、鶏肉や豚肉、牛肉、卵、牛乳などを生産することを勉強する科です。 私が生まれて初めてにわとりを育てて、肉にした体験を話したいと思います。高校１年生の９月頃に、授業で一人一羽のひよこを育てることになりました。最初は手の上に乗るくらいの大きさで、ふわふわとしていて、ピヨピヨと可愛らしい声で鳴くひよこを自分のペットのような気持ちで育てていました。日がたつにつれて大きくなり、１か月も過ぎたひよこは、とさかが生え、羽毛も生え替わり、鳴き声にも変化が現れてきました。その頃、担当の先生に言われた言葉があります。それは、「家畜はペットではなくて、自分たちの生活を支えるための食料になるもの」という言葉です。その言葉を聞いた時、私は心が「キュッ」と痛くなりました。ひよこを育て始めて、３カ月、ひよこはもう大人になっていました。その姿を見て、私はすごく怖いと感じ始めました。もう少しで、今まで大事に育ててきたひよこを自分の手で肉にする日が近づいていることに、怖さとつらさを感じていたからです。そして、運命の日が近づくと、１週間前からえさの量を減らしていき、前日には断食させる。ご飯を食べたいのに食べられない自分のにわとりを見ると悲しくて、私も食事がのどを通らなくなりました。そして、「とさつ」の日、一人一人順番に自分が一生懸命育ててきたにわとりを自分の手で息を止めるのです。私はその場から逃げたくなり、自分の番が来て、牛刀を持った時、手が震えて視界がぼやけてしまったことを覚えています。「とさつ」後、自分たちの手で、にわとりを解体し、家に持ち帰り、すべてを残さず食べる。その日は自分が育てたにわとりを「とさつ」した時のことを思い出し、震える手をいつまでも見つめていました。今まで当たり前に食べていた肉は、誰かが毎日大切に育て、肉にしてお店に並べているのです。にわとりや豚や牛を私たちの勝手で、まだ生きることができた命を止めているのに、私たちはもう食べられないからといって捨てる。命を粗末にしていることに気づき、今まで命をもらっていたのだということに気づかされたのです。

私は、肉牛という黒牛の担当をしています。毎日一頭一頭の顔を見て、「体調はどうか」「部屋はきれいか」「食欲はあるか」等をチェックしています。何回か分娩にも立ち会っています。母牛が苦しみながら新しい命を生み出そうとしている瞬間、お母さんも私をこんなに大変な思いをして生んでくれたのかと涙が止まらなくなります。本当に素晴らしい瞬間です。

私は、命の大切さや素晴らしさを、こんなに身近に感じることができていることに感謝しています。今、話を聞いてくれている皆さんの中に、自分も体験したいなと思ってくれたら、うれしいです。そして、命を絶対に粗末にしないでほしいと思います。どんな命だって、粗末にしてはいけません。家畜の命もみんなが残さずに食べてくれたら、その命を粗末にしたことにならないのです。みんなは命をいただいているのです。

山田さんには、自分の中学校時代の話もしてもらいました。山田さんの「命は大切である」という思いを、子どもたち一人一人はきちんと受け止めてくれたと思います。

子どもの感想から

・今日は本当にありがとうございました。私は「牛の涙」という言葉を聞いて、やっぱり動物も「死」ということはわかるんだなあと思いました。動物を殺してしまうのは悲しいことだけど、私たちが生きていくためには仕方がないから、犠牲に感謝してこれからは生活をしていきたいと思いました。私は兄が兵庫県立農業高等学校に通っているので、県農祭に行ったことがありますが、牛たちはこれからいつまで生きられるかわからないのに、とても生き生きとしていて、必死に生きているのは動物も一緒だと思いました。私は、県農で勉強がしたいと思いました。「とさつ」などは残こくでいやだけど、感謝の気持ちをもちたいと思いました。これからも頑張ってください。昼休み、少しお話ができてよかったです。本当にありがとうございました。

・命の勉強、ありがとうございます。私ももし鳥を育てていたら、首を切るなんてかわいそうと泣いてしまうと思います。けど、私たちも食べるためにはそうするしかないし、ありがたさをもって食べたらいいなと思いました。あと、牛の種類とか覚えていてすごいなと思いました。福田小学校の卒業生として、私も山田さんみたいな胸のはれる中学生になります。山田さん、苦しいこと、悲しいことまでお話をしてくれてありがとうございます。命を大切にしていきたいと思います。

山田詩織さん、卒業を目前にした６年生に貴重なお話をありがとうございました。一人一人の心に山田さんの想いは届いたと思います。６年生の皆さんが、数年後、山田さんのように後輩に話を語れるよき先輩になることを期待しています。

イ　平成21年６月に行われた農業クラブ校内意見発表会での原稿

演題　「命」家畜の命に感謝する心を育てるために

私を見つめる 80 人の子供達の真剣なまなざし。その真っ直ぐさ。今年の２月私は、自分の卒業した小学校から依頼されて、６年生全員の前で「命」の大切さを伝えるという体験をしました。実のところ、その小学校卒業後の中学・高校生活は、決して特別に立派な心がけで過ごしていた訳ではありません。こんな私が、後輩達に、上手に「命」の大切さを伝えることができるのかという不安でいっぱいでした。ですから、話の準備として、データを集めに行った時に、畜産科の授業をしてくださる先生方に、毎日どのような気持ちで家畜の世話をなさっているのかを教えていただきました。その中で、特に心に残った言葉があります。「毎日、感謝の気持ち、ありがたみを忘れないように世話をしている。」という言葉です。

この言葉を聞いて、１年生の時の、鶏のヒナの飼育解体実習の記憶がよみがえってきたのです。畜産科の１年生全員に、一羽ずつ与えられたヒナ。小さな、モコモコした黄色いひよこは、「命のかたまり」そのものでした。自分の手で、ヒナから成鶏まで育てている３ヶ月の間、私は毎日のように黄色いひよこの成長を楽しみながら、精一杯の愛情を注いでいました。かわいかったひよこに、変化があらわれてきます。黄色だった羽毛は白くなり、目に見えて大きく育っていきます。小さな赤いトサカが見える頃には、もうヒナ鳥ではなく、若鶏と呼ぶのがふさわしく思えます。そして、その日が訪れるのです。言葉では言い表せないほどの葛藤がありました。でも、自分で一生懸命育てた鶏の首に包丁を当てて屠殺する時、私はためらいませんでした。授業をとおして、家畜の役割をしっかりと心深く学ぶことができたからです。私は感謝の気持ちでいっぱいでした。

もう一つ心に浮かぶことがありました。それは肉牛のことです。私は肉牛研究会に入っていました。肉牛は、仔牛から育てて、出荷するまでとても大変です。毎日ブラッシングをしたり、散歩をさせたり、成長に応じて餌の配合を考えたりしなければなりません。もちろん、日々の体調管理も、責任の重い仕事です。毎日毎日世話をしながら、肉牛一頭一頭の顔を見ていると、心の底からつらくなる時があります。「もう少しで出荷」ということが、頭の中をよぎる瞬間です。そんな時、私は、「人間はなんてぜいたくな生き物なんだろう。」と強く思います。肉牛たちは、出荷されていくとき、どう感じて、何を思っているのだろう、そう考えてしまうこともよくあります。なかなか出荷の車に乗ろうとしなかった牛のことが、思い出されるのです。」

みなさん、私達農業高校生は、同じ年代のだれにでもできるわけではない、貴重な得難い体験を日々させてもらっています。だからこそ、私達一人一人が、命の大切さについて、しっかりと考え、発信していかなければならないのではないでしょうか。当たり前のように食べているみなさんは、まったく家畜に対する感謝など感じていないのではありませんか。だけど、みなさんが、少しでもそんな心をもって食べてくれたなら、屠殺されていく家畜たちも救われると、私は思うのです。だから私は、この農業高校の中からもみなさんに訴えます。「家畜の命に感謝する気持ち」を忘れないでください。

あの冬の日、ひたむきに聞いている 80 人の小学６年生を前にして、私はそんな願いを込めて話しました。「鶏肉も、豚肉も、牛肉も、当たり前のように食べてはいけないんだよ。一つ一つの命が、みんなのために犠牲になっていることに、感謝する気持ちを忘れないでね。」

ウ　先生の振り返り

学びが広がっていく様子が感じられる。先輩の話を聞いた小学生にとっても、後輩に話をするために準備をして臨んだ高校生にとっても、貴重な体験であったと思う。そして、この体験を全校生に披露する場を得たことで、また学びの成果が広がっていくように思えた。私たち教員は、「生徒から生徒へ」その感動や学びを伝えていく仕組みや機会を、少しでも多く用意したいものだと考える。

５次	支えてくれた人のおかげで「今がある」ことに思いをいたし、生きて在ることに感謝の気持ちをもつ。

(6)　自分の心の中を観察（「内観」）する。「お世話になった人」「かけがえのない人」について、「してもらったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」などを思い出す。

（全２時間で実施）

ア　本時のねらい

「内観」を通じて、他者によって支えられてきた自分、愛されてきた自分、生かされてきた自分に気づく。また、お世話になった人に「して返したこと」を確認することで、自分の行動を振り返り、自己肯定感を持つ。「誰かの役に立つこと」（自分の「使命」）について、思いをめぐらす。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

ふだん何気なく接している人や動物などが、いかに自分の支えになってくれているかを知り、「生かされている」自分に気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

「内観」後に「喪の作業」を扱った絵本を取り上げることで、たとえ、亡くなった人でも自分の中で生き続けていることを感じさせる。

(ｳ) 想像力の育成

お世話になった人が自分をどれだけ大切に思ってくれているかに思いをいたし、誰かにとって支えとなりうる自分の存在を確認させる。

ウ　準備物

・「内観」記録用紙
・絵本『くまとやまねこ』

参考　あらすじ

突然、最愛の友達「ことり」をなくしてしまった、くま。くまは手作りの箱に花びらを敷き詰めて、そっと「ことり」を入れ、持ち歩くようになります。箱の中を見るたびに困った顔をする森の動物たち。そしてみんな決まって言うのでした。「くまくん、ことりはもうかえってこないんだ。つらいだろうけど、わすれなくちゃ」くまは暗く締め切った部屋に一人閉じこもってしまいます。

久しぶりに外へ出たくまは、旅をするやまねこと出会います。それはくまにとって、光あふれるあたらしい時の訪れでした。やまねこの奏でるバイオリンの音に癒されたくまは、「ことり」との思い出に存分に浸ることができたのです。くまは、「ことり」のためにお墓をつくりました。そして、くまとやまねこは音楽を奏でる仲間として、一緒に旅に出ることになりました。

エ　先生の準備

・教員自身が「内観」時のファシリテーターを務めることができるような研修を受ける。
・教員自身の「内観」を事前に行い、「お世話になった人」「かけがえのないペット」などについて、生徒に自己開示できるようにする。
・10 秒呼吸法を習得する。

オ　展開（１校時）

●授業の展開

（導入）

１　ウォーミングアップ

まず、呼吸法をして、しっかりと心を落ち着かせましょう。（腹式呼吸：10 秒呼吸法）

（留意点・ポイント）

・ストレスを和らげ、気持ちを落ち着かせるために、呼吸法が役立つことを説明し、取り組む意欲を高める。

２　学習のねらいについて知る。

この時間は、自分の意識を「内観」して記録します。「内観」とは、自分で心の中を観察してみることです。

（留意点・ポイント）

・記録用紙を配布し、「内観」の意義を説明する。

（展開）

３　自分が他者に支えてもらった体験について思い出す。

これから、今までお世話になった人を一人選んで、その人のことを思い出してみましょう。家族でも、友人でも、かまいません。その人に対して自分はどのように接してきたのかを十分に思い出して調べます。「してもらったこと」「して返したこと」「迷惑をかけたこと」はどんなことがありましたか。できるだけ、相手の立場に立って思い出してください。人でなくても、ペットでもかまいません。

（留意点・ポイント）

・あらかじめ「内観」しておいた、教員自身の、「親への内観」と「亡くなったペットへの内観」の体験を話した。
・生徒は、誰に対して調べるのかを決める。
・楽な姿勢をとり、目を閉じる。教員が指示した３つの項目にしたがって「内観」する。

４　１項目ごとに静かに目を開けて深呼吸し、気持ちを切り替えて、「内観」用紙に記入する。

目を閉じて、具体的な事実を思い浮かべて、用紙に記録しましょう。

（留意点・ポイント）

・丁寧に振り返らせて、しっかりとイメージさせる。
・切り替えられるように、１項目ごとに深呼吸をさせる。
・記入しない生徒に対しては強要しない。

５　シェアリング

隣同士や近くの人と感想を話し合いましょう。

（留意点・ポイント）

・感想を話し合いたくない生徒に対しては、強要しない。
・人によって、様々な体験があることを感じさせる。

（まとめ）

６　本時の感想を書く。

「お世話になった人」のことを「内観」することで、過去における「自分の姿」を深く見つめることができたと思います。自分が、どれだけ支えられて生きてきたかということや、一人では生きられないということを再確認したのではないでしょうか。

（留意点・ポイント）

・実施後すぐに「内観」記録用紙を読み、気になる生徒があれば、直ちに対応する。

（３校時）

●授業の展開

（導入）

１　１校時の授業、「内観」を振り返る。

先程、みなさんに記入してもらった「内観」の感想を紹介します。

（留意点・ポイント）

・クラスの生徒がどういうことを書いているかを、名前は伏せて紹介する。
・様々な「内観」があることを、理解させ、「内観」できていないこともまた、一つの気づきであることを伝える。

（展開）

２　絵本の紹介を受ける。

「内観」をしたことで、いろいろな思いが胸をよぎったと思います。中には、もう亡くなった方や、ペットについての「内観」もありました。ここで、友を亡くしたことをテーマにした絵本「くまとやまねこ」を紹介します。

（留意点・ポイント）

・教員自身が絵本を読み聞かせるよりも、生徒の中で、皆の前で絵本を読みたいという生徒がいれば、その生徒に依頼する。

３　絵本を読むのを聞きながら、内容を理解し、大切な人を喪うことについて考える。

（留意点・ポイント）

・静かに絵本を聴けるように、また、読む生徒が読みやすいような環境を作る。
・読み終わったあとの時間を少しとって、それぞれの生徒に振り返らせる。

４　シェアリング

隣同士や近くの人と感想を話し合いましょう。

（留意点・ポイント）

・感想を話し合いたくない生徒に対しては、強制しない。
・人によって、様々な感じ方があることに気づかせる。

（まとめ）

５　日々の生活の中で、たちどまって考えること、思い出すことの大切さを感じる。

絵本の中に登場した、くまの思いは、だれもが必ず出会う悲しみ・苦しさ・切なさでもあります。大切な人を失ったときに何ができるかを考えてもらえたかと思います。

また、自分自身がだれかにとって大切な人であることについても考えてみましょう。

（留意点・ポイント）

・生徒の様子を見ながら、気になる生徒がいれば対応する。
・気になる生徒については、担任、養護教諭に連絡して、その後の様子についても見守っていく。

カ　生徒の振り返り（「内観」記録より）

(ｱ) 誰に対して「内観」したか

・動物（10）

愛犬・愛猫（８）、担当の牛（１）、解体実習した鶏（１）

・家族（６）

親（４）、姉（２）

・友人（６）、先輩（２）、恋人（２）、先生（２）、白紙（７）

(ｲ) 「内観」の内容

・動物

（愛犬、愛猫）

一緒にいると癒された。もっと世話をしてあげたら良かった。

（担当の牛）

ブラッシングをしてあげた。背中を舐めるなどして甘えてきた。

散歩に行ってやれない日があった。

（解体実習した鶏）

ひよこが鶏になるまでを観察できて、自分も成長できた。

食べるのはとてもつらかったけど、食べたことで喜んでくれていると思う。

屠殺する前に落としてしまって、もも肉が堅くなって捨てなければならなかったことが申し訳ない。

・家族

（親）

学校のことでつらくなったとき、励ましてくれた。

今まで育ててくれた。

両親が離婚したとき、父を選ばなかったことが申し訳ない。

（姉）

話を聞いてくれたり、遊びに連れて行ってくれたりする。

照れるから「ありがとう」が言えない。

服などのプレゼントをあげたり、もらったりした。

困っているときに手助けしてくれる。

（友人）

相談に乗ってくれ、励ましてくれる。傷つけてしまったこともある。

思い出したくないこともある。将来の夢を話し合う。おごってもらうと申し訳ない。

（先輩）

悩んでいるとき、隣で話を聴いてくれた。誉めてもらってうれしかった。

いろいろなことを優しく、厳しく教えてくれる。

（恋人）

励ましてくれた。心配かけないようにした。無理なことを頼んだこともある。

泣いてはいけないのに泣いてしまった。困っているときにたすけてくれた。

弁当やケーキを作ってくれた。つい、要らんことを言ってしまう。

（先生）

学校に行けなくなったとき、何とか行けるようにしてくれた。

先生ががんばってくれる気持ちに応えたいと思った。

期待に応えられないこともあった。

優しくしてくれた。礼儀や技を教えてもらった。優勝して喜んでもらえたと思う。

(ｳ) 「内観」を経験した今、感じていること

・一人に絞って書くのが難しかった。

・自分にとって大切な人だと改めて感じた。

・ちょくちょく「内観」した方が良いと思った。

・改めて振り返って気づいたことがあった。深くまで考えた。

・紙には書ききれなかった。

・かなり落ち着けた。
・大人になってもつきあっていける友達だと思った。
・ゆっくり落ち着いて物事を考えることができた。
・昔のことを思い出すことができて良かった。
・言いたいことをはっきり言える人間になりたいと思った。
・かけがえのない人は誰なのか、とても悩んだ。もっと人のことを考えないといけないと思った。
・こういうのは何となく苦手だ。
・正味、思い出すのがしんどい。
・走馬燈のように、過去のいろいろな思い出がよみがえってきた。
・担当牛をもらうまでは、わからなかったことがわかってうれしい。
・こういう機会があまりないので良かった。
・一日一日を大切に生きることが大切だと感じた。
・ペットを失うときがやって来ると思うと、悲しくてどうにもならない。時間の経つのがいや。
・自分を見直すのに大事な時間だと思う。

(ｴ)　「内観」できなくて白紙だった生徒の感想

・たぶん、お世話になった人やかけがえのない人はいるだろうけど、それに気づかなかった。そういう人を失ってから気づくと思う。それはもう、遅いと思うけど、近くにいるうちは気づけないと思う。
・難しかった。お世話になっているのはわかっているけど、何を書いていいのかわからなかった。
・よくわからない。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

落ち着いた良い時間を過ごせたという生徒がいる反面、思い出したくないことを思い出したという生徒もいた。白紙を提出した生徒も、真剣に考えていたようである。「書けないこと」に気づく、あるいは、「内観」できないことがわかることも大切な自己認識である。親に対する「内観」をした生徒の中には、つらい思いが残った者もいたようである。家庭が安心できる基地としての役割を果たしている場合、却って親への「内観」をしなかったのかもしれない。

「両親が離婚したとき、父を選ばなかったことが申し訳ない。」と記入していた生徒のことが気になったので声をかけた。また担任には、生徒全員の「内観」記録用紙に目をとおしてもらい、心配な生徒がいないかということを確かめてもらった。また記録用紙に目をとおしてもらうことで、今後の生徒理解の一助にしてもらいたいと考えた。

様々な家庭環境があり、対人関係がうまく結べないような生徒もいる。そうしたことを考え合わせると、『内観』の対象は、人でなくてもいいから」という、今回の指示は、生徒の「内観」を進める上で、選択肢が広がったのではないだろうか。畜産科の生徒で、もともと動物が好きな生徒が集まっているから、動物への「内観」が予想以上に多かったのかもしれない。

１日のうちで２時間をとれたので、ゆっくりと生徒の様子を観察できた。「内観」のあと、様々な後悔の念を感じる生徒もいるが、今回のように「喪の作業」を扱った絵本を採り上げことで、失ったもの、亡くなった人に対する思いを浄化できる可能性もあるのではないかと考えた。絵本の読み聞かせを聴いたあとの「振り返り」は、あえてしなかった。泣いている生徒が何人もいて、そのままにしておきたい気持ちだった。動物が主人公であることもまた、優しい気持ちにしてくれたと思う。

＊授業プリント
「お世話になった人」「かけがえのない人」に対する「内観」の記録用紙

年　　組　　番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

「　　人」

［　　］に対する自分について調べます

1　「してもらったこと」「うれしかったこと」にはどのようなことがありましたか？
事実　・
　　・
　　・
そのうち一つを選んで、少し詳しく書いてみましょう。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2　「して返したこと」「喜んでもらえたこと」にはどのようなことがありましたか？
事実　・
　　・
　　・
そのうち一つを選んで、少し詳しく書いてみましょう

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3　「迷惑をかけたこと」「申し訳ないと思えたこと」にはどのようなことがありましたか？
事実　・
　　・
　　・
そのうち一つを選んで、少し詳しく書いてみましょう

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4　「内観」を経験した今、感じていること

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

10　実践を終えて

(1) 先生の振り返り

＜クラス担任の感想＞

解体実習の際は、ただ解体するというだけでなく、「命としていただきなさい」という指導をしている。さっきまで生きていたものを自分自身の中に取り入れるという体験を、自分自身が育てた生き物で実践することで、生徒たちの心も成長すると思う。教科書を読むだけでは感じ取れない「生き物とのつながり」が実感できると考えられる。

特に本校の場合は、いわゆる「街の子」が多く、ペットは飼っていても家畜などが身近にいない環境で育っている生徒が多く、保護者も含めて生徒たちはこうした体験をしていない。自分で育て解体した「鶏肉」を自宅で持ち帰り食べることで、保護者と「命」について向き合うことは大きな意義があるのではないかと思う。

＜筆者の振り返り＞

農業高校ならではの実践ができたと思う。「命」と日々向き合っている生徒たちであるが、自分たちの実践を文字にして書き、言葉にして発することで、より深く「命の大切さ」を実感できたと思う。体験や思いを言語化することで、自分を肯定する気持ちが育ってくる。そして、その「ことば」を他者に伝えることで、自分の生き方を振り返ることができる。

「命の大切さ」を実感することで、自分も他者もお互いに支え合いながら生きていることに気づき、感謝の念をもってくれればと願う。私たちは皆、幸せになるために生まれてきた。しかし、他者を幸せにすることができて初めて、本当の幸せを実感できる。社会に巣立っていく生徒たちが、自分の命を大切に使う生き方を模索するきっかけになってほしい。

今回の実践をとおして、教員が一つの柱を立てて教材を組み立てることが、何より大切だと思えた。私自身もまた生徒たちによって、周りの先生方によって「生かされていること」を実感した。こうした機会を与えていただいたことに感謝している。

(2) 今後の課題

ア　授業実践上の課題

農業高校ならではの実践であったということは、普通高校などでの実践は難しいということでもある。しかし、教科を横断して取り組んだ事例として考えた場合、最も課題となるのは、科や担任との連携であろう。今回の実践例では、実践者が畜産科の担任をした経験があったということが、科との連携を進めやすい大事な要素であった。畜産科の実習や行事にできるだけ参加することで、生徒の気持ちに寄り添うことができるように心がけた。

イ　家庭・地域との連携についての課題

畜産科として「命」と向かい合う学習をすることについて、生徒も保護者も理解しているが、教員側には、生徒の家庭環境や内面を常に理解しようとする配慮が必要である。

特に「内観」の取組などは、生徒と保護者の関係が表面化してくることもあることを十分理解しておかなければならない。

今回、母校の小学校で「命の大切さ」を伝えた生徒の事例のように、生徒の出身校との連携も大切である。本校の場合、全県から生徒を募集していることもあり、学校のある東播磨地域はもちろんのこと、生徒の居住区との連携も必要である。

ウ　学校の組織運営上の課題

すべての教員が「命を大切にする」という視点を持つことは言うまでもないが、学校全体の組織として取り組むためには、教員間の相互理解や協力が欠かせない。お互いの実践を理解し交換し合えるような研修の機会が必要である。

また、部との連携が欠かせない。キャンパスカウンセラー、養護教諭にもあらかじめ、実践内容を相談した。実践中に少しでも心配なことがあれば、すぐに各担当者に連絡し、対応していくことが大切である。

11　参考・引用文献

・『明解　国語総合』　三省堂 2006
・佐野洋子　『100 万回生きたねこ』　講談社　1977
・湯本香樹実／作　酒井　駒子／絵　『くまとやまねこ』河出書房新社　2008
・野田暢子　「構成的グループエンカウンター『内観』の試み」　兵庫県立教育研修所『心の教育授業実践研究第２号』 2000

実践事例５

「人とのつながり」から考える「命」

県立姫路聴覚特別支援学校

１　テーマ

「人とのつながり」から考える「命」

２　実践のねらい（各学部のねらい）

小学部・家族や友達とのふれあいをとおして人とのつながりを感じさせる。
・一人一人の命の尊さ、自分の命の重みについて気づかせる。
・自分が家族から大切にされて成長してきたことに気づかせる。
中学部・相手を理解し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする気持ちを育てる。
・異性に対して理解を深め、思いやりの心を育てる。
・障害に対する認識を自分自身の問題として受け止める。
高等部・社会で生きていくための社会性を育む。
・自分の気持ちや考えを、相手や場に応じたコミュニケーション手段を使い適切に伝える。
・命の大切さを実感させる学習および体験をする。

３　テーマ設定の理由

(1) 本校の概要と児童生徒の実態

本校は、保育相談部・幼稚部・小学部･中学部・高等部・専攻科があり、0 歳から 20 歳までの聴覚障害のある子どもたちが在籍している。本校の児童生徒のみならず通級指導や難聴児童生徒への教育相談など、播磨地区を中心とした聴覚障害教育のセンター的役割を担っている。聞こえにくいという障害の受容、豊かな言語力の習得、こころ豊かにたくましく生きぬく力の育成を教育目標に、個々に応じた系統的な学習支援を実践している。

本校の子どもたちは、聴覚に障害があるが、素直で明るく、のびのびとした学校生活を送っている。一方、個々の障害の程度や発達状況、能力等が異なるため、個々の実態に応じた教育が必要である。聴覚障害のみの者だけでなく知的障害や自閉症等の他の障害がある者も在籍しており、細かな配慮を必要とする者が多い。また、小学校に入学したのち、高学年になって本校に転入してくる児童生徒も多く、基礎学力の定着が厳しい者や、自己受容ができず心の問題のある者もいる。

これらの児童生徒一人一人が学校での活動、地域活動、交流学習等、多くの人々とのふれあいの中で、自己を受容し、他人を思いやり、共感的理解と信頼関係を深め、命と人権を大切にする心を育んでいくことが大きな目標になっている。

(2) 指導のポイント

【感動の体験】
・家族とのふれあいをとおして、自己存在感をもたせる。
・自分の気持ちを素直に表現することにより、分かり合えることを感じさせる。
・生命誕生の素晴らしさや命のかけがえのなさを実感させる。
・自分の命は多くの人の支えによって誕生し、周りの人の愛情に包まれて育てられたものであることに気づかせる。
・同じ障害がある者どうしや同世代の生徒どうしで、励まし合い助け合う気持ちを味わう。
・戦争の悲惨さを知り、命の大切さを感じとる。

【感性を育む】
・友達のいいところを尊重することの大切さに気づく。
・自分の素直な気持ちをきちんと伝え、それを受けとめてもらう満足感を感じさせる。
・自分を大切にすることは、両親や家族、周りの人の願いであることを実感させる。
・お母さんのお腹の中で育っていく命の神秘さと尊さに気づく。

・友達の「好み、興味、関心」を知ることにより、友達に共感し、より深く知りたいと関心を深める。
・障害のある方で、現在活躍されている方の体験談を聞き、障害といかに向き合って生きていくかを考える。

【想像力の育成】
・聞こえる人、聞こえない人両方の立場を思いやりながら、分かり合おうとする。
・コミュニケーションがうまくいかないときに、自分の言動を振り返り、友達の気持ちを想像させる。
・誕生を待つ母親や家族の気持ちを想像する。
・自分が好きなこと、やりたいことについて語る。
・世の中には様々な困難を抱える人が生きていることを知る。今後、どのようなユニバーサルデザインがあれば良いか、考える。
・将来の社会生活で協力し合える関係を考える。
・自分自身が社会に役立つ存在であることを認識する。
・災害時や緊急時を想定して、その場で困っている人のために何ができるのか考えることができる。

４　事前

(1)　先生の準備
・教員自身が自尊感情を高める体験や、自己再発見の体験をしておく。
・授業だけでなくすべての教育活動の中で命を大切にしていこうとする視点や姿勢を持つ。
・教員自身が人生の振り返りを行い、命に対する深い感覚を子どもたちに伝えていこうとする視点や姿勢を持つ。
・現在悲嘆にある子どもが存在する可能性もあるので、事前事後の個別指導を充実させる。

(2)　教育課程上の位置づけ
・特別活動
・総合的な学習の時間
・保健体育

(3)　子どもたちの準備
・子どもどうしが共感し合えたか振り返る。
・一人一人の命の尊さ、自分の命の重みについて振り返る。
・自分の誕生に関して、これまで聞いたことなどについてまとめる。
・障害に対する認識を自分自身の問題として受け止めているか振り返る。
・大きな集団で学習することの楽しさや緊張感等を味わい、自分をどう発揮し、コミュニケーションの力を高められたか振り返る。
・相手を思いやる気持ちや、感謝を表そうという気持ちがもてたか振り返る。
・沖縄の自然・歴史・文化を学ぶことによって、その特徴についてまとめる。

５　本校の実践の特色

(1)　自らの障害による困難を改善・克服して「生きる力」を育てる学習活動。
(2)　一人一人の状態、障害の程度に合わせた指導。
(3)　生命の誕生に関心をもったり、感動したりする体験をとおして、自らの誕生を振り返って、かけがえのない自分の命だけでなく、他者や小さな命を慈しみ大切にしようとする心情や態度を育てる学習活動。
(4)　主体的に生きることができる力を育てるとともに、心の通い合う適切なコミュニケーションの手段を学ぶ。
(5)　自分の成長を実感することによって、成長を支えてくれた周囲の人たちへの感謝や思いやりの心を育てる。
(6)　障害に対する認識を自分自身の問題として受け止める学習活動。
(7)　戦争体験者から話を聞き、沖縄南部戦跡やガマを見学することで、「命の大切さ」について実感させる体験学習。

６　目標分析表

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
事前	○生まれたときの写真やへその緒を見たり、生まれたときのエピソードを聞いたりする。	○生まれてきたときと今の体の大きさを比べ、自分の成長に興味を持つ。	○出産のときの母親の話を聞き、産んでくれたことに感謝の気持ちをもつ。	○自分や友だちの名前にはいろいろな願いがあることに気づく。	
1次（8時間）小学部	「自分がすき・友達がすき」 ○自分の好きなこと、得意なことを紹介する。 ○友達のいいところさがしをする。 ○ルールを守って仲良く遊ぶ。「お友達を招待しよう」（喫茶店・ゲーム） ○聞こえる人、聞こえない人がいることを知り、身近な人はどちらか知る。 ○お互いの違いを受け止めながら、仲良く遊ぶ。	○自分の好きなことや得意なことを発表する中で、自分のよさに気づく。 ○友達の好きなところ・がんばっているところについて考える。 ○友達と一緒にルールを守って、ゲームに取り組む。 ○聞こえること、聞こえないことの違いについて考える。 ○自分と友達の似たところ、違うところに気づきながら、お互いのよさについて考える。	○友達に認めてもらう喜びを感じる。 ○友達のいいところを尊重することの大切さに気づく。 ○ルールを守らないと、ゲームが楽しくないことに気づく。 ○聞こえる、聞こえないの違いがあることに気づく。 ○自分と同じように友達がいろんなことに興味を持って取り組んでいることに気づく。	○さらに自分の可能性を高めようという気持ちになる。 ○話し合いをとおしてお互いを高めあうことの大切さを実感する。 ○相手の立場を考えて接することの大切さを実感する。 ○聞こえる人、聞こえない人両方の立場を思いやりながら、分かり合おうとする。 ○コミュニケーションがうまくいかないとき、自分の言動を振り返り、友達の気持ちを想像する。	○自分のよさを感じ取らせることができたか。 ○子どもどうしが共感し合えたか。 ○お互いを認め合って遊べるような支援ができたか。 ○自分や身近な人の聞こえについて知り、分かり合おうとする気持ちを持たせられたか。 ○子どもどうしがお互いの違いを受け入れることができたか。
2次（12時間）小学部	「聞こえない私が好き」 ○写真集「ヒトの誕生」を見ながらお腹の中で赤ちゃんが成長していく様子を知らせ、自分たちも大切に育てられたことに気づく。 ○自分の成長をまとめる。名前の由来を調べたり、難聴がわかったきっかけと両親の思いを知る。 ○聞こえなくて困ることを考える。 ○聴覚特別支援学校に通う意味を理解する。	○母親からへその緒をとおして栄養をもらい成長していく様子を知る。 ○生まれたときの様子や子どものころの写真を見ながら、大切にされてきたことを知る。 ○自分や友達の名前の由来を聞き、名前には親の願いが込められていることに気づく。 ○聞こえなくて困った経験について話し合う。 ○いくつかの選択肢の中で、その学校に入学を決めた両親の願いに気づく。	○お母さんのお腹の中で育っていく命の神秘さと尊さに気づく。 ○自分がこの世でかけがえのない存在であることに気づく。 ○補聴器をつけ聞こえるようになってほしいという親の気持ちに気づく。 ○耳が聞こえないことで、友達も自分とよく似た経験・思いを味わったことに気づく。 ○両親の願いに応えようとする気持ちを育てる。	○誕生を待つ母親や家族の気持ちを想像する。 ○名前を考えているときの親の願いを想像する。大切に育てられたことを実感する。 ○聞こえたときの親の喜びを想像する。 ○困ったときの対処法を考える。 ○普通学級、難聴学級、特別支援学校での学習の様子を想像する。	○一人一人の命の尊さに気づかせることができたか。 ○自分の命の重みを想像させることができたか。 ○友達の名前の由来にも興味をもたせることができたか ○親の想いが感じ取れたか。 ○聞こえないために生じる困難に気づき、その対処法を考えさせ前向きに生きようとする気持ちをもたせたか。 ○両親の願いをふまえて、なぜこの学校に通うのかということを理解させたか。

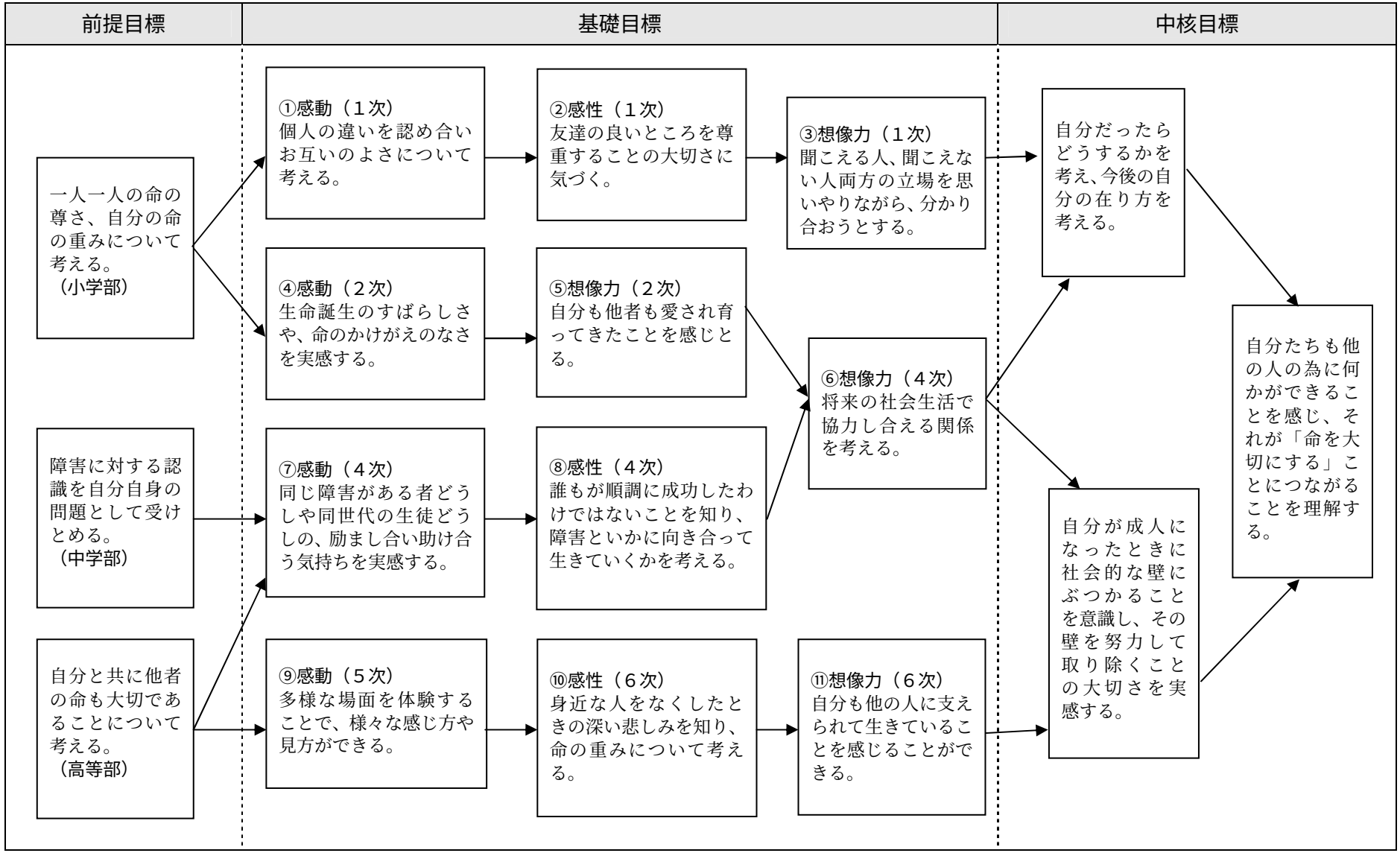
「人とのつながり」から考える「命」（県立姫路聴覚特別支援学校）

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
	○「ヘレン・ケラー」の伝記を読み、障害を認め努力することの大切さを知る。 ○中学部でがんばりたいことや将来の夢について語り合う。	○障害がありながらも、積極的に社会と関わろうとしたヘレン・ケラーの姿を想像し、前向きに生きていくことの大切さに気づく。 ○お互いの夢を聞き合い、共にがんばろうとする。	○ヘレンの生き方で、すごいなあと思ったことを考える。 ○自分の得意なことを生かす方法や、自分の短所を克服する方法を考える。	○サリバン先生の心情を考え、自分に関わってくれた人たちの心情を想像する。 ○自分が好きなこと、やりたいことについて語る。	○厳しい指導の裏には深い愛情が含まれていることに気づかせたか。 ○これからの生活に夢を持たせることができたか。
3次（6時間）中学部	○セルフポスターづくりをする。 ○友達とケンカになった自分の経験を振り返る。 ○思春期における体の変化について、自分の体の問題として興味・関心をもつ。	○友達の様々な良いところや得意なことを知り、友達をいろいろな面から理解する。 ○自分の経験より、どのような方法で友達と仲直りできたかを考える。 ○体の変化の学習では、単に体の形や機能が変わるという知識だけでなく、「妊娠が可能になる」ことに気づく。	○友達の「好み、興味、関心」を知ることにより、友達に共感し、より深く知りたいと関心を深める。 ○友達と仲直りできたときの気持ちを考える。 ○「生命の尊重」や「自己の性の自認（受容）」、「大人への自覚」などの心理的な発達の観点を踏まえて、生命誕生のつながりに気づく。	○友達を理解し、自分にとってどういう意味を持ち、どのように関係を持つべきかに気づく。 ○みんなで遊ぶためには、どのようにしたら良いかを考える。今後、友達と仲良くしていくためには、どのようにすれば良いかを考える。 ○正しい知識の習得は、心の健康や生活と深くかかわることに気づかせる。	○学年当初のクラスづくりにおいて生徒の他者理解に役立ったか。 ○自分の行動を振り返らせることができたか。友達と仲直りできたときの気持ちや、今後の自分の行動を考えさせることができたか。 ○体の変化が起こるしくみの学習をとおして、「妊娠が可能になる」ことを理解させたか。
4次（12時間）中学部	○シャンプー容器の印などのユニバーサルデザインについて知る。 ○自分と同じ障害がある人の活躍や様々な問題点をビデオや体験談をとおして知る。 ○自分と同じ障害がある人の活躍を知る。障害や失敗にくじけず、希望を持って粘り強くやり通す姿勢を持つことの大切さを知る。 ○交流活動 ○同じ障害がある生徒との交流行事を行う。 ○同世代の生徒との交流行事を行う。	○シャンプー容器の印（側面のギザギザ）に気づく。点字ブロック・ノンステップバスなどの身の回りにあるユニバーサルデザインに気づく。 ○Ｔさんが子育ての中で、学校にファックスの設置を求めて粘り強く働きかけ、実現させたことを理解する。 ○自分と同じ障害がある人の活躍を知り、障害による困難を克服することに生かす。 ○同じ障害がある者どうしや同世代の生徒どうしで、励まし合い助け合う気持ちを味わう。	○ユニバーサルデザインが生み出されるまでの背景を知る。障害の有無に関係なく、すべての人にとって使いやすいものだということを知る。 ○手話通訳制度を利用するようになったきっかけや、利用する以前と以後の心境の変化を理解し、手話通訳制度の必要性を認識する。 ○障害のある方で、現在活躍されている方が決して順調に成功したわけではないことを知り、障害といかに向き合って生きていくかを考える。 ○仲間意識を再確認する。	○世の中には様々な困難を抱える人が生きていることを知る。今後、どのようなユニバーサルデザインがあれば良いか、考える。 ○自分が、成人になったときに社会的な壁にぶつかることを意識し、その壁を努力して取り除くことの大切さを実感する。 ○自分だったらどうするかを考え、今後の自分の在り方を考える。 ○将来の社会生活で協力し合える関係を考える。	○ユニバーサルデザインの意義と生まれた背景について、理解させることができたか。 ○障害に対する認識を自分自身の問題として受け止めさせることができたか。 ○作成した資料を用いて、障害の受容や進路意識、生き方などの点について、生徒に十分理解させることができたか。 ○大きな集団で学習することの楽しさや緊張感等を味わい、障害を受け止め、自分のよさを発揮し、コミュニケーションの力を実践的に高めさせることができたか。

「人とのつながり」から考える「命」（県立姫路聴覚特別支援学校）

	学習活動	感動の体験	感性を育む	想像力の育成	先生の振り返り
６次（６時間）高等部	○戦争体験者から話を聞き、沖縄南部戦跡やガマを見学することで、戦争の悲惨さを知り、命の大切さを感じとる。 ○災害や防災に関する正しい知識と生きる力を身につけさせることで、生命や社会について考える。	○沖縄の歴史や風土を知る。 ○震災の恐ろしさを実感し、命の重みを感じるとともに、自分たちが今生きていることの素晴らしさを感じる。	○聾者の戦争体験者の話を聞いて、沖縄の人々の平和への願いを感じとる。 ○身近な人をなくしたときの深い悲しみを知り、命の重みについて考える。	○沖縄の自然・歴史・文化を学ぶことによって、多様な風土や文化があることを知る。 ○災害時や緊急時を想定し、その場面で困っている人のために何ができるのか考える。	○現在の沖縄をめぐる問題を知り、平和の尊さについて理解させることができたか。 ○防災の大切さや命の重みを実感し、より良い地域づくりや人間関係づくりのために貢献していこうとする意欲をもたせることができたか。
事後	○振り返りを行う。 ○「命の大切さ」実践尺度に記入する。				

７　目標構造図


前提目標
基礎目標
中核目標
一人一人の命の尊さ、自分の命の重みについて考える。（小学部）
障害に対する認識を自分自身の問題として受けとめる。（中学部）
自分と共に他者の命も大切であることについて考える。（高等部）
①感動（１次）個人の違いを認め合いお互いのよさについて考える。
②感性（１次）友達の良いところを尊重することの大切さに気づく。
③想像力（１次）聞こえる人、聞こえない人両方の立場を思いやりながら、分かり合おうとする。
④感動（２次）生命誕生のすばらしさや、命のかけがえのなさを実感する。
⑤想像力（２次）自分も他者も愛され育ってきたことを感じとる。
⑥想像力（４次）将来の社会生活で協力し合える関係を考える。
⑦感動（４次）同じ障害がある者どうしや同世代の生徒どうしの、励まし合い助け合う気持ちを実感する。
⑧感性（４次）誰もが順調に成功したわけではないことを知り、障害といかに向き合って生きていくかを考える。
⑨感動（５次）多様な場面を体験することで、様々な感じ方や見方ができる。
⑩感性（６次）身近な人をなくしたときの深い悲しみを知り、命の重みについて考える。
⑪想像力（６次）自分も他の人に支えられて生きていることを感じることができる。
自分だったらどうするかを考え、今後の自分の在り方を考える。
自分が成人になったときに社会的な壁にぶつかることを意識し、その壁を努力して取り除くことの大切さを実感する。
自分たちも他の人の為に何かができることを感じ、それが「命を大切にする」ことにつながることを理解する。

８　事前の教員研修と指導の概要

(1) 事前の教員研修（実施の時期については、「(2) 指導の概要」の中に明記）

	研修内容
a	○自尊感情を高める体験をする。 ・「わたしはわたしが好きです。なぜなら・・・」　　・「ここがあなたのいいところ」
b	○「聞こえないって　どんなこと」の講習 ・聞こえのしくみ、聞こえの様子、障害を認識させるための支援方法について考える。
c	○「コミュニケーションモード」に応じた個別支援 ・聴覚優位グループの支援、視覚優位グループの支援、重複児童の支援法を研修する。
d	○命や人権に関する諸問題の研修 ・新聞記事等をとおして、命や人権に関する諸問題を学ぶ。
e	○交流校職員との事前の打ち合わせ ・交流活動のねらい、生徒の実態について共通理解を図る。
f	○コミュニケーション能力を高めるための研修 ・自分の気持ちや考えを相手に伝える力、他者の気持ちを受け止める力を身に付ける。
g	○情報の発信の在り方について研修する。 ・相手の立場に立ち、わかりやすく伝える手法について模擬体験をとおして学習する。
h	○自分自身を知るワークシートについて研修する。 ・自分自身を知るワークシートに記入することで、自分を見つめなおし、理解を深める。
i	○沖縄の文化や歴史について研修する。 ・修学旅行資料を活用し、沖縄の文化や歴史（沖縄戦線など）について学習する。

(2) 指導の概要（全 50 時間）　１・２次(小学部)　３・４次(中学部)　５・６次（高等部）

	内　　容
事前	○自尊感情を高める体験をする。 教員研修　a
1次(8時間)	小学部 ○「自分がすき・友達がすき」　指導実践　p74～p75 ・自分の好きなこと、得意なことを紹介する。 ・友達の「いいとこさがし」をする。 ・ルールを守って仲良く遊ぶ。「お友達を招待しよう」（喫茶店・ゲームランド） ・聞こえる人、聞こえない人がいることを知り、身近な人はどちらか知る。 ・お互いの違いを受け止めながら、仲良く遊ぶ。
2次(12時間)	小学部 ○「聞こえない私が好き」　指導実践　p76～p77　教員研修　b ・写真集「ヒトの誕生」を見ながらお腹の中で赤ちゃんが成長していく様子を知らせ、自分たちも大切に育てられたことに気づく。 ・自分の成長をまとめる。名前の由来を調べたり、難聴がわかったきっかけと両親の思いを知る。 ・聞こえなくて困ることを考える。 ・聴覚特別支援学校に通う意味を理解する。 ・「ヘレンケラー」の伝記を読み、障害を認め努力することの大切さを知る。　教員研修　c ・中学部でがんばりたいことや将来の夢について語り合う。

３次（６時間）	中学部 ○友達関係について考える。　指導実践　p78　教員研修　d ・「いいとこさがし」をし、友達の良いところを認め、他人を思いやる気持ちをもつ。 ・自分の体験をもとに、どのような行動や言葉が相手を傷つけるかを考え、良好な人間関係を築くためにはどうすれば良いか話し合う。　指導実践　p79 ○異性に対して理解を深める。　指導実践　p80～p81 ・「男女平等は家庭から」を読み、男女が分け隔てなく活躍する社会にするためにはどうすれば良いかを話し合う。 ・男女の性器の仕組みとはたらきについて理解し、妊娠のメカニズムを知る。 ・思春期の体の変化によって妊娠が可能になることを認識し、適切な男女交際について考える。
４次（12時間）	中学部 ○自分の障害について考える。　指導実践　p82～p83 ・障害のある人や課題を抱えた人が、自分にとって何が必要かを表すことの大切さを確認する。 ・自分と同じ障害がある人の活躍を知り、障害や失敗にくじけず、希望を持って粘り強くやり通そうとする気持ちをもつ。　指導実践　p83～p84　指導実践　p85～p86 ・成人聴覚障害者の体験談を聞き、様々な問題点（「子育て」「医療」「学校と職場の違い」など）についての知識を身に付ける。　教員研修　e ○交流活動 ・同じ障害がある生徒との交流をとおして、自己の障害に伴う不安や悩みを軽減し、肯定的に積極的に活動する姿勢を持つ。 ・同世代の生徒との交流をとおして、相手を理解し、積極的にコミュニケーションしようとする気持ちをもつ。
５次（６時間）	高等部 ○相手の立場で考えることができるコミュニケーション能力を身に付ける。　教員研修　f　指導実践　p87～p88 ・作文を書くことによって、相手の気持ちや自分の気持ちを整理し、相手の立場に立って考えることの大切さを学ぶ。　教員研修　g ・相手の状況（上司、先輩、後輩、友達等）に応じた話し方や言葉遣いについて考えさせる。 ・交流活動をとおして、多様な人々と触れ合うことで、積極的なコミュニケーションの在り方について考えさせる。 ○子どもの社会性を育む。 ・社会で生きていくための力を身に付ける。　教員研修　h ・異学年交流や地域交流をとおして、人と触れ合うことの楽しさや集団の一員として役割を果たすことの充実感を味わわせる。 ・奉仕活動を通じて、子どもたち自身が社会に役立つ存在であることを認識し、社会との連帯感の育成や社会生活に必要なルールなどを習得させる。
６次（６時間）	高等部 ○命の大切さを実感させる学習および体験　指導実践　p88～p91　教員研修　i ・修学旅行（沖縄） 戦争体験者からの体験談を聞き、沖縄南部戦跡（ひめゆりの塔や平和祈念公園・資料館）やガマを見学することで戦争の悲惨さを体感させ、命の大切さを感じさせる。

９　指導実践

１次	小学部：自分がすき・友達がすき

(1)　第６時

ア　本時のねらい

・ふだん仲間と仲良く遊ぶ場面の少ない重複学級の児童がリーダーとなり、交流学級の友達に遊びを紹介する。

・互いにルールやマナーを守って楽しく遊ぶ。

イ　指導のポイント

(ｱ)　感動の体験

ふだんはわからなかった、友達の素晴らしい一面を知らせる。

(ｲ)　感性を育む

ルールやマナーを守って仲良く遊ぶと、お互いに楽しいことに気づかせる。

(ｳ)　想像力の育成

その場その場で、友達の気持ちを想像し行動をとろうとさせる。

ウ　準備物

①輪投げ盤、輪３　　②パターゴルフ、子ども用クラブ、ゴルフボール

③ころころボード、ゴルフボール　　④輪ゴムガン、的、輪ゴム

エ　先生の準備

遊び屋台の看板、チケット入れ、スケジュール、お茶、テレビ（ＤＶＤ）

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　はじめのあいさつ（Ａ児）	授業前の温かい雰囲気を大切にする ・重複学級児童どうしにわだかまりがあれば解きほぐす。
展開	２　ゲーム説明と見本→チケット→順に友達を呼び遊ぶ ①Ｂ児　（輪投げ） ②Ｃ児　（パターゴルフ） ③Ｄ児　（ころころボード） ―ＶＴＲ（Ｂ児）　＆　お茶タイム（Ａ児）― ④Ａ児　（輪ゴムガン）	必要以上の支援をしないで、ゆっくり見守り、成就感、満足感を持たせる。 交流学級の児童には、手伝わずに見守ってくれるように声かけをする。 ・Ｂにとって刺激が多すぎるときは環境を整理して提示し、全部させようとしない。促して見守る。 ・見通しの持てる物をタイミングよく手渡しながら、Ｃの自発的行動を促す。 ・手話混じり文で交流学級の児童にも理解してもらおうとする気持ちでルールを説明させる。ルールが守られないと、勝っても周囲の共感が得られないことに気づかせる。 ・わかりやすく説明できるように国語科で口話と手話を練習しておく。 ・必要に応じて声をかけ、別の対応を本人に考えさせる。

まとめ	３　お礼のことば（C児） ４　感想タイム	・楽しく遊べてよかったこと、これからもまた遊びたいことを、みんなに伝える。 ・全員がそれぞれ認められるように感想を取り上げ、まとめる。 ・これをきっかけにまた遊べるように、時間と場所を設定する。

カ　児童の振り返り

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) ふだんは気づけない長所や頑張りにみんなが気づき、温かい拍手を送ってくれてよかった。
(ｲ) 共に仲良く遊ぶためのヒントやきっかけが得られてよかった。
(ｳ) 自然な状況ではまだうまく遊びの輪に溶け込めない。教師のさり気ない支援や子どもの心の成長に支えられた、楽しい遊び体験を積み重ねたい。

２次	小学部：聞こえない私が好き

(2) 第 10 時

ア　本時のねらい

ヘレン・ケラーを支えた周りの人の存在に気づく。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

できた喜びを得るとき等、見守られ支えてもらっていることを知らせる。

(ｲ) 感性を育む

サリバン先生の願いや心情を理解させる。

(ｳ) 想像力の育成

自分を振り返り、自分を支えてくれた人や家族の願いを想像させる。

ウ　準備物　　まとめプリント

エ　先生の準備　テレビ（DVD）「ヘレンと共に」字幕つき

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　前時の学習を振り返る。 ・サリバン先生がヘレンの家庭教師になることを決めたときの気持ちを確かめる。	・場面を再確認する。 （字幕つき DVD）
展開	２　サリバン先生の気持ちを考える。 ①　スプーンをなげまわる、覚えない、言うことを聞かないヘレンに悪戦苦闘しながら厳しく教えようとしたが、思うように教えることができないサリバン先生の気持ち ②　はじめて「水」とヘレンが指であらわしたときのサリバン先生の気持ち ③（「水」と指文字で表現できたときのヘレンの気持ち） ④　ヘレンに言葉を教え、付き添っているサリバン先生の気持ち	・サリバン先生の心情を考えることで、自分の小さいときから関わってくれている人の心情は、どんな思いであったのかを感じさせる。 ・ヘレンが「水」と覚えてからの様子と今までの様子の違いにも気づかせる。 ・プリントに書かせる。友達の発表を聞いて自分と同じ気持ち、違う気持ちに感じるのはなぜなのかを考えさせる。
まとめ	３　自分を振り返り、発表する。 ・自分の小さいときに、発音や言葉を親から教えてもらい練習しているとき、なぜ厳しかったのだろうか。	・自分の幼いときを思い出し、厳しい訓練の裏には親の願いや愛情が含まれていることに気づかせる。

カ　児童の振り返り

・アニー・サリバン先生は、自分も目が不自由だったけど手術をして　目が見えず、聞こえないヘレンのために死ぬまで付きそって教えたすごい人です。目の見えない人が、こまっていたらわたしも助けたいです。
わたしのお母さんもサリバン先生のように厳しかったけれど今おもえば、わたしのためだったのだなあ。お母さん、ありがとう。

・ヘレンが、日本や世界の国へ行くことで、「目の見えない・耳の聞こえない人々に点字・手話を教えたり、目の見えない人のための団体ができたり、障害のある人々にたいする周りの理解や障害のある人々自身に自分のためにも行動をすることが大切だ。」と考えさせたことは、すごい力だなあと思った。
・ヘレンは、自分の障害について「わたしは、障害を不幸だと思わない。不便だけれど、神様がわたしにあたえてくださったのだから。」と言っています。私も聞こえないことは、不便だけど私も障害があるから同じ聞こえない人の気持ちやいろんな障害のある人の気持ちがわかる。
・ヘレンの行動を調べて、私は大きくなったらヘレンみたいにできないけれど、ヘレンが、もっと勉強したいと思ったように私も大学にいって、先生か教育をする人になりたい。この学校の先生になりたいです。
・「わたしは、１人の人間です。わたしは、何でもできるわけではありません。それでもできることは、あります。わたしにできることは、喜んでやるつもりです。」と言うヘレンのこの言葉が、好きになりました。それまでは、私は障害があるから無理だと思っていました。でも、「聞こえなくても私にもできることがあるんだ。あきらめなくてもいいんだ。」とわかってやる気になりました。
・「元気を出しなさい。今日の失敗ではなく、明日に成功するかもしれないことを考えるのです。」と言うヘレンの言葉に、わたしは元気と勇気が出てきました。
・大阪市立ろう学校の先生が、アメリカにいるヘレンに相談して今の日本の指文字ができたことを知っておどろきました。だから日本の言葉であらわしにくい文字は、アルファベットになっているんだ。今のわたしたちが指文字を使って話ができるのもヘレンのおかげなのだなあ。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
・ヘレンが理解し始めたときと、それ以前の違いなどから、教えた側にとっても苦労して関わるほどその子に対する愛情、ちょっとした成長の喜びが大きいことを感じとらせることができた。
・読み取りだけでなく視覚支援のＤＶＤを活用したので表情や場面の様子を捉えやすく、サリバン先生の気持ちを理解させることができた。
・サリバン先生とヘレンの関係を自分に置き換えて振り返らせることで、自分の幼児期の言葉の訓練のときのことを良く覚えていたので、「お母さんが、なぜ厳しかったのか。」と自分を支えてくれた人の心情や願いも気づかせることができた。
・インターネットや本から調べ学習をする中で、「ヘレンの生い立ちから世界の国々で講演する様子、ヘレンの偉業とその影響や恩恵、どうしてそのようなことをしようとしたのか。なぜヘレンは学ぼうという意欲が強いのか。」を知ることができ、自分の目標やくじけそうになったこと等、今までの自分を見つめ直すことができた。「自分だってできるんだ。」「障害があるから無理なんだと思わなくていいんだ。」と考えることができ、また「将来やってみたいこと、なってみたい職業」等を考え、これからの自分を高めていこうとする一助になった。
・ヘレンの残した言葉を知って、その言葉に勇気づけられていた。その中で気に入った言葉を掲示物にしたので、それを目にするたび「がんばらなくっちゃ。できるんだ。自分も挑戦してみよう。」という自主的な行動が見られた。

３次	中学部：友達関係について考える

(3) 第１時

ア　本時のねらい

セルフポスターづくりをとおして、「いいとこさがし」をして友達の良いところを認め、他人を理解し、思いやる気持ちをもつ。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

友達の様々な良いところや得意なことを知り、友達をいろんな面から理解させる。

(ｲ) 感性を育む

友達の「好み、興味、関心」を知ることにより、友達に共感し、より深く知りたいと関心を深めさせる。

(ｳ) 想像力の育成

友達を理解し、自分にとってどういう意味を持ちどのように関係を持つべきかを気づかせる。

ウ　準備物

記入用紙、画用紙、マジック、色鉛筆、マグネット

エ　先生の準備

生徒が他者から肯定的な評価を受けやすいように自分のキャッチフレーズや得意なことを整理しやすいように記入用紙を用意する。

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　自分のキャッチフレーズや得意なことなどを考えて用紙に記入して整理する。	・友達に知ってもらいたいことや、自慢したいこと、好きなことなど、友達と話したいことを考えて書かせる。 ・生徒が記入に困っているときは参考になる生徒の意見を板書し、例を示して書かせる。
展開	２　記入用紙を見ながら、自分をアピールするポスターを作る。 ３　ポスターができたら、教室の壁に貼って一人ずつ発表する。 ４　ポスターを見て、感想を言い合う。	・楽しい雰囲気のポスターになるように描かせる。 ・自分の得意なことや知ってほしいことを発表させる。 ・感想を言い合うときには肯定的な評価をするように促す。
まとめ	５　全員のポスターに各賞を（ビックリしたで賞等）を作り、指導者と一緒に受賞者を決めて表彰し、お互いを認め合う。	・クラスの全員が各生徒の興味や関心のあることを共有し、仲間意識をもたせる。

カ　生徒の振り返り

・最初は何を書いて良いかわからなかったが、書いているうちにどんどん書きたいことがでてきて、最後は小さい字になってしまった。
・自分の好きな自動車やゲームのアイテムをたくさん描くことができた。
・昔、同じところに旅行に行った友達がいた。
・同じクラブでがんばろうという気持ちになった。
・自分と同じようにペットを飼っている友達がいた。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ)　学年当初のクラスづくりにおいて生徒の他者理解に役立った。そのことで趣味や所属しているクラブ、家族旅行などの話題で会話する機会が増えた。

(ｲ)　発言に消極的な生徒もポスターで表現することで、より多くの内容を伝えることができた。

３次	中学部：良好な人間関係を築くためには

(4) 第３時

ア　本時のねらい

・自分の経験から、自分のどのような行動や言葉で、友達とケンカになるかを考える。

・どのようにすれば、友達とのトラブルがなくなるかを知る。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

自分の経験から、どのような方法で友達と仲直りできたかを考えさせる。

(ｲ) 感性を育む

友達と仲直りできたときの気持ちを考えさせる。

(ｳ) 想像力の育成

・みんなで遊ぶためには、どのようにしたら良いかを考えさせる。

・今後、友達と仲良くしていくためには、どのようにすれば良いかを考えさせる。

ウ　準備物

短冊、パソコン、プロジェクター、「５年生の道徳」（文溪堂）の「みんなで遊びたいね」のイラスト

エ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　自分の経験から、どのような行動や言葉で、友達とケンカになるかを考える。	・自分の経験をもとに、具体的な例を考えさせる。
展開	２　そのときの気持ちを考える。	・気持ちの発表が難しければ、教師が例を示す。
	３　なぜ、ケンカやトラブルになったかを考える。	・理由をきちんと考えさせる。どのような行動をとったかを考える。
	４　「みんなで遊びたいね」のイラストを見て、どうしたら仲間に入れるかを考える。	・パワーポイントにより、イラストを提示する。自分の考えを引き出せるようにする。
まとめ	５　これからどのように行動すれば良いかを考える。（短冊に記入する）	・これからの行動や自分の気持ちが伝わらないときにどのようにすれば良いか考えさせる。 ・意見を短冊に書くようにして、これからの約束にする。

オ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 自分の行動を振り返ることができたか。

(ｲ) 友達と仲直りできたときの気持ちを考えることができたか。

(ｳ) 今後の自分の行動を考えることができたか。

３次	中学部：異性に対して理解を深める

(5) 第５時

ア　本時のねらい

・思春期における体の変化について、自分の体の問題として興味・関心を持たせる。

・思春期には、性ホルモンの働きによって性機能が成熟し、女子では卵子が成熟し、男子では精子が形成されることを理解させる。

・妊娠が可能になることに気づき、自他の体を大切にする心情を養う。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

体の変化の学習では、単に体の形や機能が変わるという知識だけでなく、「妊娠が可能になる」ことに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

「生命の尊重」や「自己の性の自認（受容）」、「大人への自覚」などの心理的な発達の観点を踏まえて、生命誕生へつながりに気づかせる。

(ｳ) 想像力の育成

正しい知識の獲得は、心の健康や生活と深くかかわることに気づかせる。

ウ　準備物

保健教科書、ワークシート、白紙の紙、マグネット

エ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　思春期の体について考える。 発問　思春期には、男女の体にどのような変化が現れるのか。 小学校のときを思い出して答えなさい。 ・生徒が発言しにくいときは、紙に書かせて黒板に掲示する。 ・生徒の意見を板書する。 板書　思春期に起こるからだの変化 女子　　男子 ２　ワークシートに記入する。	・思春期とは子どもの体から大人の体に変化していく時期のことであることを理解させる。 ・ワークシートには、板書と教科書を参考に記入させる。
展開	３　体が変化する理由について考える。 発問　何が原因で体は変化していくのか答えなさい。 ・　内分泌腺の図を示し、性ホルモンが原因であることを説明する。 ４　ワークシートに記入する。 ５　性ホルモンの働きと体の変化を考える。	・二次性徴とは思春期に現れる男女の体つきの特徴であることを理解させる。 ・体の変化が起こる時期には個人差があることを理解させる。 ・体の変化は、だれにでも起こることであり、なぜ起こるのか科学的に知っておけば安心できることを理解させる。 ・思春期になると脳の下垂体から性腺刺激ホルモンが分泌されるようにな

	板書 体の変化が起こるしくみ 下垂体 ↓　性腺刺激ホルモン 性腺 ↓　性ホルモン（男性ホルモン、女性ホルモン） 体つきの変化、性器の成熟、卵子の成熟、精子の形成 発問 生殖機能が発達することから、どのようなことが言えるのか。何が可能になるのか。答えなさい。 ６　ワークシートに記入する。	り、その刺激により性腺（卵巣、精巣）の働きが活発になることを理解させる。 ・その結果、卵巣からは女性ホルモン、精巣からは男性ホルモンが盛んに分泌されるようになることを理解させる。 ・性ホルモンは、男女の体つきにそれぞれ特徴的な変化を起こしたり、性器を成熟させたりすることを理解させる。 ・発達には大きな個人差があること、悩む必要のないことを理解させる。 ・ワークシートには、板書と教科書を参考に記入させる。
まとめ	７　本時を振り返り、生殖機能の発達が妊娠可能であることを理解させる。 ８　次時の学習で、「月経、射精から生命誕生までのしくみ」の内容をすることを連絡する。	・思春期に起こる体の変化は、新しい生命を生み出すことと関わっていることを理解させる。

オ　生徒の振り返り

思春期の中学生は、性に対する思いが様々である。性の学習を、恥ずかしいという生徒と平気で興味津々の生徒が、同じ教室で学習するのには課題が多い。したがって、両者に配慮しながらの授業展開が必要になってくる。

授業後の感想で、「性の勉強はしたくない」、「性のことは嫌だ、」「恥かしくて意見を発表できない」、という女子生徒がいた。反対に異性に対して恥じることもなく、平気で性に関する言葉を発する男子生徒もいた。また、恥ずかしながらも、「もっともっと色々な知識を知りたい」という生徒もいた。

性の問題は、思春期、青年期、そして生涯にわたってかかわるので、中学での授業の重要性を踏まえ、性の学習を継続していきたい。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

思春期の体の変化と生殖機能の発達には深いかかわりがある。内分泌や性ホルモンの働きなどの学習をとおして、思春期の体の変化について科学的に理解することの大切さを学び取らせることができたか。また、発毛などの体の変化や月経・射精などの現象には個人差が大きいことも十分に理解させることができたか。以上の点をおさえることが大切である。

(ｱ) 性は人が人として生きていく上で、とても大切なことである。恥ずかしいことではないことが理解できたか。

(ｲ) 体の変化が起こるしくみを理解し、思春期の自分の体が変化していることに気づかせることができたか。

(ｳ) 思春期の体の変化が妊娠を可能にし、生命誕生へつながることが理解できたか。

４次	中学部：自分の障害について考える

(6) 第１時

ア　本時のねらい

・シャンプー容器の印（側面のギザギザ）が作り出された背景を知る。

・身の回りのユニバーサルデザインについて考える。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

・シャンプー容器の印（側面のギザギザ）に気づかせる。

・点字ブロック、ノンステップバスなどの身の回りにあるユニバーサルデザインに気づかせる。

(ｲ) 感性を育む

・シャンプー容器の表示の考案者についての文章を読み、ユニバーサルデザインが生み出されるまでの背景を理解させる。

・ユニバーサルデザインは、障害の有無に関係なく、すべての人にとって使いやすいものだということを理解させる。

(ｳ) 想像力の育成

・世の中には様々な困難を抱える人が生きていることを理解させる。

・今後、どのようなユニバーサルデザインがあれば良いか、考えさせる。

ウ　準備物

・シャンプー容器の印（側面のギザギザ）の一部を撮った写真と考案者（星川安之さん）についての文章（ＮＨＫ　現実から学ぶ道徳番組『道徳ドキュメント<1>命ってあったかい』より）

・ワークシート

エ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　シャンプー容器の印（側面のギザギザ）の一部を撮った写真を見て、それが何か、考える。 ・写真が何かわかったら前へ出て言う。 ・正解を早く答えた友人から、いろいろなヒントを出してもらって、考える。	・何もヒントは与えず、写真だけ見せる。 ・興味を持たせるようにする。 ・全員が答えるまで待つ。 ・ヒントは先にわかった生徒に出させる。
展開	２　シャンプー容器の印（側面のギザギザ）であることを知り、それが何のためにあるか考える。	・自分の体験をもとに考えさせる。 ・視覚障害者だけでなく、目の見える人にも使いやすいものであることに気づかせる。
	３　印の考案者（星川安之さん）について書かれた文書を読む。	・意味がとらえにくい生徒には、ヒントを与えたり、説明を加えたりする。
	４　わかったこと、気づいたことについてワークシートに記入する。 ○星川さんがユニバーサルデザインの商品を作ろうと考えたのはなぜか？	・ユニバーサルデザインが生み出された背景を知らせる。
	５　記入した内容を発表する。	・友達の意見をしっかり聞かせる。

	６　身の回りにあるユニバーサルデザインに気づく。 ・ワークシートに記入する。 〇身の周りにあるユニバーサルデザインを探してみよう。 ７　記入した内容を発表する。 ８　どんなユニバーサルデザインがあれば良いと思うか、考える。	・友達の意見をしっかり聞かせる。 ・いろいろなユニバーサルデザインが身の回りにあることに気づかせる。
まとめ	９　ユニバーサルデザインは、障害の有無や年齢・性別などに関係なく、すべての人に使いやすい商品・デザインであることを確認する。	・障害のある人や課題を抱えた人が、自分にとって何が必要かを表すことの大切さを確認する。

オ　生徒の振り返り
・今、改めて考えると、ユニバーサルデザインのものが、身近にはいろいろあるなあと思いました。
・袋を開けるときの印？や、携帯電話のパネルの数字が大きいのも、そうだと思った。
・シャンプーのぎざぎざは、自分も気づいていた。でも、視覚障害の人のために考えられたとは知らなかった。

カ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
(ｱ) 身の周りのユニバーサルデザインについて、気づかせることができたか。
(ｲ) 自分の生活を、様々な立場の人（障害者・高齢者・幼児など）の視点で振り返らせることができたか。
(ｳ) ユニバーサルデザインの意義とそれが生まれた背景について、理解させることができたか。

４次	中学部：同じ障害がある人の活躍を知る

(7) 第３時
ア　本時のねらい
・自分と同じ障害がある人の活躍を知る。
・障害や失敗にくじけず、希望を持って粘り強くやり通す姿勢を持つことの大切さを知る。

イ　指導のポイント
(ｱ)　感動の体験
自分と同じ障害がある人の活躍を知り、障害による困難を克服することに生かす。
(ｲ) 感性を育む
障害のある方で、現在活躍されている方が決して順調に成功したわけではないことを理解させ、障害といかに向き合って生きていくかを考えさせる。
(ｳ) 想像力の育成
自分だったらどうするかを考え、今後の自分の在り方を考える。

ウ　準備物　・ＮＨＫ「人間ゆうゆう」より「聞こえなくても弁護はできる」
（先天性ろうの弁護士・田門浩さん）のＶＴＲまたはＤＶＤ（字幕付）
・ワークシート

エ　先生の準備　ＶＴＲまたはＤＶＤを借りる手続き。

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　質問 ・仕事にはどんなものがあるか。 ・どの仕事がしたいか。 ・聴覚障害があるとできない仕事はあるだろうか。 ・聴覚障害者で活躍している人を知っているか。	・仕事の例はなるべくたくさん挙げさせる。したいもの・できないもの・活躍している人は答えられる範囲で答えさせる。
展開	２　聴覚障害者（ろう）の弁護士　田門浩さんについて簡単に紹介する。 ・ＶＴＲを鑑賞する。 ・ワークシート記入。 ［ワークシート最後の項目］ ・田門さんが中学の頃にしたかった仕事は何か。 ・田門さんが一番言いたいことは何か。 ・ＶＴＲを見てわかったことは何か。（一つだけ） ・ＶＴＲを見て思ったことは何か。（いくつでも） 以上の点についてお互いに意見交換する。	・ＶＴＲの補助ワークシートを配布し、随時書き込ませるが、記入にこだわりすぎるとＶＴＲの内容理解が不十分になるので、後で書いても良いことにしておく。 ・生徒の理解度に応じて質問する。わかったことと思ったことについては丁寧に意見を言わせる。
まとめ	３　生徒の意見を中心にまとめる。 ・耳が聞こえなくても弁護士になれる。いろいろな仕事につける。 ・田門さんは「自分がそうだったように、聞こえない後輩の力になり、夢を与えたい」と言っている。 ・この人だけでなく、聴覚障害があっても活躍している人は大勢いる。 ・障害があってもそれを乗り越えて生きていくことが大切であり努力と精神力が必要である。	・生徒の意見を尊重してまとめ、不足を補うようにする。将来の生き方へつながるようにまとめていく。

カ　生徒の振り返り

ＤＶＤを鑑賞して行動が変わったというわけではないが、聴覚障害があってもできることや仕事はたくさんあるということを知り、自信につながった。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) ワークシート記入にこだわりすぎるとＶＴＲの内容理解が不十分になる。
(ｲ) ワークシートは、中学生向けに作成したものだが、障害の受容や進路意識、生き方など内容が多く、生徒が消化しきれない恐れがあるため、注意する必要がある。
(ｳ) 生徒が関心をもちにくい分野であるので、興味や関心をもたせるための工夫が必要である。

４次	中学部：成人聴覚障害者の体験談から

(8) 第７時

ア　本時のねらい

成人聴覚障害者（Ｔさん）の子育ての体験談より、聴覚障害ゆえの障壁とそれを取り除くための努力をすることの必要性を理解し、自分の将来の社会生活での生き方を考えるきっかけとする。

イ　指導のポイント

(ｱ)　感動の体験

Ｔさんが子育ての中で、学校との連絡や担任とのコミュニケーションがスムーズにいかずに困ったことを実感させ、それを克服するために学校にファックスの設置を求めて粘り強く働きかけ、最終的には実現させたことを理解させる。

(ｲ)　感性を育む

Ｔさんが子育ての中で、手話通訳制度を利用するようになったきっかけや、利用する以前と以後の心境の変化を理解し、手話通訳制度の必要性を認識させる。

(ｳ)　想像力の育成

自分が将来、成人になったときには、いろいろな社会的な壁にぶつかることを意識し、その際にもあきらめず、その壁を取り除くために努力していくことの大切さを実感させる。

ウ　準備物

平成 17 年度姫路聾学校コミュニティカレッジ　講座「聴覚障害者の子育て」の（手話）ビデオ、（手話）ビデオの要点を文章化したプリント、ワークシート

エ　先生の準備

（手話）ビデオの文章化：手話の読み取りが不十分な生徒に対する配慮のため

ワークシートの作成　：生徒に体験談の内容を正確に理解、整理させるため

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　聞こえないことにより、今までに情報が入らなかったり、他人とのコミュニケーションが上手くいかなくて困ったという経験とそのときの対応方法を振り返る。	・自分自身の聞こえの状況や聞こえに対する認識、聞こえないことからくる社会的不利益の状態について考えさせる。
展開	２　「聴覚障害者の子育て」の（手話）ビデオを見る。 ・（手話）ビデオを見た後、ワークシートで内容の確認をする。 ３　自分の子ども（幼児）に日常生活での通訳をしてもらったこと、そのときの問題点を理解する。 ４　手話通訳制度を利用するようになり、その利用の以前と以後の意識の変化について理解する。 ５　小学校や担任の先生との連絡・コミュニケーションがスムーズにできるように、小学校にファックスの設置を要求して、粘り強く働きかけ、最終的に実現できたことやそれまでの経緯について理解する。	・（手話）ビデオを通して見た後で、文章化したプリントを読んで、講演の内容を正確に把握させる。 ・ワークシートに取り組み、内容理解ができているかどうか、確認させる。 ・子ども（幼児）には年齢不相応な役割を押し付けながらも、自分は当然のことと感じていたことを把握させる。 ・手話通訳制度を利用するようになって初めて自分は情報不足であることに気づいたことを把握させる。 ・ファックスが設置されるきっかけとなった連絡体制の欠陥のために起こったトラブルについて理解させる。

まとめ	６　ワークシートに本時の感想（聴覚障害者の情報保障の問題や手話通訳制度の利用についての意見など）を書く。	・自分の将来の社会生活の中で直面すると予想される障壁について認識させるとともに、それを克服しようとする強い前向きの気持ちをもつことの必要性を意識させる。

カ　生徒の振り返り

(ｱ)　聴覚障害者の子育ては、いろいろと大変だということが分かりました。

(ｲ)　以前は連絡のために学校にファックスが設置されていなかったようですが、どうしてでしょうか。耳が不自由な人は電話ができないので大変です。そんな人のことをもっと考えてほしいと思いました。今は携帯電話のメールで連絡できるので良くなったと思います。

(ｳ)　子どもの授業参観で生徒たちが手話通訳者の手話ばかり見て、授業に集中せずに先生もお母さんも困ってしまったということが印象に残りました。私も電車の中などで手話で話をしていて、まわりの人から嫌な目でみられたことがありました。そんなことはやめてほしいです。

(ｴ)　昔は聴覚障害者の子育てが今よりももっと大変だったことが分かりました。母親の子育てと仕事を両立させることの難しさを感じることができました。自分が大人になって困難なことに直面したときにはＴさんのように、あきらめずにがんばってみようと思います。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ)　成人聴覚障害者のＴさんの子育ての体験談は、生徒自身が自分の障害について、さらには将来の社会生活を考えていく上でとても示唆に富んだ内容であったと言える。現在とは社会の情勢も違うところが多いと思うが、Ｔさんが様々な困難に負けずに前向きに生きている姿勢は生徒たちにとって励みになったと思われる。

(ｲ)　生徒たちは自分自身の障害に対する認識がまだまだ不十分な状態であると言える。生徒によっては今回の授業の内容も自分自身の問題として受け止めきれていなかった。これからも学校生活全般をとおして、様々な角度から生徒自身の障害に対する認識を養っていく必要があると言える。

５次	高等部：相手の立場で考えることができるコミュニケーションとは

(9) 第１時

ア　本時のねらい

・社会の中で人はお互いに協力し、助け合って生きていることを感じ取らせる。

・社会の中でより良い人間関係を築くためには豊かな心や思いやる気持ちをもつことが大切であることを学習する。

・相手への思いやりの気持ちを理解することの大切さに気づかせる。

イ　指導のポイント

(ｱ) 感動の体験

本資料から、おばあさんへのちょっとした、何気ない行動が、おばあさんにとって思いやりとやさしさに満ちた好意であると感じ取らせる。

(ｲ) 感性を育む

「軽いやさしさ」とはどういうものだろうか。話し合う中で相手を意識し、気遣う心であることを感じ取らせる。

(ｳ)　想像力の育成

自分本位で動くのではなく、相手の立場に立ち、行動しようとする気持ちをもたせる。

ウ　準備物

・「自分を考える」　暁教育図書

・「心のノート」　　文部科学省

エ　先生の準備

「自分を考える」の中で、教材として使用する内容についてのポイントを整理する。

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　やさしさに触れたときの体験を話す。	・意見を発表させ、授業へ参加する意欲を高めさせる。 ・発言しやすい雰囲気をつくる。
展開	２　「思いやる心」の言葉の意味を考えさせる。	・発表させ、言葉の意味をみんなで考える。
	３　「思いやる心」に関係した内容の感想文を紹介する。	・おばあさんが感じた「思いやる心」について話し合う。
	４　相手との関係がいやになったとき、どうするのかについて考えさせる。 (1) 相手に理解してもらえるように話すことを心がけたのか。 (2) 自分の立場ばかり考えるのではなく、相手の立場に立って考えることができたのか。	・話し合った内容を図でまとめ、意見をまとめる。 ・話すとき、注意しなければならないことはないか、考える。
まとめ	５　人と人とのつながりを考えると、「思いやる心」が大切であることを実感させる。	・自分がやってもらってうれしいことは他の人もうれしいということを確認する。

カ　生徒の振り返り（授業を受けての感想）
・おばあさんが目に涙を浮かべ、感謝しているように思えた。男の子は日頃行っていることをしただけなのに。気持ちがわからない。
・どうして、泣くの。何かいやなことがあったのかな。
・自分の子どもを思い出したのかな。
・なにも思わない。
・なに！
以上のような感想が寄せられた。本当に伝えたいことが伝わっていないことに気づかされた。そこで、さらに質問して理解を深めていくことにした。
○自分から声をかけず、苦しいときに手を差し伸べてくれた。多くの人は助かったと思うでしょう。そのとき、あなたはどんな気持ちになりますか？
・あ～、助かった。
・グットタイミング。これで少しは楽になるぞ。
・本当にありがたい。
・自分一人でもできるのに。ほっておいて。
・わからない。
○どうして助けてくれたのだろう？
・一人では大変な作業と思い、手助けしてくれたのではないのか。
・なにげなく、作業している人がいたので手助けをしてくれたのかな。
・わからない。
・何も思わず、手助けしてくれた。
以上のような発表があった。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）
今後の指導にあたり、次のようなポイントに注意しながら学習を進めていくこととした。
(1) 生徒一人一人が心の豊かさを持てるよう題材を工夫する。
(2) 家族の一員として、家庭で大切にされていることを感じさせることで心にゆとりを持たせ、自分の好きなところを発表させる。
この授業を終え、生徒たちは、学習していく中で“自分がいやなことは他人もいやだ”と説明することで、どんなことがいやなのか理解することができたように思える。また、自分たちが日常生活の中で、何気なく行っている行為にも、気づかないうちに他人を傷つけてしまうことがある。このことについても感じ取ることができたのではないか。これからの第一歩として、自分の目線を変えなければならないと思う気持ちが大切である。どうすれば相手の気持ちがわかるのかを考えることが、より良い学校生活を過ごすためのより良い人間関係をつくりあげることに繋がるような気がする。

６次	高等部：命の大切さを実感させる

(10) 第１時
ア　本時のねらい
・修学旅行で行く沖縄の歴史を学習する。
・ビデオ『白旗の少女』を利用して、沖縄戦で多くの民間人が戦争に巻き込まれ亡くなった事実を知り、戦争の悲惨さと命の大切さを学ぶ。
イ　指導のポイント
(ｱ) 感動の体験
沖縄戦の経過を調べ、学級新聞として発表させる。

(ｲ) 感性を育む
ビデオ『白旗の少女』を見て、沖縄戦当時の状況を考え、沖縄の人々の平和に対する願いを感じとらせる。
(ｳ) 想像力の育成
戦争がどんなに恐ろしいものかを知り、平和の尊さについて実感させる。

ウ　準備物
ビデオ『白旗の少女』、『修学旅行のしおり　沖縄』沖縄県発行

エ　先生の準備
(ｱ) 沖縄の歴史に興味が持てるように、前もって生徒各自に学級新聞を作らせる。
(ｲ) 沖縄戦を含む太平洋戦争の歴史が理解できるように太平洋戦争を説明したパワーポイントの資料を作成する。

オ　展開

	学習活動	指導上の留意点
導入	１　本時の学習のねらいを知る。 ・各自、学級新聞を作成するために調べた沖縄の歴史を発表する。 ・前もって学習した太平洋戦争について質問する。	・学級新聞の作成指導を通じて、生徒が沖縄について、どれほどの知識を持っているか確認する。
展開	２　戦争についてのイメージを発表する。	・各生徒の戦争に対するイメージを自由に発表させる。発表した内容を板書し、授業の最後に自分のイメージがどう変わったのか確認させる。
	３　ビデオ『白旗の少女』を見る。	・字幕入りのビデオを見る。
	４　ビデオを見た後、感想を書く。 (1) 沖縄がなぜ戦場になったのか考える。 (2) 少女が経験した戦争がどんなものであったか少女の立場で考える。 (3) 大勢の人が自ら命を絶ったのはなぜか考える。	・戦争について各生徒が発表、討論することで、戦争に対する考えを深めさせる。
	(4) ガマでのおじいさんのことば「死ぬなんていう言葉を口に出してはいけない。元気をだして、しっかりしなければいけないよ。富子、この世でいちばんたいせつなのは、人の命だよ。」の意味を考え、発表し、各生徒の考えを互いに理解する。	・命の大切さについて他の生徒の意見を聞くことで、自分の考えを深めさせる。
	５　沖縄で戦われた戦争がどんなものだったか発表する。	・ビデオ鑑賞と沖縄戦についての討論の後、戦争に対するイメージがどう変わったのか注意させる。
まとめ	６　修学旅行で見学するひめゆりの塔、平和祈念資料館と聾者の戦争体験者の講演について簡単に説明する。	・命の大切さと戦争の悲惨さを確認させる。

カ　生徒の振り返り
＜生徒の感想　『白旗の少女』を見て＞
・『白旗の少女』を見て、真っ先に思ったことは、よく生きていてよかったです。太平洋戦争中にたくさんの人々が亡くなっただけでなく、自害する人々もいました。そんな中で、少女は必死に生きようとしていました。おじいさんやおばあさんと一緒に死ぬと言っても、「お前だけは生きなさい、後世に伝える必要がある。」とその二人が言っていました。本当に生きるっていうことは、素晴らしいことだと思いました。人生は一度きりなのに、戦争はたくさんの命を

奪って・・・勝っても負けても亡くなった人々は帰ってこない。それが戦争の怖さだと思います。幼い少女が一人で生き、助かったのは良かったと思います。あらためて平和の大切さが分かりました。今は平和とは言えないけれど、必ず平和な時代が来ると思います。

・少女はいろんな悲劇を見てきたと思います。首里から南へ戦争から逃れながら、たくさんの死者をみてとてもつらかったと思います。日本本土を攻撃するためアメリカ軍は沖縄を焼け野原にし、兵隊や人々が死に急ぐシーンはとても見ていてつらかったです。ガマに隠れても日本軍に追い出され、ただ死んでいくばかり。何の意味もない戦争を繰り返し、大切なものを失っていく。そんなところに腹が立ちました。

・沖縄戦はすごく大変だったことが分かりました。特におじいちゃんとおばあちゃんのシーンは驚きました。何で沖縄がアメリカ軍の攻撃を受けたのか。今、沖縄にはアメリカ軍の基地があるけど、沖縄の人々の気持ちはどんなだろうか？９月に修学旅行で沖縄に行きます。戦争のときのいろいろな話が聞けたらいいなと思っています。

・家族が七人。平和な日々を過ごしていました。でもアメリカ軍の攻撃が始まると、空襲警報があってびっくりしました。最後の場面では富子が白旗をもって、アメリカ軍の前に出て行きました。そこが一番感動しました。

・比嘉富子さんの体験をもとに映像化したもので、前にも見たことがありました。でもやはり怖かったです。お父さんと別れ、弟が撃たれて死に、姉と別れてしまう。さみしかったと思います。沖縄は日本に復帰しましたが、アメリカ軍の基地の 75%が沖縄にあります。沖縄も日本も平和であり続けてほしいと思います。

＜生徒の感想　修学旅行での平和学習について＞

・ガマに入る前に、総合案内センターでガマについての紙芝居を見て本当に涙が出そうになりました。ガマの中に入ってみて途中から真っ暗になって私たち聴覚障害者にとって音が聞こえないだけでなく見えないことは少し、怖かったです。上から落ちる水滴を靴で受けて飲んだと聞いてびっくりしました。ガマにはかまどや井戸があって、今の生活と全然違っていて戦争中の苦労が分かりました。戦争ではアメリカ軍の爆撃や銃の乱射や手榴弾で、多くの人が亡くなったことを聞き、私たちは今の平和を大切にしていきたいと思いました。

・普久原さんの戦争の話を聞いて、とてもつらい思いをされたことが分かりました。僕たちにたくさん戦争の話（アメリカ軍の飛行機が来たのであわてて逃げたことや、アメリカ軍に見つかると困るので赤ちゃんの口にタオルを入れたこと、食べ物をさがすために歩き回ったこと、捕まったとき、聾のこどもと分かってお菓子をもらったこと）などを教えていただきました。とても大変だなあと思いました。

・ガマでガイドを担当してくれた具志堅さん、お元気でしょうか？ガマは暗く足場が悪くて進みにくかったです。戦争当時使われた場所の説明や当時どんなことがあったかよくわかりました。自分たちでは想像できない現実をガマで初めて知ることができました。戦争は勝っても負けても死んだ人は帰ってこない。これが戦争の恐ろしさなのかと思いました。僕たちはここでいろいろなことを学べたと思います。

・平和学習のとき、聾者で戦争を体験された普久原さんに来て頂いて、沖縄戦の話を聞きました。手話の読み取りが難しかったけど、最後まで一生懸命お話を聞きました。戦争で大変なことがたくさんあり、攻撃されてたくさんの人が亡くなったことを聞いて、かわいそうだと思いました。平和ということの大切さをあらためて感じました。ずっと平和が続くといいなと思います。

・ガマに入ってみて、真っ暗でとても怖かったです。
日本軍の怪我した人々が置き去りにされて寂しくて泣いたんだろうと思いながら歩きました。僕は今の平和な時代に生まれてきて良かったと思います。感謝してこれからの人生を大切に生きようと思っています。

キ　先生の振り返り（次の実践に向けて）

(ｱ) 小説『白旗の少女』を読んだとき以上に、映像で表現された沖縄戦に強い衝撃を受けた。主人公の富子さんを含めて、多くの一般人がいやおうもなく戦争に巻き込まれたことに、憤りを感じた。極めて厳しい環境におかれた聾者の戦争体験を聞くことに、恐ろしささえ感じている。

(ｲ) 生徒に対して、再度、各自が沖縄について調べたもの、ビデオ『白旗の少女』を見た感想文をまとめた学級新聞を読ませた。

10　実践を終えて

(1)　先生の振り返り

本校は聴覚障害の幼児、児童、生徒が在籍する学校である。補聴器の機能がよくなり、また近年には人工内耳の普及も進み、聞こえにくさが軽減されつつある。しかし、やはり社会の中で「聞こえにくい」という現実を認識することで、自己否定をしてしまう児童生徒も多い。その子どもたちに対して「自己肯定感」を持たせ障害を前向きに捉え、自分も大事にし、自分を支えてくれる家族、仲間に感謝の気持ちをもち、社会の中の人々と共に生きることの大切さを学んで欲しいと願っている。それが本校でなすべき「命の大切さ」の教育と考える。

それぞれの年齢にあわせたプログラムを実践していく中で、小学部では友達と仲良くすることの楽しさ（他人を尊重すること）、ヘレンケラーの生き方を知り、自分にもできることがいっぱいあること（自己肯定感をもつこと）、母親に生まれてきたときの様子や気持ちを聞くことで自分が愛されていること、産んでくれた母親への感謝の気持ち（感謝・思いやり）などを実感させることができた。

中学部では思春期を迎える年齢にあわせて、異性に対しての理解や思いやりを中心におき、体のしくみや生命誕生にふれ、「大切な命」を考える大きな契機となり、生徒たちは真剣に「命」について「異性」について受け止めようとする様子が見られた。また、障害を自分自身の問題として受け止め、いかに向き合っていくのか、同じ障害がある人の活躍を知り、希望を持って粘り強くやり通す姿勢を持つことの大切さを考えさせ、将来の社会生活で協力し合える他者の「大切な命」を考える機会になったと思う。

社会に出る最終学部である高等部では、自己実現をめざし、社会の一員としてどう生きていくべきか、相手の立場に立って考えることはどういうことなのかを真剣に学習していった。特にコミュニケーションの面で不安を抱える生徒も多く、自分を理解してもらうコミュニケーションの在り方、相手の立場に立ったコミュニケーションの在り方について生徒どうしで論議が進んだ。また、沖縄への修学旅行では、聾者の戦争体験の話を聞くことで、平和や命の大切さ、かけがえのない命を実感することができ、社会に出るにあたり「平和」「命」を広い意味で考える良い機会となった。

今回の実践をとおして、障害に向き合い、自己肯定感を持ち、人と人とのつながりを大事にする気持ちがそれぞれの年齢の児童生徒に芽生えている様子が見受けられた。今後もこのプログラムを継続的に実践していきながら「命の大切さ」を深める学習を進めていきたい。

(2)　今後の課題

今年度は、「人とのつながり」から「命の大切さ」をテーマに、それぞれの年齢を考慮した教育プログラムを立て実践した。それぞれの学部において「命の大切さ」について実感し、「命を大切にする心」を育むことにつながったと思う。今後は、自己肯定感や生きる意欲を高めさせ、生きる力につながるような「命の教育」を継続させていきたい。

11　参考・引用文献

・ＤＶＤ　『ヘレンと共に』字幕つき　学研　1994
・『５年生の道徳』　文渓堂
・真仁田昭・新井那二郎監修　『聴覚障害者の子育て』
・『自分を考える』　暁教育図書
・文部科学省　『心のノート』
・シェイラ・キッチンジャー／文　松山栄吉訳　『おなかの赤ちゃん』　講談社　1986

・ヘレンケラー／著　岩橋武天／翻訳　『わたしの生涯』　角川文庫　1988
・兵庫県立教育研修所　心の教育総合センター　『「命の大切さを実感させる教育プログラム」実践事例集』　2007
・小貫悟・名越斉子・三和彩　『ＬＤ・ＡＤＨＤへのソーシャルスキルトレーニング』　日本文化科学者　2003
・ビデオ　ＮＨＫ　『人間ゆうゆう』より「聞こえなくても弁護はできる」　2001
・財団法人全国ろうあ連盟監修　『聞こえないってどんなこと　―聴覚障害者 25 人それぞれの生き方―」　一橋出版　1998
・ＮＨＫ『道徳ドキュメント<１>命ってあったかい』より「使いやすさを広めたい」　2008
・文部科学省　『中学校　学習指導要領』　2008
・財団法人日本性教育協会編『中学校版　すぐ授業に使える性教育実践資料集』　小学館　2007
・比嘉富子　『白旗の少女』　講談社青い鳥文庫　2000
・伊波園子　『ひめゆりの沖縄戦』　岩波ジュニア新書　1992
・沖縄県　　『修学旅行のしおり沖縄』　沖縄観光コンベンションビューロー　2009

１　「命の大切さを実感させる教育プログラム」　授業プラン内容一覧

章	番号	学年	テーマ	学習・体験	実践の参考となる教育プログラムモデル
授業プラン	1	小学校 第４学年	今を大切に生きよう	○「２分の１成人式」のお祝いし、家族に感謝の気持ちを伝える。	①・②
	2	小学校 第５学年	自分や友達を大切に、人間関係を広げよう	○自分をみつめ、上手に聞いて、上手に話す方法を知る。	①・②・④
	3	小学校 第６学年	災害時、ストレスを軽減させる避難所にしよう	○災害時、避難所の人たちのストレスを体験し、どのように軽減させるか考える。	④・⑤
	4	養護学校 高等部	メッセージ（生きる力）を発信しよう	○他者にメッセージを伝える作業をとおして新しい自分を創り、自尊感情を高める。	②・④
	5	特別支援学校 高等部	仲間っていいな！～力を合わせて、お出かけしよう～	○自分たちの力で「お出かけの計画」を練り実行することで、仲間のよさを知る。	②・④

（参考）教育プログラムモデル：①誕生の喜びと感動 ②成長の支援への感謝 ③限りある命の尊さ ④理解し合う心に支えられた命 ⑤尊い命を守るために

２　授業プランの活用について

子どもたちの状況や学校での指導計画に基づいて実践された「命の大切さを実感させる教育プログラム」より、授業の進め方を中心とした詳細な内容を授業プランとして提示しています。また、子どもたちに「命の大切さ」を実感させるための教材・資料等の活用例についてもまとめています。

授業プラン

ストレスと上手につきあおう

○○市立○○中学校第１学年

●実践のねらい	ストレスについての理解を深め、人や物を傷つけないストレス対処法を知る。
●指導のポイント ◇感動の体験	ストレ　ている時の
◇感性を育む	人には様々な感情があり、　とが自然なことであると気づかせ
◇想像力の育成	ストレスは誰にでもあり、適切な対処が大切であることを理解させるとともに、自分に合ったストレス対処法を考えさせる。
●事前の教員研修	ストレスマネジメ 第３章　教職員
●準備	・関連する内容について保健等の教科書を確認しておく。 ・スクールカウンセラーと打合せを行い、役割分担をしておく。

授業のねらい及び授業のねらいを達成するために、どのような感動の体験をするか、子どもたちの感性や想像力にどのように働きかけるかなどの「指導のポイント」を記載しています。

授業を実施するにあたって必要となる教員研修及び準備物等について記載しています。

【教育プログラムの概要】

１次	○構成的グループ・エンカ ・「いいとこさがし」 ・「私は私が好きです。な　ンター事典　』2004）
２次	○福祉学習 ・キャップハンディ体験（ハンディキャップのある人の状況を体験する）をするとともに、バリアフリーについて考える。 ・障害とともに生きる人の話を聞く。 ・自分の命を「一生懸命に生きる」ことについて考える。
３次	○ストレスマネジメント体験 ・自分のストレスを知り、様々なストレス対処法を理解する。 ・スクールカウンセラーによるリラクセーション体験をする。

授業プランの前後にどのような学習・体験を行ったか、教育プログラム全体の流れがわかるように概要を示しています。

授業プラン

●授業の展開

（導入）

１　学習のねらいについて知る。

児童生徒の学習活動を太字で示しています。

この時間はストレスについて学びます。ストレスとは何なのか、ストレスに上手に対処するための方法について学習します。

（展開）

２　ストレスについて考える。

どんな時にストレスを感じますか。

（留意点・ポイント）

・日常生活の中で、「[illegible]こと」「緊張したこと」等を思い出さ[illegible]レスを感じて[illegible]

教員の指示や説明、発問です。

・厚生労働省等のストレスについての調査結果を示し、自分と比較させてみる。

・二人一組になって話し合う時間を設定し、自由に発表できる雰囲気づくりをする。

３　自分のストレス反応を知る。

ストレスを感じると、心や体はどうなるでしょうか。

（留意点・ポイント）

・最近[illegible]「嫌だな」「腹たつ」「悲しい」など、ストレスを感じ[illegible]レス状態を扱[illegible]

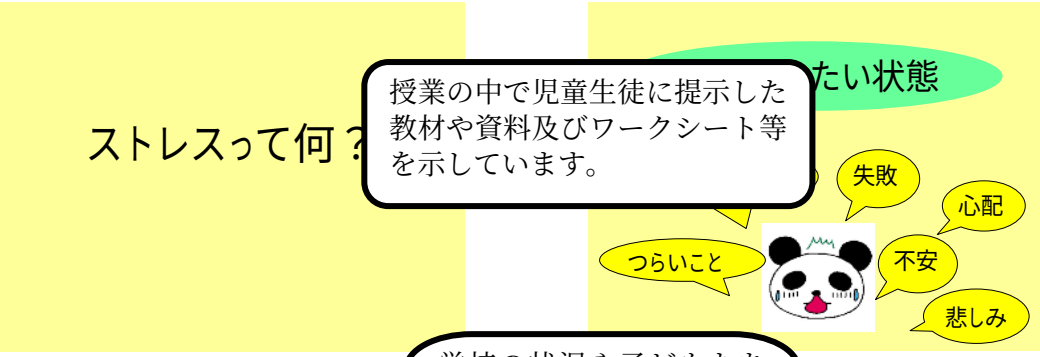
・身体面（ど[illegible]神面（落ち込[illegible]あたる、暴言を[illegible]レス反応を理解させる。

注意を要する子どもの反応や先生の振り返りに基づいた指導上の留意点等について示しています。

・自分がストレスだと感じていることや、ストレス反応について理解させる。

・ストレスの感じ方には個人差があることを

●授業で使用した提示資料・ワークシート等



授業の中で児童生徒に提示した教材や資料及びワークシート等を示しています。

●授業プラン実践者の感想

「今、本校の子供たちに必要なこと」[illegible]した。それは、最近よく言われている「自尊心の低さ」と「コミュ[illegible]る。本校もまさにそうした課題を抱えている。そこで「命を大切に[illegible]まず一番基本となる「自分を大切にする」ことから始めようと考え[illegible]

学校の状況や子どもたちの実際の反応、教育課程上の位置づけ、授業プラン実践の成果や反省点等を記載しています。

【参考・引用文献】

・兵庫県立教育研修所　心の教育総合センター『学校のス[illegible]
・冨永良喜・山中　寛　編著『動作とイメージによる　ス[illegible]
北大路書房　1999

授業プランを実施するに際して引用、参考にした文献等を記載しています。授業プランの全体を理解する上で参照してください。

授業プラン１

今を大切に生きよう

小野市立下東条小学校第４学年

●実践のねらい

健康の記録から体の発育の様子をまとめ、自分の成長に感謝するとともに、かけがえのない命を大切に守り、育んでいくことの大切さを考える。また、自分を見つめなおし、他者と違ったところを持った自分に気づくとともに、自尊感情を高めながらこれからの生き方に自分なりの展望を持つ。

●指導のポイント

◇感動の体験
・赤ちゃんのもとの小さな卵子、精子から、小さな生命の始まりを知らせる。
・誕生時から現在までの成長を記録にまとめ、大きく成長したことを知らせるとともに、一人一人成長のしかたが違うことを確かめ、認め合わせる。

◇感性を育む
・今日までの成長は、多くの人に見守られ、支えられ、愛情たっぷり育てられてきたことに気づかせる。
・困った時や辛い時に、優しい言葉をかけてはげましてくれた、友達の温かい存在を確かめさせる。

◇想像力の育成
・自分だけでなく、友達も大切に守られ、育てられてきたことを知り、自他ともに大切にしようとする気持ちをもたせる。
・「２分の１成人」の今を大切に生きようとし、自分の将来に明るい展望を持たせる。

●事前の教員研修
・自尊感情を知る調査内容について話し合う。
・保護者に協力を依頼することについて話し合う。

●準備
・就学前、入学後の成長の記録
・保護者への協力依頼文書
・ワークシート
・絵本『いのちのまつり』サンマーク出版

【教育プログラムの概要】

１次	○命のつながりを考える。 ・家族と似ているところを見つける。 ・「いのちのまつり」から、自分の命のつながりをさぐる。
２次	○二次性徴を知り、自分の成長を素直に受け止める。 ・体の内外の変化から、個人差があることを知る。 ・心の変化にも目を向ける。
３次	○自分の育ちを見守ってくださった保護者の思いを知る。 ・「まほうのかがみ」より、自分の内面を見つめる。 ・保護者からの手紙を読み、これからの生き方を見つめさせる。
４次	○「２分の１成人式」のお祝いをしよう。　授業プラン ・お礼のメッセージに思いを込める。 ・学習したことを生かして、将来へつなげようとする気持ちをもつ。

●授業の展開

（導入）

１　学習のねらいについて知る。

２分の１成人式を、家族や友達といっしょにお祝いをしましょう。

（留意点・ポイント）

・10 歳を迎えた今日まで、温かく見守ってくださった家族への思いに気づかせる。
・友達に助けてもらったり、支えてあげたりしながら過ごした日々を振り返る。

（展開）

２　今日までの成長を家族に伝える。

「命のつながり」から、感じたことや考えたことを発表しましょう。

（留意点・ポイント）

・絵本「いのちのまつり」をとおし、かけがえのない命であることを思い出させる。
・これから命をつなげていく自分の存在や、今の思いを大切にさせる。

「体の成長」から知ったことや、考えたことを発表しましょう。

（留意点・ポイント）

・外的な成長において、成長期の時期に個人差があることを確かめさせる。
・見えない体の内の大人への変化は、誰にも訪れるという安心感も持たせておく。

「心のつながり」から、気づいたことを発表しましょう。

（留意点・ポイント）

・誕生日にもらった友達からのメッセージを思い出させ、友達の支えに対する喜びの感情に気づかせる。
・けんかしたこともあったけど、今は許すことができるようになるという心の成長に目を向けさせる。

３　家族へ「ありがとうメッセージ」を贈る。

自分のことを一番大切に思ってくださる家族へ、感謝の気持ちを伝えましょう。

（留意点・ポイント）

・今まで、元気なときも病気のときも、優しく温かく守り育ててもらったことへの感謝の気持ちを素直に述べさせる。

・「家族からの手紙」で、改めて知った親の思いにも触れ、これからは親に心配をかけないように、自分も成長しようとする将来に向けた気持ちをもたせる。

・児童から家族へ「ありがとうメッセージ」を直接手渡したいので、事前に授業参観依頼を済ませておく。学校で渡せない児童には、家でゆったりと時間を設けるよう配慮する。

４　感想を書く。

お世話になった先生方のメッセージを聞き、感想を書きましょう。

（留意点・ポイント）

・今の素直な思いや、20 歳の成人式に向けた将来への思いも綴らせる。

・友達の発表を聞いて、印象に残ったことや教えられたことから、５年生になっても友達とのつながりを大切にしようと感じさせる。

・明るい明日につながる今を楽しく過ごし、今を大切にしながら前向きに歩んでほしいことを伝える。

●授業で使用した提示資料

まほうのかがみ　①
４年　　組　（　　）

かがみにはどんな「わたし」がうつっていますか。

わたしは、（　　）
わたしは、（　　）
わたしは、（　　）
わたしは、（　　）
わたしは、（　　）

まほうのかがみ　②
４年　　組　（　　）

かがみにはどんな「みらいのわたし」がうつっていますか。

＜１０年後＞

＜３０年後＞

【２分の１成人式より】

●児童の感想

・お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちに育ててもらって、かんしゃをこめてわたせて、よかったです。これからも、世話をかけないようにしていきたいです。
・手紙をわたすのは、はずかしかったけど、お母さんたちが見てくれて、とてもうれしかったです。これからも、家族みんなで、仲良くしたいです。

・読むときは、きんちょうして、すごくばくばく、しんぞうがなった。
・お家の人の前で手紙をわたすとき、すごくきんちょうしました。
・みんなにプレゼントをわたすとき、ちょっとだけ「みんなよろこんでくれるかな？」と、心配でドキドキしていたけど、みんなよろこんでくれて、私もとてもうれしかったです。

●保護者の感想
・２分の１成人式。素敵な企画をありがとうございました。一人一人の発表ではさすが 10 歳、４年生。みんなしっかりと自分の考えを発表できて立派だなと。息子からの手紙には、感謝の言葉がたくさん書いてあり、嬉しい限りでした。段々大きくなり大人へと成長していく中で、私も初心を忘れず、いい関係を築いていきたいなあと思える機会でした。
・今、こうして心も体も成長していく姿を見て、本当にうれしく思います。でも、けっして忘れないでください。みんなに、いっぱいいっぱい愛されて愛されてきて、成長したんだってこと。だから、いつまでも思いやりいっぱいあるあなたでいてくださいね。
・生まれて 10 年、いろいろな人との出会いがありました。そして、今、このクラスのみんなと同じ時間をすごせることは、息子の大切なひととき、宝物だと思います。友達を大事に楽しい学校生活を送ってください。
・ぼくの背丈について調べてまとめてあるのを読んでいる時の姿を見て、大きくなったね、と思いました。しっかりした文が書けていたのにも、ビックリしました。心の中で「すごーい、すごーい」と、さけんでしまった。家族へのメッセージには、やさしい言葉に目がウルウル。やさしさいっぱいのカード、ありがとう。２分の１成人式を考えてくださった先生方、すてきな時間をすごせました。

●授業プラン実践者の感想
「幸せな未来づくりのために」というテーマを掲げ進めていった。本実践は、20歳の成人式に対して、10歳はその半分であることから「２分の１成人式」と称し、半分の節目を大切に感じる会を計画した。
２分の１成人式に向け、４月より誕生日を迎えた児童に、学級の友達全員からの「おめでとうメッセージ」を届けてきた。メッセージを手にした児童は、照れながらも嬉しそうに読んでいた。そのような友達の笑顔を思い出しながら、メッセージを書く日を楽しみにする児童が増えてきた。メッセージには、友達の長所や好み、頑張っていることなどを書くのだが、日頃から関わりを深めている子には、いっぱいの思いを綴ることができた。また、あまり遊ばない友達には、ささやかなほめ言葉を添え、「また遊ぼうね」「これからもよろしく」と友達とのつながりを感じてきた。
忘れてはいけないのは、今日まで大切に育ててくださった親への感謝である。しかし、改まってお礼はなかなか言えないため、家族へありがとうのメッセージをしたためた。メッセージを手渡した子どもたちの表情は、とても優しかった。とても素直だった。ここまでの成長を親子で喜び、絆を深めた時だった。
10歳というやわらかい心の今だからこそ、自分の成長を振り返りこれからの生き方を考えさせる機会は、とても大切だと感じた。これからも、多くの人とのつながりを考えながら、素敵な20歳に向かって、今を大切に生きようとする気持ちを育んでいきたい。

【参考・引用文献】

・兵庫県立教育研修所　『「命の大切さ」を実感させる教育への提言』　2006
・兵庫県教育委員会　道徳副読本『ほほえみ』
・草場一壽／作　平安座資尚／絵　『いのちのまつり』　サンマーク出版　2004

授業プラン２

自分や友達を大切に、人間関係を広げよう

明石市立鳥羽小学校第５学年

●実践のねらい	生命誕生の過程について学び、母親の疑似体験等をとおして、自分の命が自分を取り巻く多くの人々の愛情に支えられて生かされていることを実感する。また、生命の尊厳を体感し、自分の命だけでなく、他者の命も大切にしようとする心情や態度を培う。また、他者との適切なコミュニケーションスキルを学び、望ましい人間関係を築く力を培う。
●指導のポイント	
◇感動の体験	・家族への自分の誕生時のインタビューをとおして、家族の愛情を確認させる。 ・助産師の話や妊婦や母親の疑似体験をとおして、命を産み、育むことの喜びや大変さを知り、かけがえのない命の大切さを実感させる。
◇感性を育む	・家族へのインタビューをとおして、自分は愛されて生まれ、育てられたのだということに気づかせる。 ・自分だけでなく、友達も周りから愛され生きていることを感じとらせる。 ・アサーショントレーニングの体験をとおして、相手を傷つけないで自分の考えを伝える表現方法を身につけさせる。
◇想像力の育成	・自分の誕生を喜ぶ家族の姿から、自分と同様にかけがえのない他者の命に気づかせる。 ・いろいろな人と理解し合うには、自分の気持ちを表現することが大切であることに気づかせる。
●事前の教員研修	・助産師から生命誕生の話を聞く。 ・生命誕生のスライドショーを見る。 ・保護者に協力を依頼することについて話し合う。
●準備	ワークシート２枚

【教育プログラムの概要】

１次	○生命誕生について知ることをとおして、命の重みを感じる。 ・家族に自分が生まれる前や生まれた後の気持ちをインタビューする。 ・スライドを見て、胎児の成長や誕生に関する家族の思いを知る。（学級活動）
２次	○命を大切にし、よりよく生きていくために、自分をみつめ、上手に聞いて、上手に話す方法を知る。 ・友達のよいところをみつけ、人から自分のよいところをみつけてもらうことで、自信がつき、自己肯定感を高める。 ・アサーショントレーニングをとおして、自己表現方法を学ぶ。
３次	○　助産師の話をとおして、かけがえのない命の大切さを実感する。 ○　妊婦や母親の疑似体験をとおして、命を産み、育てることの大変さを知る。 ・妊婦ジャケットを着用したり、赤ちゃん人形を抱っこしたりして、母親の思いを実感する。

授業プラン

●授業の展開

１時間目　「○○ってなかなかだ」

（導入）

１　学習のねらいについて知る。

この時間は、心の健康について学習します。友達や自分のよいところをみつけて、自分をみつめることをします。

（留意点・ポイント）

・心の健康を学習するためには、恥ずかしい気持ちや戸惑う気持ちがあっても、真面目に取り組むことが大切であることを知らせる。

（展開）

２　友達のよいところを見つけて記入し、最後は、自分のよいところを書く。

ワークシートに友達のよいところを一つ記入して、次の人にまわし、最後は自分で自分をほめましょう。

（留意点・ポイント）

・よいところは、読んだ人がうれしい気持ちになるようなことなら何でもよい。

３　よいところをみんなに発表する。

班の中で、ワークシートを交換し、ベストほめられ賞を一人決め、その人が班の代表で立ちます。順に書いた人が読み上げて、最後は自分で自分をほめます。

（留意点・ポイント）

・周りの者が、発表する人や読み上げられる人に対し、真面目な態度で聞くように配慮する。

（まとめ）

４　授業を振り返り、まとめをする。

ワークシートのまとめの項目を記入しましょう。

（留意点・ポイント）

・友達のよいところをみつけたり、友達から、自分のよいところをほめてもらったときの気持ちを大事にし、今後の人づきあいに生かせるよう配慮する。

２時間目「上手に聞いて上手に話そう」

（導入）

１　学習のねらいについて知る。

この時間は、人とつきあう、というテーマでいろんな人とうまくつきあっていくには、どんなことに気をつけたらいいかということを学習します。

（展開）

２　２つの例題について、３つの役割を体験し、感じたことをワークシートに書く。

３人が１グループになり、１人が問題を起こしている人、１人がそのことで困っている人、残りの１人は２人の会話を観察します。観察する人は、上手に問題が解決できたか判定し、どういう言い方が特によかったかを紙に書きます。

（留意点・ポイント）

・２つの例題を、立場を変えながら体験して、どういう言い方が良いかに気づくようにする。

３　体験の振り返りをする。

今のやり取りの中で、どこが難しかったなど、観察してわかったことを発表します。

（まとめ）

４　話し方には３つのパターンがあることを知り、上手な話し方のポイントを理解する。

相手に話す方法には３つの方法があります。それは、攻撃的、受動的、アサーションの３つです。

（留意点・ポイント）

・上手な話し方とは、相手の気持ちや行動を話し、それに対する自分の気持ちを話し、解決方法を提案し、そのためには、どのような行動だったらできるのかを伝えることが大切である。

・人とうまく付き合っていくには、自分の感情をコントロールすること、相手を理解して、自分の気持ちを伝えることが大切だと気づかせる。

〈　資　料　〉

＊１時間目　「〇〇ってなかなかだ」ワークシート

＊内容（ワークシートに入れる項目）

1　氏名：　〇年〇組　氏名（　　）

2　友達のよいところを見つけて、書き込む空欄。
(1) 班のみんなが友達のよいところを書くことができるように空欄を作る。
(2) 各空欄に「〇〇さん　から」と、誰のメッセージかわかるようにする。

3　自分で自分のよいところや頑張っているところを見つける空欄。
(1) 友達が書き込む空欄の最後に、自分自身をほめることができる機会を作る。

4　振り返り
(1) 友達のよいところをほめるときや、友達からほめてもらったときの気持ちをまとめる。
(2) 授業の感想をまとめる。

＊留意点
　友達のよいところを記入する際、できるだけ前に書いた人と違うよいところを見つけて書くことや、書かれた友達が嬉しくなるようなことを考えるように、事前に伝えておくことが大切である。

＊２時間目　「上手に聞いて、上手に話そう」ワークシート

　あなたが買ってもらったばかりの新しいゲームソフトを、友達がどうしても貸してほしいと言ってきました。
　あなたは、まだ貸したくないのですが、どう言ったら相手は納得してくれるでしょうか？アサーションの話し方で考えましょう。

友だち　「ねえ、あなたが買った、あのゲームソフト貸してよー。」

あなた　「　　」

●児童の感想
〈１時間目〉
・はじめは気が進まなかったけど、友達のいいところを声に出して言ってみるのは、自分の思いが伝わったのでよかった。自分をみつめなおすと、素直な気持ちになれた。
・自分をほめるのは初めてで、でも少し恥ずかしかったけど、たまには自分をほめてみるのもいいんじゃないかと思いました。そして、改めて友達をほめるのもよかったです。

〈２時間目〉
・人に話す時は、アサーションを使い、やさしく付き合えたらいいなと思います。人を傷つけない言葉をえらぶかしこい大人になりたいです。
・アサーションの言い方だと相手を安心させられると思った。きつくも言われないで、わかってもらえると相手もすっきりすると思いました。私は、思いつくとすぐ言っちゃうタイプだからもっとアサーションを使っていきたいです。

●授業プラン実践者の感想

本校では、児童の自尊感情を高めるための実践の一つとして、３年前から性教育に取り組んでいる。「いのちを大切にする」ことを学ばせるために、まずは「自分を大切にする」子どもを育てたいと考えた。養護教諭として、全学年に関わる中で、コミュニケーション能力の未熟さや、特に高学年になるにつれ自尊感情が低くなってくることが気になった。

そこで、本実践は５年生の保健学習「心の健康」に位置づけて行った。１時間目の授業については、子どもたちは、日ごろより人をほめたり、ほめられたりする機会が少ないため、最初は恥ずかしがって気が進まない様子もあった。しかし、終わってみると、「ほめられることがうれしかった」「これからも人のいいところをほめていきたい」「異性にほめられたことがなかったのでうれしかった」などの感想を書いており、自分をみつめる機会になったようである。そして、２時間目は３つの話し方を実際に体験し、話し方によって、人の感じ方が違い、相手の気持ちが変わることを学んだ。子どもたちは、アサーションの話し方を考えるのに苦労していたが、「アサーションの話し方は相手を安心させるのがわかった」「優しい言い方をするように気をつけたい」「アサーションの話し方で友達関係を深くしたい」などの感想を書いており、上手な話し方について知ることができたようである。それを日常生活に生かせるようになるにはまだまだ難しいが、今回のように体験学習をすることが実感としての理解につながるように思われた。

保健学習の「心の健康」の単元で、知識面は担任に事前に授業をしてもらい、その後体験学習を実践したことで、より心の理解に有効であったと思われる。思春期にさしかかった時期の子どもたちが、自分をみつめて、人とのかかわりについて考える機会になったのは、良かったと思われる。今後も継続して取り組んでいきたい。

教育プログラムの概要では、１次と３次に「命の大切さ」に関するプログラムを入れ２次に本実践を計画した。プログラムの流れからみると、１次と３次の命の大切さの内容を続いて行った方がより効果的だったかもしれない。今後の計画では、その点を考慮していきたい。

●参考・引用文献

・田村通子　『いきいき性教育（小学校）』　東山書房　2006
・健康教室編集部（編）『健康教室』　オイカワ流Ｐａｒｔ２　保健学習のススメ
p38～p43　東山書房　2009.6

授業プラン３

災害時、ストレスを軽減させる避難所にしよう

新温泉町立浜坂東小学校第６学年

●実践のねらい	本校は災害時の避難所になっている。災害時の混乱を防ぐために、避難所開設訓練を十分に行う必要がある。さらに、本校児童をはじめとする避難者の多くが、ストレスを抱えることも予想される。本授業プランにおいては、災害について学び、ストレスをできるだけ軽減させる避難所の在り方を考え、そこで得た力をふだんの生活にも生かせるようにする。
●指導のポイント	
◇感動の体験	・阪神・淡路大震災の体験談等を聞くことで、災害時でも支えあえる人の温かさを感じさせる。
◇感性を育む	・災害時に要援護者となりうる高齢者・乳幼児・障害のある人などと接することで、それぞれの立場でニーズや悩みが異なることを感じとらせる。
◇想像力の育成	・ストレスについて様々な立場で考えることにより、ストレスを軽減させるためには具体的にどのような行動をとればよいかを考えさせる。
●事前の教員研修	・避難所開設について自治体との連絡会を行う。 ・保育所や高齢者施設への見学会及び研修を行う。
●準備	・事前に家庭や自治体、関係機関との連絡・調整をしっかりとしておく。

【教育プログラムの概要】

１次	【学校行事】起震車体験を含む避難訓練 ・地震災害時の揺れを実感するとともに、車いす等でも避難に問題がない学校か考える。
２次	【総合的な学習の時間】災害時に要援護者となりうる人とのふれあい活動 ・高齢者や乳幼児、障害のある人等と接することにより、それぞれのニーズや悩みなどを感じとる。
３次	【理科】自然災害に備えよう（啓林館６年下）※震災に携わった救急救命士を講師に… ・災害時の大地の変化について知るとともに、災害時に私たちにできる備えを考える。 ・兵庫県ＣＧハザードマップ等も活用し、地域の災害特性について学習する。
４次	【国語】みんなで生きる町（光村図書６年上）※老人介護保健施設見学 ・ユニバーサルデザインについて考えることで、災害時でも、不安やストレスを感じにくい町の在り方について話し合い、まとめ、発表しあう。
５次	【道徳】人権週間で考えよう～心のインフィニート運動～　※スロープづくり等 ・12 月上旬の人権週間とルミナリエ開催に合わせて、生きていることに感謝するとともに、今、自分たちにできることを実行する。
６次	【保健】心の健康～不安やなやみをかかえたときは？～（学習研究社５・６年） ・災害時、極度のストレスが集中する避難所において、どのようにそのストレスを軽減させるか考える。（アサーショントレーニングを活用して）　授業プラン

７次	【学校行事】避難所開設訓練＋【家庭科】ふれあいの輪を広げよう（開隆堂下） ・「１・１７は忘れない」防災訓練において、避難所開設訓練を行い、前次までの学習のまとめを発表するとともに、地域と一体となって安心・安全な学校について考える。
８次	【学級活動】「１・１７」の新聞を持ち寄って考えよう ・テレビや新聞などで「命」という言葉が大きく取り上げられる時期に、それがなぜなのかを新聞記事を読みながら話し合う。

●授業の展開（６次　４/５と５/５）

（導入） １　避難所になった学校の映像を見て、そこでの不安や悩みについて考える。	・ 映像を見て感じる素直な意見を付箋に書かせ、黒板に次々と貼らせていく。
（展開） ２　避難所でのストレスについて調べるため、様々な状況で尺度を測る。（ワークシート） (1) 寒い体育館 (2) 温かい和室 (3) 寒くて騒音のある体育館 (4) 温かいが騒音のある和室 (5) 寒くて騒音があって罵声もある体育館 (6) 動き回れる体育館	・ワークシートにイライラ度やハッピー度を記入させる。 温かい部屋には日光を取り入れたり、毛布を用意したりする。 ・騒音は、乳児が夜泣きしている声をテープで流す。 ・和室の騒音は、赤ちゃん人形を皆であやしながら聞く状況を設定する。
３　実験の結果を参考に話し合う。	・実験の結果を児童に分かりやすく説明する。

避難所で苛立ちを感じている人にどう接すればよいのだろう

４　避難所で騒音（赤ちゃんの鳴き声）に対し苛立ちを持つ人への接し方を考える。	・４人のグループになり、１人が騒音に対し苛立ちを持った人、残り３人はそれぞれ「非主張的」「攻撃的」「アサーティブ」な表現で対応するように指示する。 ・対応の仕方のみを考えるだけでなく、災害時の状況や避難所での人々の気持ちを、今までの学習を思い出して考える。
５　避難所でストレスを軽減させるにはどのような工夫をすればよいか話し合う。	・ストレスに対し、生活的側面と環境的側面に分けて、工夫できることを考えさせる。 ・保健の時間に行ったリラクゼーショントレーニングで得たこともアドバイスする。 家庭科で習った「採光」「換気」「冷暖房の仕方」や保健で習った「病気の予防」に関する資料も用意しておく。
（まとめ） ６　本時を振り返る。	

●授業配布資料

《ワークシート１　寒い体育館用》

「ストレスを軽減させる避難所にしよう」ワークシート

名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

□月 □日 □曜日　　時刻 □

気温 □度　　湿度 □%　　明るいか暗いか □

状況設定	普段の教室（練習）

チェック1

・下の3つの点数をつけてください。まず、数直線の当てはまるところに大まかに丸をつけ、点数を考えます。

ハッピー　ハッピー度

0　20　40　60　80　100

ない　ある

□点

イライラ　ムカムカ度

0　20　40　60　80　100

ない　ある

□点

ウェ～ン　ウェ～ン　シクシク度

0　20　40　60　80　100

ない　ある

□点

チェック2

・自分に当てはまる点数に丸をつけてください。

体調

最低！　0　1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　最高によい！

ふれあい

最低！　0　1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　最高によい！

環境

最低！　0　1　2　3　4　5　6　7　8　9　10　最高によい！

心時間 □　（3分をどれくらいに感じますか？）

感想

災害時、ストレスを軽減させる避難所にしよう（新温泉町立浜坂東小学校第６学年）

「ストレスを軽減させる避難所にしよう」
～避難所でのストレスの原因を探ろう～

みんなの感じたストレス度

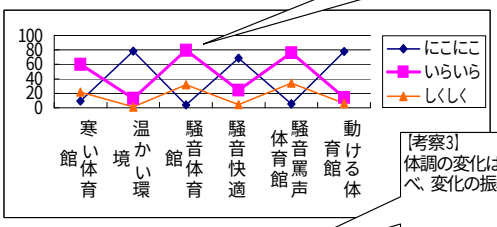
平均値	寒い体育館	温かい環境	騒音体育館	騒音快適	騒音罵声体育館	動ける体育館
にこにこ	9.2	78	3.6	69	5.4	78
いらいら	60	13	79	24	76	14
しくしく	22	1.2	32	4.6	34	5.8
体調度	2.6	7.7	3.4	7.1	3.1	5.9
ふれあい度	2.3	8	1.6	7.1	1.8	8.4
環境度	0.7	9	0.3	7.4	1.1	6.3
3分感覚	6.3	2.6	5.4	3.2	5.6	3.4

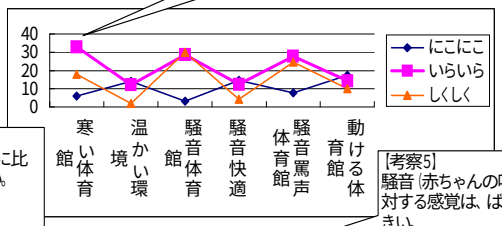
ストレス度のばらつき度

標準偏差	寒い体育館	温かい環境	騒音体育館	騒音快適	騒音罵声体育館	動ける体育館
にこにこ	5.9	14	3.1	14	7.7	17
いらいら	33	12	29	12	28	14
しくしく	18	1.9	30	4.2	25	10
体調度	1.6	1.8	3.2	1.8	2.4	2.4
ふれあい度	1.9	1.2	1.4	1.4	2.3	1
環境度	0.7	1.4	0.5	2.2	1.4	2.1
3分感覚	2.4	1.1	1.4	1.4	1.7	3.1

[考察1]
ストレスの要因が増えるといらいらする。(寒さ＋騒音)

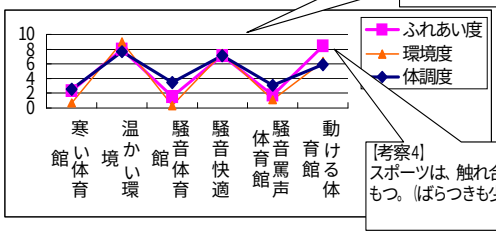
[考察2]
初めての環境は、ストレスに感じるばらつきが大きい

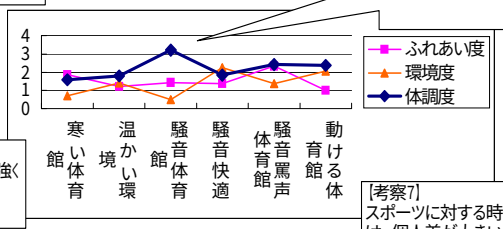




[考察3]
体調の変化は心の変化に比べ、変化の振れが小さい。

[考察5]
騒音(赤ちゃんの鳴き声)に対する感覚は、ばらつきが大きい。

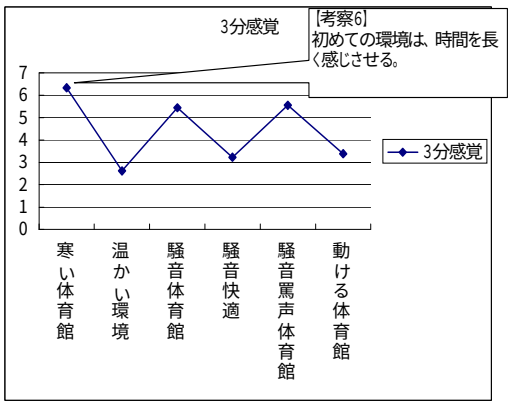


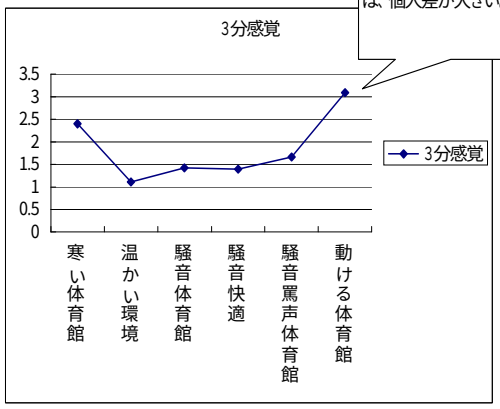


[考察4]
スポーツは、触れ合う感覚を強くもつ。(ばらつきも少ない。)

[考察7]
スポーツに対する時間的感覚は、個人差が大きい。

[考察6]
初めての環境は、時間を長く感じさせる。





【まとめ】

児童に対し、上記の結果を分かりやすく解説し、どのような感想をもったかワークシートに記入させた。

●児童の感想

・○○君のお父さんから、レスキュー隊として阪神淡路大震災の現場に駆けつけた話を聞いた後だったから、かなり真剣に取り組んだ。
・暖かい部屋は、イライラやムカムカはなく、とてもハッピーだった。
・騒音や罵声はとてもうるさかった。こっちまでムカムカした。
・ストレスは、いろんな原因で上がったり、下がったりすることがこの実験でわかりました。寒さを感じないようにしたり、騒音が入らないようにすることでストレスは減ると思います。

・赤ちゃんの鳴き声を、大きな音で聞いた時はいらいらしました。でも、暖かい部屋で人形の赤ちゃんをあやしながら聞くと、それほどイヤに感じませんでした。
・大震災の避難所で、赤ちゃんの鳴き声に腹をたてる人の気持ちはわかる気がしました。
・初めて寒い体育館で時間を計ったときは、すごく長く感じました。
・避難所の様子のビデオを思い出すと、みんな、すごいストレスを感じていたと思うので、攻撃的な発言は想像しやすかった。
・みんな、アサーティブな対応で「子守しましょうか。」とか言っているけど、避難している人のことを考えると、自分もひどい被害を受けているわけだから、それってかなり難しいと思うし、どちらかというと受身的だと思います。
・赤ちゃんの親は、ふだんでも赤ちゃんの夜泣きに困っているので、避難所でどんな言葉がけをしてもらっても、「迷惑をかけている」という気持ちになると思う。
・やっぱり、赤ちゃん用の部屋を用意して、赤ちゃんがいる親とかはそこに集まれば、いろんな相談とかもできると思うけど・・・。

●授業プラン実践者の感想

本実践は、第６学年の教育課程に沿って行った。そのため無理な時間設定はなく、スムーズな授業展開ができた。しかし、「命の大切さ」を実感させる授業とは、教師側の「命の教育を実践していく」という強い熱意が必要不可欠と思われる。そのため、教師自身が特別養護老人ホームに研修に赴くなど、命と向き合う時間を重視した。

また、少子高齢化が進んだ地域においての「命の教育」とは、実際の生活に直結する重要な教育になりつつある。教育の面だけでなく、医療や福祉、交通など数多くの課題があり、新潟や岩手・宮城などで起こった地震では、そのような地域が孤立し問題にもなった。

しかし、そのような地域にも、よさが十分にある。「命」とふれあう大自然に恵まれ、人とのふれあいも幅広く行われている。住民同士が助け合うことは日常的に行われ、助け合うための昔ながらのコツも引き継がれている。今回のプログラムをとおして、地域の人とのふれあいを多く設定し、「人から伝わる命」を実感してほしかった。また、学校が率先して命を守る教育を展開していくことで、学校が地域の安全・安心を守る拠点施設となり、しいてはコミュニティーの中心的役割を担い、結果的には児童の命を守ることにつながればと願っている。

また、今回の実践を通じて「阪神・淡路大震災」が兵庫県にもたらした影響を改めて痛感した。「１・１７」が近づくにつれ、新聞等で報道されるニュースでは 14 年前の苦しみが今なお続いていることが伝えられた。と同時に、人々の記憶から「１・１７」の記憶が薄れ始めているのも事実である。我々、兵庫県の教員として、「１・１７」の出来事を後世に伝えていくことは、重要な責務であると感じている。

【参考・引用文献】

・兵庫県立教育研修所　『学校における心の危機対応実践ハンドブック』　2002
・『理科６下』　啓林館　2004
・『国語６上』　光村図書
・『みんなの保健５・６年』　学習研究社

授業プラン４

メッセージ（生きる力）を発信しよう

西宮市立西宮養護学校高等部

●実践のねらい

自ら発信するメッセージを考える中で、今までとらわれてきた生き方とは別の生き方があることに気づき、自分らしい生き方とはどういうことかを考える。また、本人が知らないうちに勇気と感動を人に与えていることに気づき、自尊感情を徐々に高めていく。

●指導のポイント

◇感動の体験

・「弱音を出し合う」ことで築かれる人間関係があることや、ありのままの自分を受け入れてもらう中で、人は強くなれることを実感させる。
・不安や嫌な事もあるが、創作活動をとおして体や心が自然にどんどん動いてしまうような楽しい時間を味わわせる。
・心の内を写真や活字に置き換える中で発想を変える大切さを味わわせる。
・具体的な作品としてまとめ上げた達成感や、最後までやり遂げた成就感を味わわせる。

◇感性を育む

・気持ちを共有することで、心の交流がさらに深まることに気づかせる。
・創作活動に打ち込む過程で、内面から湧き上がってくる強いエネルギーに気づかせる。
・社会の中で互いに支えあって生きていることや、自己の存在が周囲の人々の人生に深く関わっていることに気づかせる。
・メッセージを発する中で、人に分かってもらう意義や努力が大事だということに気づかせる。

◇想像力の育成

・マイナスイメージからプラスイメージへの発想の転換を考えさせる。
・自分が大切にしてきたものや、今後大切にしたいものをどう人に伝えるか具体的に考えさせる。
・自分はどう生きたいか、これからの自分を考えさせる。

●事前の教員研修

・教師間で自尊感情を高める体験、ストレスを癒す体験をする。
・活動への協力者や関係者との打ち合わせや役割分担をする。

●準備

・サインペン、色鉛筆 、パステル、絵本づくりに必要な道具一式
デジタルカメラ、鏡やミニ三脚等の支援用品、パソコン、プリンター
・教育実習生による、実習での感謝の気持ちと感動を生徒に伝えた授業。
（紙皿絵本「はらぺこ青虫」、絵本「みんながおしえてくれました」、一人一人への自作メッセージ）

【教育プログラムの概要】

１次	○芸術のもつ癒しを体験しながら、自分で自分を癒す方法を知る。 ◆心の解放：彩色でリラクゼーション ・全身像の輪郭線を好きな太さのサインペンで一筆書きの要領で描く。 ・しんどい部分に意識を集中し、自分の身体で疲れている様子を色鉛筆で描きこむ。 ・塗られた体に「色の薬」を塗る。「効きそう」なパステルの色で、上から色を塗り重ね、下の疲れている部分を消していく。
２次	○メッセージを伝える作業を通し、新しい自分を創っていく。　授業プラン ◆テーマ決め ・メッセージのテーマを考え発表しあう。 例）木、空、大地、卒業、命、芽生え、くさのめ、自然、希望、花の種 ◆撮影 ・最初は見当がつかなくても、心が動いた物からどんどん撮っていく。 ◆写真のセレクトと意見交換 ・途中で自分の考えを話し、意見交換しながら視野を広げる。 ◆作品作り ・写真の意味づけを行う。 ・表現の工夫を行う。写真の使い方、文字の大きさ、色、見出し、意味づけの解説。 ・扱いやすさを考える。サイズ、開き方、重さ、枚数など。 ◎Ａ君：テーマ『思い出』　（フォトコラージュ：模造紙２枚分） ・・・友達と過ごした学舎をいろんな方向から撮影。すべてＡ４サイズに紙焼きし、それを切り取り模造紙上で再構成。文字を足し、思い出を大きく表現する。 ◎Ｂ君：テーマ『校歌』　（写真集：100×115㎜ 手のひらＬ判） ・・・卒業にあたり校歌に込められた思いを想像し、自分の感性に合う場面を求めモデルを依頼したり、校外に出掛けたりしながら写真集にまとめる。 ◎Ｃ君：テーマ『プラス思考』　（メッセージ集：130×210㎜） ・・・就職し自立を始めた姉や兄。家族の絆を確認しながら、前向きに生きる思考を模索。自分の生き方が重なる場面を厳選し撮影。メッセージを加え仕上げる。
３次	○生き方について考える。（参加型公開授業） ◆活動を振り返る。 ・「自己紹介」と「写真集のお披露目」 ◆口に筆をくわえて字を書く。 ・星野富弘さんに関する説明を聞き、生き方を知る。 ・書く言葉を決め、各自が担当する文字を決める。 ・一人ひと文字、実際に口に筆をくわえて字を書く。 ・ただ一人で行った仕事が、人の仕事とつながることで、さらに大きな輝くひまわりになることを知る。 ・自分の心の動きや成長を感じる。 ◆詩画集『鈴の鳴る道』（偕成社）を使って　<参照：実践事例集Ⅱ　p101～> ・同じ体験や共感した部分を発表し、自分にとっての「鈴」について考える。 ・星野富弘さんの生き続ける姿そのものが「勇気と感動」を与えていることに気づき、メッセージとなることを、実生活と結びつけながら確認する。

●授業の展開

（導入）

１　学習のねらいについて知る。

これまでの成長を、目に見える形で表現します。制約は三つ。「テーマをもつ」「自分で撮った写真を使う」「人に伝える」以上です。これらの作業過程から、自身の「生きる力」を蓄え、今後の自分の「生き方」を考えます。

（留意点・ポイント）

・安心して自分をだせる雰囲気を作る。
・意見交流はあっても、最終判断は本人の自己選択・自己決定ですすめる。
・写真の使い方やまとめ方は自由とする。絵本形式、BGM 付き DVD、パワーポイント等自分の気に入った形でまとめ、発信する。

（展開）

２　テーマを決める。

今まで生きてきた中で、心に響いた言葉はありますか？　今回の制作にあたってメッセージを発信する側に立ってください。

（留意点・ポイント）

何をテーマにするかは自分と出会う作業であり、自分の選択に自信をもつことをねらう。安心と自信を得させ、自己主張しやすくさせる。

３　撮影する。

さぁ、気持ちいいし、実際に出かけよう。

（留意点・ポイント）

やってみたい意欲を持たせることが重要であり、本当に撮りたいものが撮れるよう、手の支持部や手の動く範囲の工夫をする。次から次へと「伝えたい思い」が広がるように、わくわくする感じを大切にする。

４　写真のセレクトと意見交換を行う。

黒板に貼り出し好きな写真とその他に分け、どこが違うのかどんな印象を受けるか意見交換をしよう！「自分のこだわりや生き方」がわかるかもしれません。他の人にも好きな写真を選んでもらいましょう。

（留意点・ポイント）

生徒同士意見交換する中で、自尊感情が高まる言葉や、それまで見えなかった自分に気づく言葉などは見逃さずに、繰り返し言葉で返す。

５　表現の工夫・意味づけを行う。

気持ちにピッタリな写真を使いメッセージを発信しよう。なぜこの写真なのか教えて。

（留意点・ポイント）

・漠然とした気持ちを整理し、自分にやれるかなという気持ちが、やれるという確信に変わるような経験をさせる。
・どのようにすれば形にできるのか、課題を一つ一つ解決していく経験から学ぶものを大切にする。
・その日の進行具合は誰かに見てもらい、プラスの評価を受け、自己評価をさらに高めて、その日を終える。
・思いの強さも大事であるが、作品としての完成度も追求させる。
・表そうとしている思いを大切にひろう。
・写真の使い方、活字との組み合わせの工夫。
・作品の大きさ、順番、色などの工夫。

（まとめ）

６　完成作品を発表する。

完成おめでとう！楽しめましたか？どんなメッセージを込めましたか？これからもたまに見返したり、足していきたくなるような内容が増えたらうれしいです。

（留意点・ポイント）

作品完成の達成感を味わうとともに、見て欲しい人がいる幸せを感じる。

７　思いを深め、生き方について考える。

星野富弘さんが描くように、字を書いてみましょう。詩画集「鈴の鳴る道」をとおして、自分らしい生き方を考えましょう。

（留意点・ポイント）

自分にはできないとすぐにあきらめずに、いろんなやり方や、人とのつながりを用いて、自分の道を切り開いていく生き方を知る。

自分の存在が周囲の人々の人生に関わっている事に気づき、弱さを出しながら、前向きに生きようとする姿勢をもつ。

人生のでこぼこ道にかかったときに自分を励ます「鈴の音」は、自分にとって何か考える。また、自分の思いを自分の口で語れるよう、待つ姿勢を大切にする。

●授業プラン実践者の感想

本実践は、美術の授業に位置づけて行った。不安やストレスなどから、内にこもりがちな生徒を前に、教師として何ができるか、何とか発想の転換はできないか、意欲を引き出せないかなど悩み、創造的な活動からのアプローチを考えた。

心の解放をねらった「彩色でリラクゼーション」では、しんどい身体部位・心の内を互いに吐露することで、生徒たちは本音を分かち合うことができた。リラックスした雰囲気の中、100 色以上の色の中から今の気持ちにぴったりとくる１色を選ぶ楽しさや、照れながらでも「ずいぶん疲れてるねぇ」「わかったよ」「十分頑張ってるよ」と、自分自身にいたわりの言葉をかける「やさしい時間」に、私の心も共に癒されていた。

特に勢いを感じたのは、テーマを設けデジタルカメラで被写体をさがしに行く姿であった。生き生きして、本当に楽しそうであった。また、時間を共有している中で、「より良く生きる」ための「おまじない」の言葉を教えてもらったことがある。それは自分へのメッセージであり、未来を拓くための心の杖であり、何よりも自分自身を大切にしている姿がうかがえた。そこに、命の力強さを感じることができた。

今後の課題は、メッセージを発信した生徒たちが、そのことをいかに実生活の中で発展させていくか、自分自身や友達の姿を真摯に見つめていけるかであると思う。さらにもう一つ、青年期前半の高等部の生徒と過ごす中で「命の教育」の必要性を強く感じた。小学部から高等部まで、発達段階に応じた「命の教育」に関する支援と配慮が必要であると思う。

【参考・引用文献】

・兵庫県立教育研修所　『「命の大切さ」を実感させる教育プログラム』実践事例集Ⅱ　2006
・星野富弘　『鈴の鳴る道』　偕成社　1986
・隔月刊『セラピスト　2007 Vol.32』　BAB ジャパン出版
・エリック・カール　『はらぺこあおむし』　偕成社　1976
・五味太郎　『みんながおしえてくれました』　絵本館　1983

授業プラン５

仲間っていいな！～力を合わせて、お出かけしよう～

兵庫県立氷上特別支援学校高等部第３学年社会コース

●実践のねらい

クラスの仲間と共に課題やゲームに取り組む中で、仲間の存在に気づき、仲間がいることのあたたかさや心強さを実感する。同時に自らの存在や良さを再確認し、自尊感情を高める。また、地域の公共交通機関や公共施設を利用する体験をとおして、楽しみや興味の幅を広げ、卒業後の余暇活動の充実につなげる。

●テーマ設定の理由

本校高等部では、「社会コース」と「生活コース」という二つのコースを設けている。「社会コース」には、比較的障害の程度が軽く、身辺自立し、卒業後は一般就労を目指す生徒たちが在籍しており、教科学習を中心に取り組んでいる。第３学年の「社会コース」の生徒数は９名である。

この９名の生徒たちは、一般就労希望という共通の目標を持ち、言語理解や日常生活動作における能力はほぼ同程度であると言える。しかし、彼ら一人一人の心理状態や障害特性は様々で、得意なことも困難なこともそれぞれ違っている。相手の気持ちが理解しにくい生徒もいれば、人一倍相手を思いやれる生徒もいる。自分の気持ちをことばで素直に表現できる生徒もいれば、それが非常に難しい生徒もいる。行動のコントロールが難しい生徒、初めてのことに対し緊張が強い生徒、人前に立つのが好きな生徒、自分に自信が持ちにくい生徒……九人九色である。

そんな生徒たちにもやがて高等部卒業の時がやってくる。近年、卒業生の間では、せっかく職に就いても数ヵ月後には離職してしまうケースが目立ってきており、その大きな理由が「人間関係」なのだという。職場でどうやって仲間を作っていけばよいか分からず孤独であったり、不適切な言動で職場の先輩から避けられてしまったりするようである。また、いざ給料をもらっても、自分の生活を豊かにするための上手な使い道が分からず、働いた分だけの喜びを得ることが難しいことから、仕事に対する意欲が続きにくいという実態もある。

「仲間」がいれば仕事は楽しくなり、辛いときも乗り越えられる。「仲間」と一緒に、働いて得られたお金を使って休日に遊びに行くことができれば、気持ちも明るくなる。そしてまた、頑張って働こうという意欲につながるであろう。もちろん、一般就労していく生徒たちだけに限らず、「仲間」の存在は人生を豊かにするはずである。今の人生、そしてこれからの人生をより豊かにしていくために、生徒たちの「仲間づくり」の力を育んでいきたいと心から思い、このテーマを設定した。

●指導のポイント

◇感動の体験

・仲間と協力して行う様々な活動をとおして、仲間と一緒だったからできた、一緒だったから楽しかったという思いを実感させる。
・教員からの支援をなるべく少なくし、自分たちだけでやり遂げたという達成感や満足感を得られるようにする。

◇感性を育む	・人はそれぞれ違っており、また、それぞれに良いところがあるということを認めていく心を育てる。 ・自分には「仲間」がいて、みんなに愛される存在であるということを感じられる心を育てる。
◇想像力の育成	・卒業後の生活においても豊かな人間関係が築けるという自信を持たせる。 ・余暇の時間への楽しみを持たせる。
●事前の教員研修	＜全教員向け＞ ・「命の大切さ」を実感させる教育プログラムの概要やこれまでの実践例を提示し、プログラムの中で行う課題やゲームを実際に体験することで、プログラムに対する理解を得る。 ＜プログラムを共に実践する教員向け＞ ・１次から４次までの各プログラムの活動を事前体験し、活動内容の効果について検討し、必要であれば改善する。 ・個々の生徒の発達段階や実態に応じた支援や援助の方法を話し合う。

【教育プログラムの概要】

事前	○仲間って何だろう？ ・「仲間」ってどういう人のこと？ ・アンケート
１次	○あたたかい仲間作りのために ・あったかことばとチクチクことば ・ＷＡＮＴＥＤ！ゲーム ・いいところみつけ
２次	○協力してやりとげよう ・協力ジェンガ ・トラストウォーク ・絵本の鑑賞　長谷川義史　著「いいからいいから①」2006 年 10 月／絵本館 「いいからいいから②」2007 年　８月／絵本館 「いいからいいから③」2008 年　９月／絵本館
３次	○話し合って決めよう ・話し合いのルールを知ろう　～上手に話し合いをすすめるために～ ・お別れする先生への贈り物を考えよう ・学部集会の内容を企画しよう
４次	○仲間と一緒にお出かけしよう　授業プラン ・行き先を決めよう ・行き方、時間、費用を調べよう ・気をつけること、約束ごとを考えよう　～楽しく安全なお出かけにするために～ ・仲間と一緒にお出かけしよう
事後	○お出かけの感想を話し合おう ・お出かけの感想 ・アンケート

●授業の展開

クラスの仲間と一緒にお出かけをしましょう！これまで、「仲間づくりの授業」として、クラスのみんなでゲームをしたり話し合いをしたりしてきました。話し合いでは、〇〇先生への贈り物や学部集会の内容についてみんなで決め、決めたことを実現させてきました。
今回、みんなに話し合って決めてもらうのは、「お出かけの計画」です。行き先・何をするか・時間・行き方・費用など、すべてみんなに任せます。先生たちは、何も言いません。みんなだけでお互いに協力して、「お出かけの計画」をしてください。

（留意点・ポイント）
１次から３次に行ってきた活動を思い出させ、「自分たちだけの力」で話し合いを進め、計画していく意欲につなげる。
主指導者１名、副指導者３名の計４名が協力して指導にあたることとするが、こちらからの働きかけはできるだけ少なくし、話し合いの行方を見守る。生徒同士の関わりを大切にし、「仲間」を意識する雰囲気作りをする。

●生徒の活動の様子（話し合いの流れ）

１　司会者を決める

２　行き先の希望を聞く
・ゆめタウン（ショッピングセンター）
・ゆー坊（カラオケ）
・柏原フレンドボウル（ボウリング）
・福知山ジャスコ（ショッピングセンター）

３　行き先の検討①
・ゆめタウンはいつも行っているから、わざわざお出かけで行かなくてもいいのでは？
・ボウリングならみんなで楽しめる
・ボウリング場の近くは、お昼ごはんを食べるところがない
・ボウリング場の近くにも、コンビニやスーパーならあるが…？
・カラオケは嫌いな子がいる
・福知山は遠いのでは？　時間内に行って帰れるのか？

４　何を使って行くか？
・電車
・バス（スクールバス、福祉バス）
・徒歩

５　電車やバスの時間は？
・時刻表を調べよう
・インターネットで調べよう

６　行き先の検討②
・丹波市内？　丹波市外？
・柏原フレンドボウルくらいが、遠すぎなくて良い
・黒井駅から柏原に出て徒歩でボウリング場に行くのも、福知山まで行くのも、時間的にはそんなに変わらないはず
・せっかくみんなで「お出かけ」するんだからちょっと遠出してみようよ？

７　行き先は「福知山」にしませんか？
・「賛成」（全員一致）

８　電車の時間は？
・いったん学校に集合してからだと時間が遅いので、それぞれ最寄り駅から乗り込もう
・僕は一人で電車に乗れるか心配…
・一人で乗るのが不安な子は、友だちと一緒に乗れる駅まで自転車で行って乗ろう
・三田から来る子が乗っている電車にみんなも乗り込む

・三田から来る子たちが乗っている電車は早すぎるのでは？
・三田から来る子たちに、電車を１本遅らせてもらったらどうか？

９　時刻表を使って調べよう
・自分が乗る駅は何時何分発？

１０　どこで会えばいい？
・何両目に乗るか決めておこう
・混んでいたら約束の車両に行けるかな？
・福知山駅（終着駅）の改札口にしたらどうか？

１１　ジャスコへはどうやって行く？
・往復運転をしているバスがある
・バスの時刻表を調べよう

自分たちで調べた時刻表と福知山ジャスコの店舗一覧

１２　ジャスコではどうやって過ごす？
・買い物（本、雑貨、ＣＤ、おもちゃ等）
・ゲームセンター
・ジャスコにどんな店があるか調べよう

１３　ジャスコではグループに分かれて行動してはどうか？
・行きたい店によって、グループに分かれよう
・グループが合流することもある
・現地でグループに分かれよう

１４　お昼ごはんはどうする？
・マクドナルド
・うどん
・フードコートがあるので、席だけ確保してみんな一緒に座って、あとはそれぞれ好きなものを食べよう

１５　帰りの時間を決めて、日程を整理しよう
・帰りは、三田の子がいつも乗る電車に合わせたらどうか？
・その電車に乗るためには、何時のバスに乗ればいいか
・そのバスに乗るためには、何時に集合してバス停に移動すればいいか

１６　集団行動だから、ルールがいると思う
・電車の中でどうするか
・困ったときはどうするか（電車に乗り遅れたら…等）

１７　最後に、決めたことを整理しよう
・みんなで行き先、行き方、時間など、一つ一つ確認

●授業プラン実践者の感想

「みんなだけで決めてください」「すべてみんなに任せます」「先生たちは何も言いません」。そう私が投げかけると、９人の生徒たちの目がみるみる輝いていった。「ほんまに行けるん？！」「どこに行ってもいいん？！」「じゃあ、大阪！」「じゃあ、北海道！」「そんなん無理やろう！」「常識の範囲内で！」……各々、思いを口にした。

「みんなで話し合って決めてね」「上手な話し合いの仕方ってどんなんやった？」の問いかけに、生徒たちは３次で学習した「話し合いのルール」を思い出す。

・意見があるときは手を挙げる
・司会に当てられてから話す
・他の人が話しているときはしゃべらない
・（話し合いが難航して）イライラしたら深呼吸
・どうしてもしんどかったら手を挙げて教室から出ても良い

以上のルールを確認し、「では、どうぞ！」と「話し合い」を生徒たちに託した。すると……口々に意見を言いだす、立ち上がる。「座れよ！」「だまって！」の声、笑い声。確認したばかりの「話し合いのルール」はすっかり頭から離れてしまっている様子。騒々しく、しかし元気と活気にあふれた「話し合い」が始まった。

これまで経験してきた「話し合い」の仕方を思い出し、その記憶を頼りに懸命に進めようとする生徒たちだったが、話の方向はなかなか定まらない。長い回り道の末、ようやく「行き先」が決まったのは「話し合い」が始まってから約１時間後のことであった。しかし、みんな終始生き生きとしていた。意見を出し合い、知恵を出し合い、何とか「お出かけの計画」をまとめようと一生懸命になっていた。その姿は大変感動的であった。

私たちはつい、生徒たちが失敗や間違いを起こす前に「それはダメ」「こうすればいい」と、手助けしてしまう。今回の「話し合い」の中で、私は何度も「なんでそんな話になるの！」「まずはこれを決める！次はこれを決める！」と言いたくてたまらなくなった。もちろん、場合によっては、必要な時に適切な支援の手を差し伸べることは重要である。「分からない」「難しい」「できない」ことが重なると、生徒たちはやる気や自信を失ってしまう。失敗経験が重なってしまう前の少しの手助けで、彼らに「大丈夫」「あなたはできる」という、安心感を与えることができるのなら、それは大変意味のあることであろう。

しかし、今回の場合は、手助けしたい気持ちをぐっと我慢し、見守る姿勢を貫くことが、生徒たちの関わり合う力、知恵を出し合う力、主張する力、譲り合う力を育てたのだと感じている。授業中、指導者が生徒たちの活動を見守ることに専念した結果、非常に時間はかかったが、生徒たちは自分たちだけの力で「話し合い」をやりきった。そしてきっと、彼らの中には「自分たちだけの力でできた」という達成感や満足感がわきあがっていたはずである。

この「話し合い」に至るまでに、生徒たちは「ＷＡＮＴＥＤ！ゲーム」「協力ジェンガ」などのゲームや、「先生への贈り物」についての話し合いをとおして、みんなで一緒に何かに取り組む楽しさや、力を合わせて物事を成し遂げる喜びを積み重ねてきた。けんかやトラブルももちろんあった彼らだったが、本プログラムの活動に取り組む中で、お互いを認め、許し合う関係を築いていくことができた。関わり合い、影響し合い、学び合う集団として成長し、「仲間づくり」の力を身につけていった生徒たち。彼らの成長の足跡がつまったこの「お出かけの計画」を実行する日が、生徒同様、私もとても楽しみである。

【参考・引用文献】

・長谷川義史　『いいからいいから①』　絵本館　2006
『いいからいいから②』　絵本館　2007
『いいからいいから③』　絵本館　2008
・上野一彦　岡田智　『特別支援教育　実践ソーシャルスキルマニュアル』　明治図書　2006
・田上不二夫　今田理佳　岸田優代　『特別支援教育コーディネーターのための対人関係ゲーム活用マニュアル』　東洋館出版社　2007

平成20、21年度「『命の大切さ』を実感させる教育プログラム実践推進委員会」委員名簿

区　分		氏　　名	所　　属　・　職　　名
教員委員	小学校	細見　　博友	三田市立高平小学校　　教　　諭
		大橋　　尚人	三木市立緑が丘東小学校　　教　　諭
	中学校	浦瀬　　志津	芦屋市立精道中学校　　教　　諭
		加藤　　正保	西宮市立大社中学校　　教　　諭
	高等学校	吉田　久美子	県立姫路聴覚特別支援学校　主幹教諭
		赤松　久美子	県立農業高等学校　　主幹教諭
学校委員	小学校	福田　　和博	小野市立下東条小学校　　校　　長
	中学校	野田　　暢子	加西市立泉中学校　スクールカウンセラー
	高等学校	中村　　恵子	西宮市立西宮養護学校　　教　　諭
事務局委員		冨永　良喜（委員長）	心の教育総合センター　　所　　長 兵庫教育大学大学院　　教　　授
		古川　雅文（副委員長）	心の教育総合センター　　主任研究員 兵庫教育大学大学院　　教　　授
		水田　　時男	県立教育研修所　　教務部長
		市橋　真奈実	心の教育総合センター　　指導主事（平成20年度）
		黒河内　雅典	心の教育総合センター　　指導主事
		竹原　　一典	心の教育総合センター　　指導主事（平成21年度）
		植田　　正吾	不登校対策推進研修員（平成20年度）
		道木　　尚	不登校対策推進研修員（平成21年度）

平成20、21年度「小・中・高等学校『命の大切さ』を実感させる教育実践研究講座」の受講者名簿（一部）

氏　　名	所　　属　・　職　　名
田中　ひとみ	小野市立下東条小学校　　教　　諭
加藤　真由美	明石市立鳥羽小学校　　養護教諭
樹岡　　正宏	新温泉町立浜坂東小学校　教　　諭
坂本　　純子	西宮市立西宮養護学校 教諭（現 西宮市立高須小学校 教諭）
酒井　　雅代	県立氷上特別支援学校　　教　　諭

「命の大切さ」を実感させる教育プログラム実践推進委員会　設置要項

1　目　的

平成 17 年度から平成 19 年度において、激しく変化する社会の中で時代を超えても変わることのない「命の大切さ」を子どもたちに実感させるため、各発達段階に応じた教育プログラムを研究・開発してきた。

しかし社会では、依然としていじめの問題など子どもの命に関わる事件や事故が起こっており、子どもたちに「命の大切さ」を実感させるため、学校教育の中で人と人との絆をさらに深め、自分とともに他者を慈しむ気持ちを育んでいくことが必要である。

以上のことから標記の実践推進委員会を設置し、これまでの研究成果をもとに、「命の大切さ」を実感させる教育プログラムを活用し、特に人と人とのつながりを深め、互いに理解し合える豊かな人間関係を築く力を育成する実践を推進することをとおして、学校における「命の大切さ」を実感させる教育の一層の充実を図る。

2　組　織

(1)　委員会は、次の委員により構成する。

・　教員委員　　６名程度
・　学校委員　　３名程度
・　事務局委員　　６名程度

(2)　各委員は、県立教育研修所長が委嘱する。

(3)　事務局は、県立教育研修所心の教育総合センターに置く。

3　期　間

この委員会の設置期間及び委員の任期は、要項の施行の日から平成 22 年 3 月 31 日までとする。ただし、委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

4　任　務

各委員は以下の任務を行う。

(1)　教員委員は、事務局委員との研究協力体制のもとに、初年度には、各校種ごとの「命の大切さ」を実感させる教育プログラムに基づいた授業プラン及び年間実施計画を策定する。次年度には、年間実施計画に従って各校で実践し、その成果をまとめる。

(2)　学校委員は、教員及び地域との連携のもと学校全体でプログラム推進を行う観点から教員委員の実践案を検討し、助言を行う。

(3)　事務局委員は、委員会の研究・実践方針を立案し、委員会の活動を統括する。

5　経費等

予算の範囲内で経費等を支出する。

附則

この要項は、平成 20 年 7 月 1 日から施行する。